



Saitobaru Archaeological Museum of Miyazaki Prefecture



宮崎県立西都原考古博物館

研究紀要

第8号

【東アジア地域の学術文化交流促進事業に伴う講演会要旨】

陳 有貝

談台灣的史前漁業文化（台湾の先史漁撈文化を語る）…………… 1

藤木 聡

黒潮の先史漁撈文化を語る…………… 13

【論文・資料紹介】

犬木 努・近藤麻美

西都原171号墳出土蓋形埴輪の再検討 ―立ち飾り部の製作技法を中心として―…………… 23

甲斐貴充

宮崎県持田古墳群出土三葉環頭大刀について…………… 35

福田泰典

新名爪に残る城郭遺構について…………… 43

安藤正純

「日向国神代絵図」にみえる湧水について…………… 51

藤木 聡

有馬七蔵・本山彦一・藤森栄一と幻の有馬コレクション…………… 59

嶋田史子

旭台地下式横穴墓出土鉄鏃におけるX線CT撮影を用いた線刻・穿孔判別の有効性について…………… 69

【研究ノート】

崎田一郎

隼人の楯の文様についての一考察（2）…………… 74

【体験講座成果報告】

島木良浩

体験「カラムシから布をつくろう」…………… 81

2012.3

宮崎県立西都原考古博物館
Saitobaru Archaeological Museum of Miyazaki Prefecture

序

本書は、宮崎県立西都原考古博物館の平成23年度における研究紀要です。

開館以来8年目を迎えた当館では、宮崎県民をはじめ多くの皆様の御支援を受けながら、館運営に携わる全職員が一丸となり、館事業の一層の充実に向けて日々努力を重ねているところです。

なかでも、考古資料等の調査・研究は、当館の事業を根本から支える重要な活動であり、職員一人ひとりがたゆまず研鑽に努め、取組を進めているものです。

本年度もこうした調査・研究の成果を刊行できる運びとなりました。皆様の御批判や御指導を賜り、展示や講座等のさらなる充実に資することができれば幸いです。

また、本書は館外の研究者の方々からも御寄稿いただいております。このような連携は、本県の歴史の解明や当館の発展の可能性を広げていく上で欠かせないものであり、御多忙の中御執筆いただいた方々に深く感謝申し上げます。

おわりに、所載論文等の執筆にあたり、資料や情報の提供に御協力いただきました各関係機関や日頃より当館の運営に御助力をいただいている多くの方々に、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

宮崎県立西都原考古博物館長 稲 元 雅 彦

東アジア地域の学術文化交流促進事業に伴う講演会要旨

談台灣的史前漁業文化

陳 有貝

一、前言

台灣是一個位於東亞大陸邊緣的海島，面積約 3.6 萬平方公里。海島與東亞大陸間相隔著台灣海峽，海峽的一般寬度約 200 公里，不過平均深度僅有 60 公尺。在更新世時期，海水面下降，台灣海峽有不少地方變成陸地，有人類與動物活動。現在還常常有漁民在海峽內打撈到當時的各種動物化石。台灣的東部則為太平洋，其深度達數千公尺以上，和西部的海岸景觀也大為不同。

一般而言，台灣島的海岸線相當平直，但西側海岸多屬砂岸淺灘，東側岸則多屬沿岸，多深海，兩岸的漁業資源大不相同。另外值得一提的是，不像太平洋中常見的小島一般，台灣島周緣並沒有太多的珊瑚礁，僅有分布於台灣南端一帶，其中又以墾丁地區最為集中。當然這一帶的自然景觀當然又和西岸與東岸不同。

另一方面，如果看台灣的史前資料，從新石器以來主要的生業形態雖然都是以農業為主，不過漁業仍然有一定的重要性。和漁業有關的證據遠從舊石器時代即有發現，到了新石器時代則有相當程度的擴散，而且各種漁業技術可能和各地區的環境有相當程度的對應。

本稿將試著整理歸納台灣地區所出土的史前漁業重要器物，並以之探討其相關問題。

二、台灣的史前漁具

台灣的史前時代被分為舊石器時代、新石器時代與鐵器時代等三個階段，最古的漁具資料出現於舊石器時代的晚期，在八仙洞遺址中出土了骨製的「兩頭尖器」（圖 1）。這種器物的特徵是兩端被磨尖，器長約 2~5 公分。根據歐洲的民族誌資料，研究者認為這是一種釣魚用的魚鉤（宋文薰 1969）。它的使用方法是將釣線綁在器物中心處，再用餌包覆，等魚吃下後，拉緊釣線，魚鉤便成橫置狀態，以卡在魚的喉嚨。在日本學界也稱之為「倒 T 型魚鉤」。

不過問題是大部分的「倒 T 型魚鉤」在器物的中心處會有一道凹槽，以用來緊緊的綁住釣線，然而八仙洞遺址的「兩頭尖器」卻沒有這道凹槽，而且也缺乏釣魚用的另一個必要器具—釣墜，所以八仙洞的「兩頭尖器」是不是「倒 T 型魚鉤」仍存有疑問。

但是無論如何，因為八仙洞遺址仍出土相當多的魚骨，所以可以知道台灣舊石器時代晚期仍有一定的漁業技術，只是對於其捕魚方法仍有不明之處。

到了新石器時期，農業可說是當時最主要的生業型態。不過，由於台灣四面環海，島內亦有溪流、湖泊，所以可說某個程度的漁業仍然是存在的。

根據台灣目前的考古出土資料，島內史前時期的漁業相關遺物大致可分為網墜和魚鉤，網墜的出土數量較多，依照其外型可分為兩端型、砗磲型、卵型、管狀等，在材質方面大部分是石製與陶製。另外也有少數的骨製或鐵製(年代較晚)的魚鉤。分述如下：

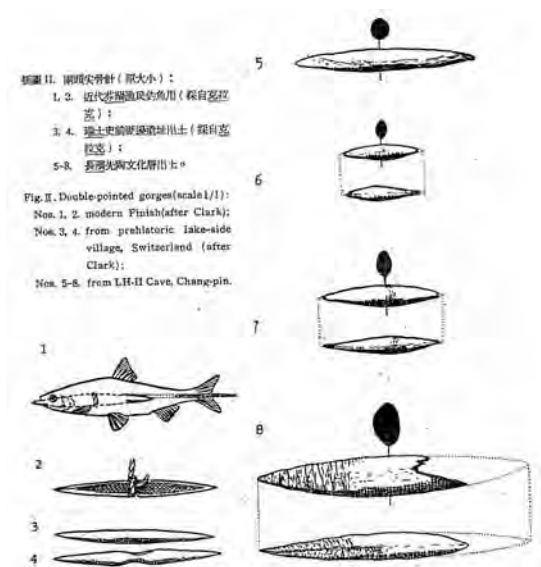


圖 1 兩頭尖器

5-8 為八仙洞遺址出土(宋文薰 1969)

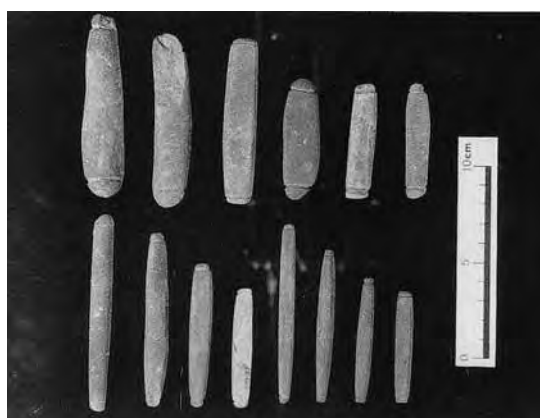


圖 2 兩縊型網墜(李光周等 1985)



圖 3 砧碼型網墜(李坤修 2005)



圖 4 卵型網墜(李光周等 1985)



圖 5 管狀陶網墜(黃士強等 1987)

1. 兩縊型石網墜 (圖 2)

本類也被成為揚子江型，多選擇以長條形石子製成，長約數公分，重約 10 克左右，特徵是器身兩端各有一個圈狀的凹槽。根據研究，這種器物的功能是做為投網用的網墜（陳有貝 2007）。也有在器身上有三圈或四圈凹槽者，但是出土所佔的比例很低。此外，最近在西海岸的中部發現了一些陶製的兩縊型網墜，對於其來源的相關課題研究將是很重要的資料。

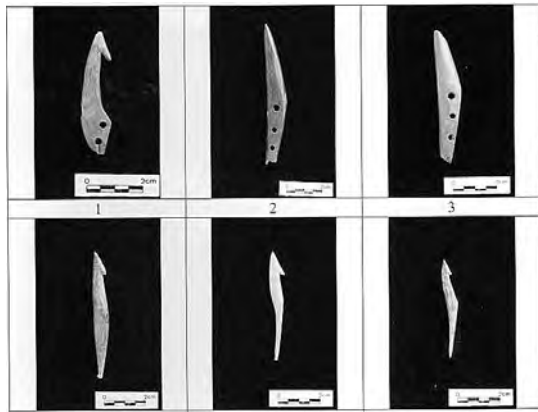


圖6 結合式釣鉤(李坤修 2007)



圖7 單式釣鉤(李坤修 2007)



圖8 現在漢民族的漁網與管狀陶網墜



圖9 現在漢民族的投網

2. 砵碼型石網墜 (圖3)

本類網墜多選擇以較扁的橢圓形石子製成，小件者約 2 公分，大者在數公分以上，主要特徵是器物的兩側邊各帶有缺刻（兩個以上缺刻者亦有）。台灣考古學上並未特定這種器物是用於何種漁具，或有認為可能是如流刺網、拉網等的網墜。台灣砵碼型網墜的缺刻大部分是位於橢圓形石子的兩個長邊（短軸型），這點和日本之缺刻多見於短邊的網墜（長軸型）不同。缺刻位於短邊的砵碼型網墜在台灣的花蓮地區有一些出土（劉益昌、趙金勇 2010）。

3. 卵型石網墜 (圖4)

本類網墜多選擇以橢圓體狀石子製成，體積較大，是各類網墜中最重者。主要器物特徵是器身上帶有一圈以上的凹槽，或彼此垂直交叉之兩圈凹槽。但事實上，這類器物的用途仍有頗多疑點。

4. 管狀陶網墜 (圖5)

本類為陶製，器身中空，長度約 4 公分，重量約 3-6 公克，主要見於台灣東北地區的蘭陽平原鐵器時代遺址，年代可能僅在數百年以內（黃士強等 1987）。另有一類之外型較為粗厚，形狀頗似管狀陶網墜，但出現的時代更晚，明顯不是本土製，而是晚近漢民族所帶入的。

5. 魚鉤 (圖6~7)

台灣史前時代的魚鉤數量頗少，依其外型有倒 T 型、結合式與單件式魚鉤，材質多為骨角製，在鐵器

時代以後則有鐵製的單件式魚鉤。倒 T 型魚鉤主要以台灣島南端的鵝鑾鼻遺址所發現者為典型。結合式或單件式者以南部的龜山遺址和東南海岸的舊香蘭遺址較為典型，其年代大約在距今 1500 年前左右（李匡悌 1989；李坤修 2007）。

三、討論

（一）關於功能

1. 首先就兩縊型石網墜而言，過去筆者曾經認為這是用於投網用的網墜（陳有貝 2007）。根據民族學資料，投網是一種使用於湖泊、河川或是淺海地區的捕魚技術，這種技術可以由個人來操縱使用，但是因為產量小，一般只是農民的副業。由於兩縊型網墜在台灣的分佈很廣，而且多發現在新石器時代的遺址中，所以這個現象也印證了新石器時代的台灣主要屬農業社會的推論。

2. 關於砧碼型石網墜，從其出土的分布地看來，主要是散佈於東海岸一帶，時代以新石器時代為主，並延伸到鐵器時代早期。而且從各方面看來並不和區域文化傳統有關，而是可能和地區的環境較有關聯性。如本文一開始所言，台灣東海岸通常是為沿岸地形，很少較淺的大陸棚，多屬較深的海岸，所以這就表示砧碼型網墜和這類深海海岸的捕魚法較有關。

由於考古學者多主張現代台灣原住民即為史前時代遺址遺留者的子孫，因此台灣考古研究也常以台灣原住民的民族風俗為參考。近代居住於台灣東海岸的原住民族多為阿美族，根據民族調查資料，可以知道在他們的捕魚技術中，可能和砧碼型網墜有關的是拉網與釣魚。但因為史前並沒有太多的魚鉤發現，因此砧碼型網墜是用於拉網之網墜的可能性較高。

3. 關於卵形石網墜，主要出現在台灣南部墾丁一帶（李光周等 1985），雖然目前無法確認是用於何種漁具，但從環境的觀點而言，這大概是和墾丁的珊瑚礁海岸地形有關，推測是這個地區的某種特殊漁業技術的產物。

4. 管狀陶網墜主要僅見於台灣東北部的蘭陽平原，年代限於鐵器時代較晚階段。在型態上，這種網墜和漢民族的網墜類似，因之他們的漁法可能也有些關聯性。但是這種網墜的重量比較輕，或許是用於較小的漁網。

5. 台灣所見的史前魚鉤相當少，顯示釣魚技術在史前台灣並不流行。為何這種人類社會一般極為常見的漁業技術卻少見於史前台灣島，其原因現在並不明。目前發現有具體魚鉤的遺址例如有龜山遺址和舊香蘭遺址等，這兩個遺址都在海邊，所以判斷當時的釣魚場所應在海邊。

（二）關於來源

渡邊誠（1983）曾就日本地區的漁法提出整體性的看法，他將繩文時代的漁業大致分成外洋性與內灣性（包括淺海、內陸河川、湖泊）兩類。外洋性的特徵除了使用釣鉤外，尚有魚鏢等，內灣性的特徵除了魚鏢外，主要是網漁業。網漁業的網墜主要可以分成陶製片型、石製砧碼型與陶製帶槽型等三類，此外還有管狀陶網墜等。

關於這些網墜的年代，他認為有從陶製片型發展成石製砧碼型，再至陶製帶槽型的傾向，這可能是因為適應於內灣砂岸的漁業漸漸進入內陸有砂石的河川，所造成的結果。至於管狀陶網墜則是彌生時代隨著稻作的路徑，由中國一帶所傳來。而外洋性漁業則以釣鉤為主，可分單式釣鉤與結合式釣鉤，多分布於環渤海灣沿岸一帶。

在中國東部方面主要以陶製網墜為主，可分為黃河流域的管狀型，以及長江流域的揚子江型陶網墜，前者於彌生時代經朝鮮半島傳入日本；後者於彌生時代後期少量傳入九州西北部（渡邊 1983）。其所謂的揚子江型陶網墜，雖然是陶製，但形狀類同於台灣所稱的兩縊型網墜。更值得注意的是同型的石製品（揚子江型石網墜）則分布於東南沿海地區及長江以南一帶，其與揚子江型陶網墜勢必有所關連。

此外，中國亦有石製砧碼型網墜，分長邊帶缺刻與短邊帶缺刻兩類，前者多見於中國內陸地區；後者多在東北部（甲元 2001）。

在琉球方面，則以貝製網墜最為常見，其使用追逐漁法，貝網墜的效果除了可以讓漁網沉入水底外，還利用它所產生的聲響來使得魚群慌亂，以進入網內。

在太平洋地區，各個小島多可見各種型態的釣鉤，可知以釣鉤釣魚是該地區最發達的漁業方式。

根據以上之台灣周邊各區域的史前漁業資料，可對台灣史前漁業的傳播問題有如下的認識：

1. 關於廣布於台灣各地的兩縊型石網墜可能是來自中國大陸南方，其早期態應該是所謂的揚子江型陶網墜，後來於中國東南區域演變成石製品，進入台灣之後變成外形較細長的兩縊型石網墜。目前雖然無法說明揚子江型陶網墜的功用是否和台灣作為投網用的兩縊型石網墜相同，但是從其形態的類同，可以想見兩者是有類型演變上的親緣關係。

2. 關於砧碼型石網墜，由於台灣皆以短軸型為主，所以顯然也是和中國內陸或南方較有關，而和中國東北方或日本地區的長軸型不同。不過雖然在傳播上可以看到大致的來源方向，但是對於其功能仍有相當大的疑問。

3. 關於卵形石網墜，因為主要只出現在台灣南端一帶，所以很難說明和東亞大陸或日本等區域的傳播關係。如前文所言，目前僅能認為可能是和當地的珊瑚礁石灰岩地形的捕魚技術有關。

4. 關於管狀陶網墜，因為在台灣只出現在年代較晚的鐵器時代，而且和過去的新石器時代網墜幾乎沒有關係，所以很清楚地這種網墜是從外來帶入的。根據外形，其和中國北方或日本的管狀陶網墜非常類似，但因為當時的台灣與日本沒有顯著的交流關係，所以極可能是與漢民族之接觸過程中所產生的。

5. 在魚鉤方面，史前台灣極少發現，目前有具體發現魚鉤的遺址以龜山遺址和舊香蘭遺址最著名。這兩個遺址除了都在海邊外，它們的年代相近，出土遺物的內容亦類似。而且應該注意的是，舊香蘭遺址還出現了台灣其他地區非常少見的工藝技術，例如銅器與玻璃的製造等。這個現象說明這類遺址可能是當時外來移民所留下的，所以其出土的魚鉤應該也可以放在這個架構中理解。換句話說，使用魚鉤來釣魚的技術是突然由外來傳入的。至於其來源，在本文所列資料中，是和東北亞的魚鉤較為相同，但兩地相隔頗遠，難以證明有傳播關係。會不會是和東南亞有關，則仍待研究。

四、結論

本文歸納了台灣史前時代所出土的各種漁業用具資料，如兩縊型石網墜、砧碼型石網墜、卵型石網墜、管狀陶網墜與魚鉤等。文內首先探討這些遺物在功能上所代表的意義，其次則從傳播的觀點，探討這些遺物的來源。結論大致認為農民於內陸河川湖泊或淺海地區使用投網捕魚為史前台灣常見的漁業技術，但在不同的小區域環境亦有其他的漁業技術。主要漁業技術的傳播來源可能出自中國南方，但其他區域亦有單獨傳入者，此外生態環境也是影響漁業技術的要因之一。

台灣近年因考古發掘所出土的資料急速增加，時時亦有新的發現，所以未來應可期待根據新證據而提

出進一步的說法。

〔 引用文献 〕

- 甲元真之 2001 『中国新石器時代の生業と文化』中国書店、福岡。
- 宋 文薰 1969 「長濱文化—台灣首次發現的先陶文化」『中國民族通訊』9、pp.12-27。
- 李 光周、鄭 永勝、凌 平彰、陳 維鈞、韓 旭東、陳 有貝 1985 『墾丁國家公園考古調查報告 內政部營建署墾丁國家公園管理處』國立台灣大學人類學系。
- 李 匡悌 1989 『鵝鑾鼻公園地區史前漁撈活動研究』內政部營建署墾丁國家公園管理處。
- 李 坤修 2005 『台東縣舊香蘭遺址搶救發掘計畫期末報告』台東縣政府文化局、國立台灣史前文化博物館。
- 李 坤修 2007 『台東縣舊香蘭遺址搶救發掘計畫第二期計畫期末報告』台東縣政府文化局 國立台灣史前文化博物館。
- 屈 慧麗、楊 小青、科博館考古團隊 2011 「梳理的文明—再看西墩里牛罵頭文化特色」『2010 台灣考古工作會報研討會論文集下冊』10-II-1—10-II-23。
- 陳 有貝 2007 「史前台灣的兩盞型網墜與投網技術」『國立台灣大學考古人類學刊』67期、pp.117-155。
- 渡辺 誠 1983 『縄文時代の知識』東京美術、東京。
- 黃 士強、曾 振名、陳 維新、朱 正宜、陳 有貝、顏 學誠 1987 『蘇澳火力發電計畫 環境美質文化及社會經濟 第三篇 考古文化篇』台北。
- 劉益昌、趙金勇 2010 『花崗國中校舍新建工程遺址搶救發掘計畫成果報告書』花蓮縣文化局。

台湾の先史漁撈文化を語る

陳 有 貝

1. はじめに

台湾は東アジア大陸の側に位置する島で、面積は約3.6万平方キロメートルである。島と東アジア大陸の間は台湾海峡で隔てられ、海峡幅は約200キロメートルあるが、深さは平均すると僅か60メートルである。更新世時代に海水面が下がったため、台湾海峡の多くが陸地になり、人類や動物の活動する舞台となったと考えられている。現在でもよく海峡内で更新世の陸上動物の化石が漁民によって引き揚げられている。台湾東部は太平洋であり、その深さは数千メートル以上にも達し、西部の海岸景観とは大きく異なる。

一般的に、台湾の海岸線は平らでまっすぐであるが、西側海岸の多くが砂岸の浅瀬に属す一方、東側のほとんどは沿岸に属して深海が多く、兩岸の漁業資源は全く異なっている。それ以外に取り上げておきたいのは、太平洋でよく見られる一般的な島々とは異なり、台湾周辺にはサンゴ礁がほとんどなく、台湾南端の一带にのみ分布し、中でも墾丁地域に最も集中していることである。当然、この一带の自然景観もまた西岸と東岸とで異なっている。

一方、台湾の先史時代の資料を見ると、新石器時代以降の主な生業形態は農業であるが、漁撈も一定の重要性を担っていたとわかる。漁撈に関係する証拠は、旧石器時代から発見されており、新石器時代でさらに広がり、また各種の漁撈技術は各地域の環境に合わせてそれぞれに変化を見せている。

本稿では、台湾地域で出土した先史漁撈の重要遺物によってそれらに関連する問題についての探求を試みた。

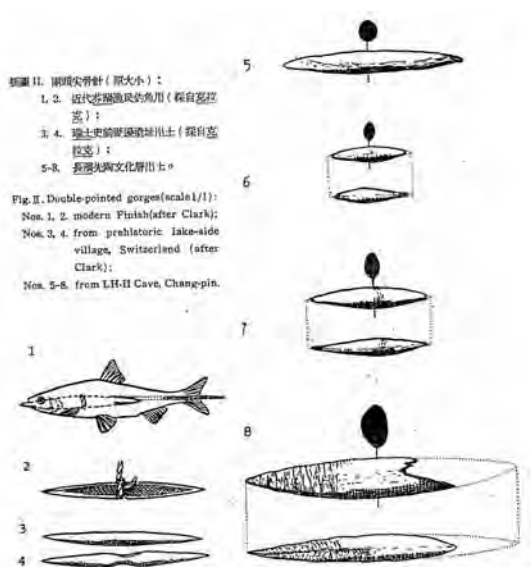
2. 台湾の先史時代の漁具

台湾の先史時代は、旧石器時代、新石器時代、鉄器時代の3つの段階に分けられる。最古の漁具資料は旧石器時代末期のもので、八仙洞遺跡から出土した骨製の「両頭尖器」である（第1図）。その特徴としては、両端を鋭く尖らせている点であり、長さは約2～5cmである。ヨーロッパの民族誌資料によって、これは魚釣りの際に使用する釣り針の一種であると考えられている（宋文薰1969）。使用方法は、器物の真ん中を釣り糸で縛り、全体を餌で包むものであり、魚が餌に食いつくと釣り糸が引っ張られ、「両頭尖器」が横倒しの状態で喉に引っ掛かる仕組みである。日本の考古学界では、これを「逆T字形釣り針」とも呼んでいる。

しかし、問題なのは、大部分の「逆T字形釣り針」の中央部には釣り糸をしっかりと縛り付けるための溝があり、八仙洞遺跡に出土した「両頭尖器」にはこの溝が見られない点である。また釣りの際にもうひとつ必要とされる錘が発見されていないため、八仙洞の「両頭尖器」が「逆T字形釣り針」であるかどうかについては疑問が残る。

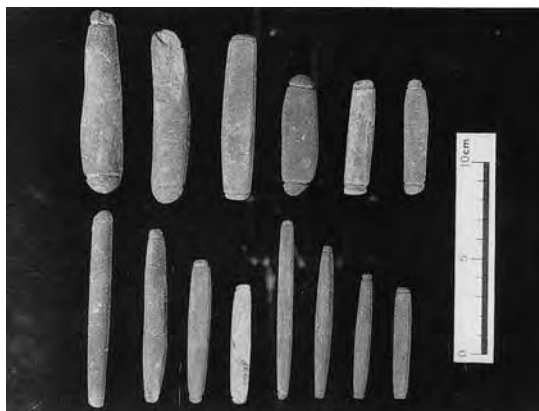
いずれにしても、八仙洞遺跡には魚骨が多く出土していることから、漁法に不明点を残すとはいえ、台湾の旧石器時代末期において、漁撈の技術があったことがわかっている。

新石器時代に入り、農業が主な生業形態になる。しかしながら、周辺を海に囲まれた台湾においては、



第1図 両頭尖器

5-8：八仙洞遺跡出土品(宋文薰 1969)



第2図 両縊型石錘(李光周等 1985)



第3図 砧碼（分銅）型石錘(李坤修 2005)



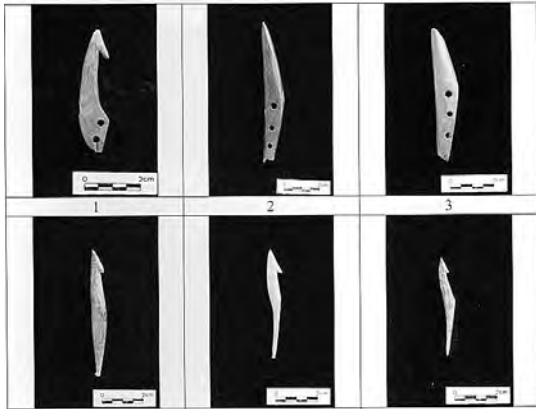
第4図 卵型石錘(李光周等 1985)



第5図 管状土錘(黃士強等 1987)

島内に溪流や湖もあるため、ある程度の漁業は依然として存在していたと言える。

これまでの台湾における考古学の資料によると、先史時代における漁撈関連の出土品は錘と釣り針に分けられ、錘の出土数の方がより多い。錘はその外形によって両縊型、砧碼（分銅）型、卵型、管状などに分けられ、材質の多くは石製と土製である。そのほか、数は少ないが骨製や鉄製（時代はやや遅い）の釣り針もある。以下に分けて述べる。



第6図 結合式釣針(李坤修 2007)



第7図 単式釣針(李坤修 2007)



第8図 現在の漢民族が使用する漁網と管状土錘



第9図 現在の漢民族による投網

(1) 両鑿型石錘 (第2図)

この種は揚子江型とも呼ばれ、横長い石製で、長さ約数cm、重さ約10g前後、両端に溝が一周する特徴がある。研究によって、投網に付ける錘としての機能があったと考えられている(陳有貝2007)。3本または4本の溝がついている例もあるが、出土の割合としてはかなり少ない。このほか、最近になって西海岸中部で土製の両鑿型錘がいくつか発見されており、その源流を辿る研究課題の上で大変重要な資料となっている(屈慧麗ほか2011)。

(2) 砣碼(分銅)型石錘 (第3図)

この種の多くは平べったい楕円形の石製であり、小さいものは約2cm、大きいもので数cm以上になる。両辺に二つ(それ以上もある)の打ち欠きを持つ点が主な特徴である。台湾の考古学では、この種の錘がどのような漁具に装着されて用いられたのかまだ特定されていないが、可能性として、刺し網、引き網の錘であろう。

台湾の砣碼(分銅)型石錘は殆ど、楕円形の長辺部分に切り込みがあり(短軸型)、これは日本で多く見られる短辺部分を打ち欠く石錘(長軸型)と異なっている。長軸型の砣碼(分銅)型石錘は、台湾

の花蓮地域でいくつか出土した（劉益昌・趙金勇2010）。

(3) 卵型石錘（第4図）

この種の石錘は楕円体の石製で、体積が大きく、石錘の中でも最も重いものである。石を一周する溝が1本以上、または垂直に交差する2本の溝があるのが特徴である。しかし実際、この種の石器の用途については、疑問が多く残っている。

(4) 管状土錘（第5図）

この種は土製で中央に孔があいているもので、長さ約4cm、重さ約3～6gで、台湾東北部にある蘭陽平原の鉄器時代遺跡でよく見られるものである。その年代については現代から遡っても数百年以内と考えられる（黃士強ほか1987）。また、もう一種の管状土錘に類似するものであるが、外観がより厚く、年代はさらに遅く、明らかに在来系ではなく、近代以降に漢民族によって伝えられたものと考えられる。

(5) 釣り針（第6・7図）

台湾先史時代における釣り針の数は極めて少なく、形によって逆T字形、結合式、単式などがある。材質は骨角製が多く、鉄器時代以後は鉄製の単式釣り針も見られる。逆T字形釣り針は島南端の鵝鑾鼻遺跡で発見されたものが典型である。結合式や単式は南部の亀山遺跡と東南海岸の旧香蘭遺跡からの出土品が典型であり、その年代は今からおよそ1500年前であると分かる（李匡悌1989、李坤修2007）。

3. 考察

(1) 機能について

1. まず両綫型石錘について、筆者はそれが投網用の石錘と考えた（陳有貝2007）。民族学資料によれば、投網は湖、川、或いは浅海地域で使う漁網と記載され、この技術は個人で操作することができ、漁獲量が少ないため、農民の副業であると考えられる。両綫型石錘は台湾で幅広く分布しており、ほとんどが新石器時代の遺跡で発見されているため、新石器時代の台湾は主に農業社会であるとの推測も証明できる。

2. 砵碼（分銅）型石錘について、出土地から見ると多くは台湾東海岸に分布しており、新石器時代を中心に鉄器時代初期まで延びていた。いずれにしても、文化様式と関連はなく、地域環境と関連する可能性が高いと考えられる。本文の冒頭で述べたように、台湾東海岸は沿岸地形で、浅い大陸棚が少なく、殆どが深い海岸である。従って、砵碼（分銅）型石錘は深海を中心とした漁法と考えられる。

現代の台湾原住民族は先史時代遺跡の主人公の子孫だと考古学者が多く主張する。それゆえ、台湾における考古研究ではしばしば原住民族の民俗慣習を参考にしている。台湾東海岸に居住している原住民族は阿美族が多く、その民族資料によると、彼らの漁業技術の中で砵碼（分銅）型石錘と関連する可能性があるのは引き網と魚釣りがあると考えられる。現状として、先史釣り針の発見が少ないため、砵碼（分銅）型石錘は引き網に付ける錘である可能性が比較的に高いと考えられる。

3. 卵型石錘については、主に台湾南端の墾丁地域で発見されている（李光周ほか1985）。どのような漁具として使われたかはまだ確認できていないが、環境的視点から見ると、珊瑚礁海岸地形で用いられた地域独特の漁法に伴うものとも推測できる。

4. 管状土錘は台湾東部の蘭陽平原のみで見られ、年代は鉄器時代末期に限定されている。形態的

には、中国大陆の漢民族の錘に似ているため、その漁法も漢民族の漁法と関連性があるかもしれない。ただ、土錘の重量が比較的軽く、小さい漁網に使われていたと思われる。

5. 台湾で発見された先史時代の釣り針は少なく、魚釣りの技術は先史台湾において流行していなかったようである。世界的によく見られる技術が台湾島で見られない原因は現在のところ不明である。釣り針そのものが出土した遺跡は、亀山遺跡、旧香蘭遺跡などがあり、どちらも海岸部にあるため、当時の釣り場は海辺にあると判断できる。

(2) 源流について

渡辺誠（1983）は日本地域の漁法について全体の見方を指摘した。彼は縄文時代の漁業を外洋性と内湾性（浅海、内陸河川と湖）の二種類に分け、外洋性では釣り針以外に銚等があるのが特徴、内湾性ではヤス以外に網漁業等があるのが特徴としている。網漁業の錘は土器片錘、切目石錘、有溝土錘の三種類があり、他に管状土錘がある。

これらの錘の年代について、彼は土器片錘から切目石錘、さらに有溝土錘へと発展する傾向があると考えた。上記傾向は、内湾で砂泥底の浅海に適応した漁業が徐々に内陸の砂石底の河川で適応していく過程で錘が変化した結果であるとする可能性が強い。管状土錘は、弥生時代に稲作伝播と共に中国から伝来した。外洋性漁業は釣り針を主として、単式釣針と結合式釣針に分けられており、多くが渤海湾沿岸地に分布している。

中国東部では土製の錘を主として、黄河流域の管状土錘および揚子江流域の揚子江型土錘に分けられる。前者は、弥生時代に朝鮮半島を経由して日本に伝来し、後者は弥生時代後期に九州北西部に少量が伝来している（渡辺1983）。いわゆる揚子江型土錘は、材質は土製であるが、形は台湾の両縊型石錘と類似している。ここで大変興味のあることは、同型の石製品（揚子江型石錘）が中国東南沿海地域を含め、長江以南の地域に分布する点である。両者に関連性があることは疑いないであろう。

また、中国には砬碼（分銅）型石錘があり、長軸型と短軸型の二種類がある。前者は中国内陸部でよく見られ、後者は東北部に多い（甲元2001）。

琉球地域では貝錘が一般的で、追い込み漁の網錘として使われている。貝製の錘は漁網を水中に沈ませるほか、音によって魚群を混乱させ、漁網に入らせる効果を持つ。

太平洋上の島々では、各島において様々な釣り針がよく見られ、当該地域では魚釣りが最も発達した漁法であると判断できる。

以上で述べた台湾周辺各地域の先史漁法資料に基づき、台湾先史漁法の伝播について考察してみよう。

1. 台湾各地に分布している両縊型石錘は、中国南部から伝来した可能性が高い。いわゆる揚子江型土錘はその古い形態と考えられ、その後、中国東南地域で石製品に変化し、台湾に伝わるとさらに細長い両縊型石錘に変化した。今のところ、揚子江型土錘の機能が台湾の投網用の両縊型石錘と同じかどうかについては断言できないが、形態が類似することから、両者は型式変化上の親縁関係があると思われる。

2. 砬碼（分銅）型石錘について、台湾は短軸型を主としたもので、明らかに中国内陸部や南部と関連しており、中国東北地方や日本地区の長軸型とは異なっている。伝播上の概略的な方向は見えるが、

機能的にはまだ疑問が残っている。

3. 卵型石錘については、台湾南部でしか発見されなかったため、中国大陆や日本などの地域との伝播関係は説明しにくい。前述のように、今のところ珊瑚礁石灰岩地形の漁業技術に関連するとはか言えない。

4. 管状土錘については、台湾で年代的に遅い鉄器時代でしか発見されなかったうえ、過去の新石器時代の錘とは殆ど関係が見られないため、明らかに外部から伝来したものと解釈できる。外見は、中国北部や日本の管状土錘と非常に似ているが、当時の台湾は日本との交流関係が薄いため、中国大陆の漢民族との交流から生み出された可能性が非常に高いと言える。

5. 釣り針に関しては、先史台湾ではあまり発見されず、現状として釣り針が発見された遺跡は、亀山遺跡と旧香蘭遺跡が最も有名である。この二つの遺跡はともに海岸部にあり、年代が近く、かつ出土品の内容も似ている。また、注意すべきことは、旧香蘭遺跡にはほかの地域であまり見られない、銅器やガラスの製造といった工芸技術も発見されていることである。この現象から、これらの遺跡は外来者が残したものであると説明でき、よって釣り針も同じ文脈の中で理解したほうがよい。言い換えると、釣り針の漁法は突発的に外部から伝来したと説明できる。その源流地について、本文で挙げた資料では東北アジアの釣り針と似ているものの、二つの地区は距離的に遠いため、伝播関係があるとは証明しにくい。東南アジアと関連するかどうかについては、研究を待つ必要がある。

4. まとめ

本文は、台湾先史時代の出土品である両銕型石錘、砧碼（分銅）型石錘、卵型石錘、管状土錘、釣り針等といった各種漁具について述べた。文中ではまずこれらの機能や意義について説明した後、伝播の視点からそれらの源流を検討してみた。結論として、内陸の河川や湖、浅海地区において農民たちが行なう投網漁が一般的な漁法であるほか、異なる地域や環境ではまた別の漁法があったものと考えられる。主な漁法は中国南方から伝来した可能性が高いが、他の地域から個別に伝えられたものもある。このほか、生態環境も漁業技術に影響を及ぼす要因のひとつであると考えられる。

近年、台湾で発掘によって出土した考古資料が急速に増加しつつあるうえ、常に新しい発見も多くあるため、将来的に新たな証拠とともにより深く進んだ説明も期待できると思われる。

（日本語訳：陳 有貝 ※引用文献は中国語原文の方にのみ掲載している）

黒潮の先史漁撈文化を語る

藤 木 聡

1. はじめに

漁撈とは魚や貝を採る人の営みである。宮崎県域の漁撈史について、各分野より研究されてきたが、考古学的研究は、縄文時代の漁撈具—とくに錘を分析した用途論・組成論等が中心となってきた（田中1953・北郷1985、長津1990）。弥生時代以降の漁撈については研究会による集成的作業（谷口1986・今塩屋・藤木2007）の他は個別漁撈具への検討がある（藤木2006等）。そこで本稿では、主に考古資料を対象として、宮崎県域の漁撈の様相について通史的に概観するものである。

2. 縄文時代における漁撈のはじまりと発達した網漁

宮崎県域の縄文時代遺跡から出土する漁撈具には、土器片錘・打欠石錘・切目石錘・有溝石錘とごく少量のヤス、軽石製浮子等がある。2009年の資料集成では、宮崎県域の縄文時代資料として、打欠石錘9,872点、切目石錘491点、打欠あるいは切目石錘312点、有溝石錘43点、土器片錘287点の合計11,005点＋ α を数えることとなった（九州縄文研究会2009）。打欠石錘の数量は他と比べて桁違いであり、宮崎県域の縄文時代における漁撈の実体を垣間見せている。

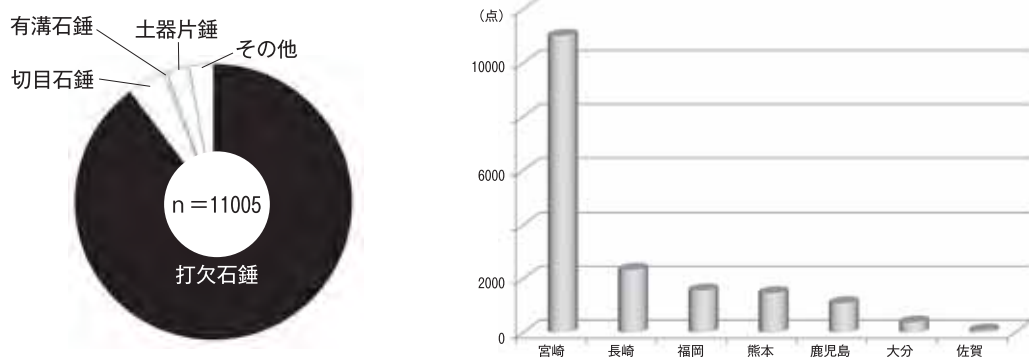
縄文時代草創期の漁撈具に明確な例はない一方で、草創期土器の文様に二枚貝を押し付けたものがあることから、縄文時代の開始とともに小規模ながらも漁撈が登場すると考えられる。続く縄文時代早期中葉～後葉には、上ノ原遺跡（川南町）・老瀬坂上第3遺跡（高鍋町）・別府原遺跡（西都市）・木脇遺跡（国富町）・塚原遺跡（国富町）・市位遺跡（宮崎市）等で、礫の短軸（長辺とも換言可能）を打ち欠く石錘が包含層中より少数出土する。これらは、漁網に取り付けられた可能性がある¹⁾。

縄文時代早期には貝塚も登場する。特に、宮崎県域では早期段階の貝塚が九州他地域以上に多く確認される特徴があり、縄文海進に伴って内湾となった五ヶ瀬川下流域では大貫貝塚（延岡市）、大淀川下流域では跡江貝塚・柏田貝塚・城ヶ峰貝塚（3貝塚とも宮崎市）が残されている²⁾。

打欠石錘がまとまって出土するようになるのは縄文時代前期以降である。早期に見られた短軸打欠石錘がよく見られる点は前期まで継続し、縄文時代後期以降の遺跡に長軸打欠石錘が多く見られること等と対照的である。

土器片錘や切目石錘は、遅くとも縄文時代中期には東日本方面から宮崎平野へと伝わった。この伝播は、九州の中では最古級であり、天神河内第1遺跡（宮崎市）で切目石錘3点・土器片錘4点、二ツ山第3遺跡（宮崎市）で竪穴住居跡埋土や包含層中より切目石錘2点が出土した。土器片錘や切目石錘について、縄文時代を通して宮崎県域の出土点数が九州他地域より突出しており、両錘がいち早く登場することとともに宮崎県域の重要な特徴といえる。

縄文時代中期末～後期前葉には上田代遺跡（えびの市）・上牧第2遺跡（都城市）・石河内本村遺跡（木城町）等をはじめ、打欠石錘・切目石錘・有溝石錘・土器片錘といった各種の錘具を出土する遺跡が増加する。続く後期中葉～晩期前葉におおよそ相当する松山遺跡（えびの市）・野首第2遺跡（高鍋町）・祇園原地区遺跡（新富町）・平畑遺跡（宮崎市）・虎崩遺跡（都城市）等では、各種の錘具が出土



第1図 宮崎県域出土の縄文時代の錘種構成および縄文時代の漁網錘点数の比較
(後者は九州縄文研究会2009より作成した、集成基準等の不統一な参考資料である)

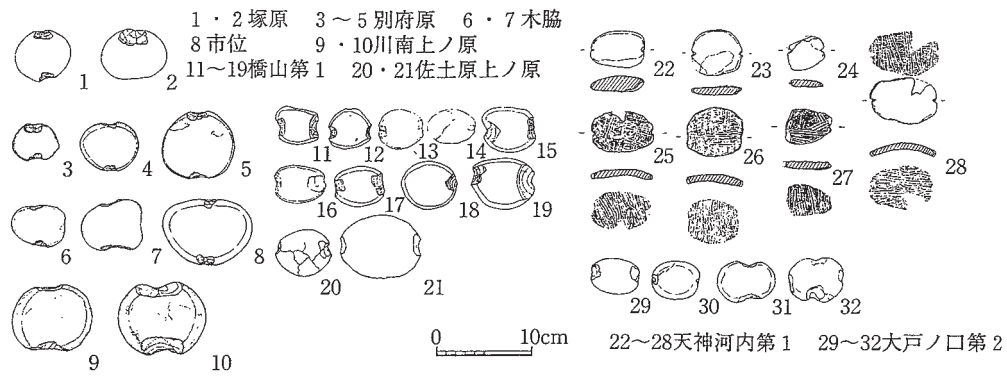
する他、野首第2遺跡のように4,600点近くの打欠石錘が出土する遺跡も見られるようになる。晩期後葉には野田町八田遺跡（延岡市）等があり、遺跡数も少ないながら漁撈具も減少傾向にある。

漁網用の錘が大量に出土するような遺跡とは、その多くが河川下流から河口・外海に位置しており、ある程度の大規模な漁撈活動をしていたと想像させるに十分である。この背景には、従来から言われるように、東九州と中九州以南の地域に及んだ東日本の縄文文化の影響を下敷きに（甲元1992・山崎1983）、加えて、宮崎県域に数多くの河川が流れることも重要な要素であったと考えたい。すなわち、川底に打欠石錘に代表される石錘の素材に向けた礫が豊富であること、また打欠石錘等を用いた漁撈法がより有効に活きるような漁場環境であったこと、これらの相乗効果が原因で、打欠石錘等を多く利用する生業形態を選ばせたとも理解されるのである。

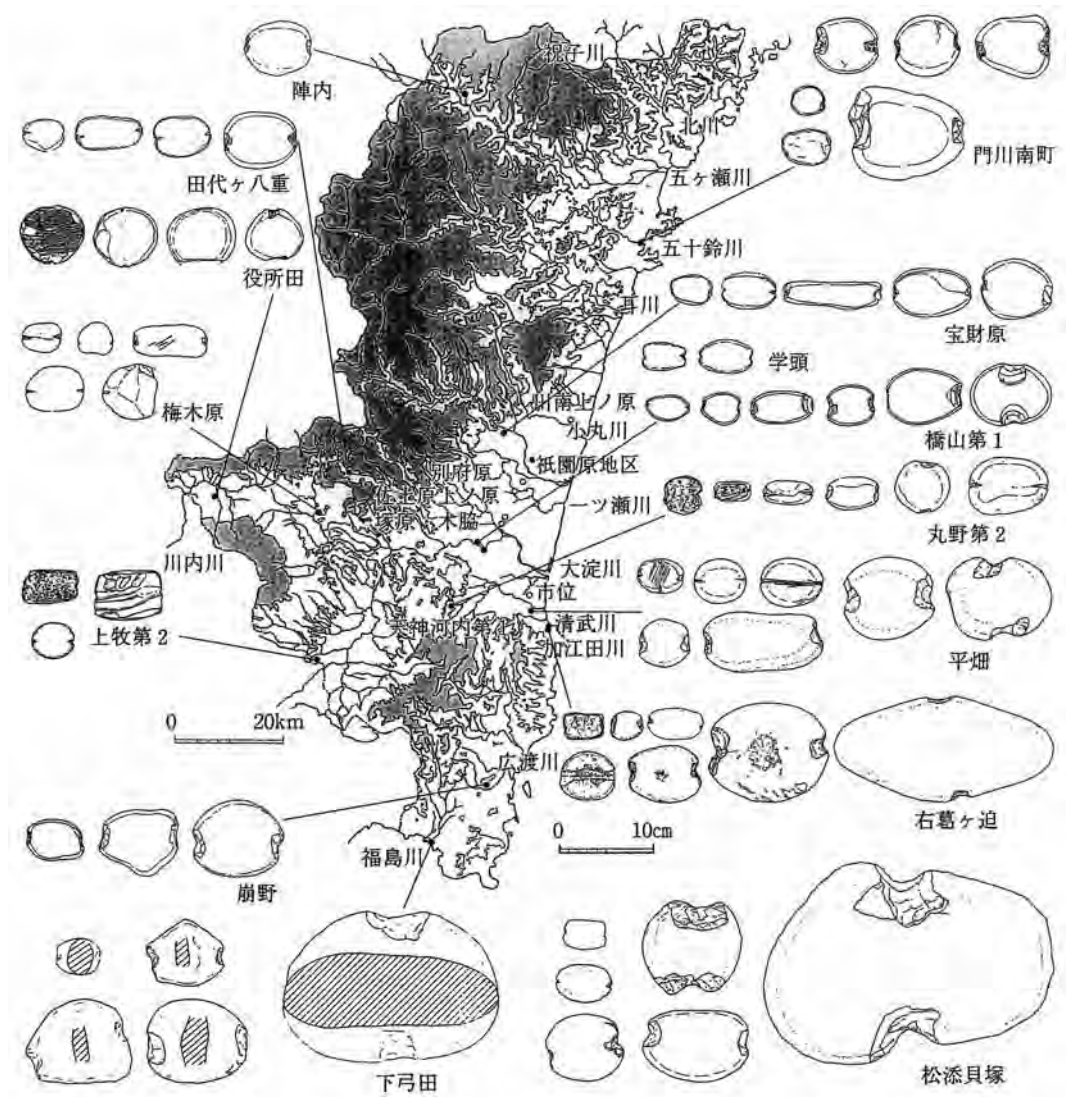
立地と錘の関係についてみると、山間部や内陸盆地といった河川上～中流域では、100gを超えない軽量の切目石錘がよく用いられる。錘の出土量も少なく、網漁でない漁形態も多かったのであろう。河川下流域や河口から沿岸部にかけては、錘の出土量が多く、錘の材質や重量も様々であることから、各種の網漁が展開したものと思われる。特徴的なものとしては、舟の碇あるいは外海での網錘等と考えられる1kg超の非常に大型の打欠石錘が、下弓田B遺跡（串間市）・右葛ヶ迫遺跡（宮崎市）・松添貝塚（宮崎市）等の日向灘に面した遺跡で発見されている。また、役所田遺跡（えびの市）をはじめ、えびの盆地内では、打欠石錘・切目石錘・土器片錘のいずれも、長軸：短軸＝1：1に近い平面円形のものが多く、川内川上流域における錘材の選択における地域性であろう。錘以外には、丸野第2遺跡（宮崎市）・松添貝塚（宮崎市）等に軽石製で浮子とされる例があるが、錘の量に比べて発見数は少ない。

縄文時代後期から晩期にかけて形成された松添貝塚（宮崎市）では、大量に出土したスガイ・イシダタミガイ・レイシガイ等の岩礁性の貝を中心に砂泥性のハマグリ等も見られ、クロダイ・イシダイ・スズキ・ブリ・マグロ・ベラ・フグ・エイといった魚類、クジラやイルカ、アカウミガメ、ムラサキウニ等も見られ、また、シカ・イノシシ・アナグマ・ウサギ等の獣骨も出土している。この自然遺物構成は、外洋に面しかつ付近に岩礁や砂浜、背後に丘陵を持つという立地条件とよく符合している。山深い立地の田代ヶ八重遺跡（小林市）でも食べ滓と思われるカワニナがいくつか出土している。

なお、九州の縄文時代の貝塚について時期ごとに分布図を作成すると、特に宮崎においては、早期貝塚が確認される一方で、九州他地域で貝塚が増加する前期・中期に貝塚が見られないとわかる。その理



第2図 宮崎県域出土の縄文時代早期～中期の漁網錘（藤木2003より）



第3図 宮崎県域出土の縄文時代後・晩期の漁網錘とその分布（藤木2003より）

由としては、大規模貝塚が形成されるほど縄文時代前期・中期の宮崎では貝が消費されなかったということが考えられる一方で、そもそも鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）を降らせた火山災害等の影響により貝の棲息環境が大きく損なわれた可能性（桒畑1997）という宮崎を含む南九州ならではの事情も考慮すべきであろう。具体的には、土石流等による二次堆積の繰り返しによる生息阻害や浅海の埋め立て等が考えられている³⁾。

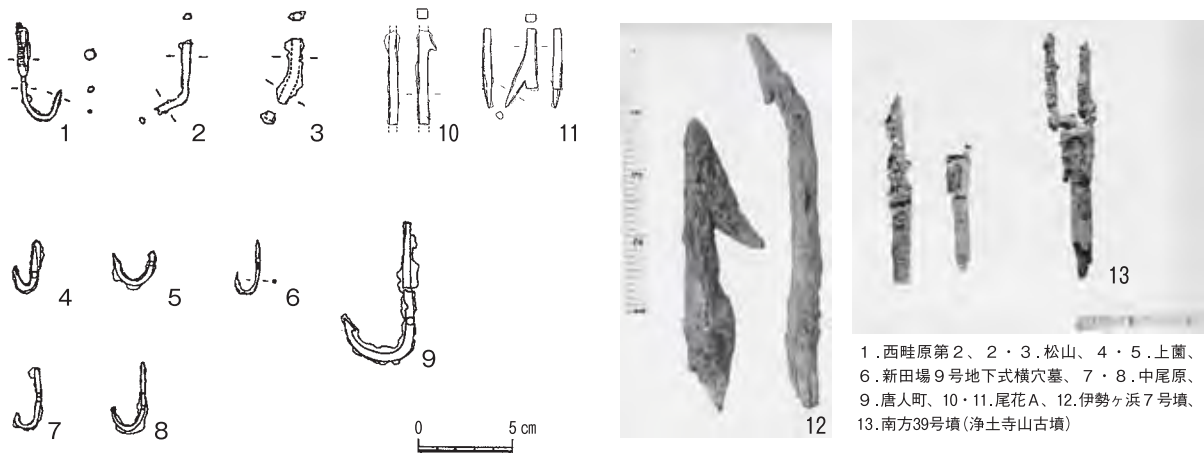
3. 伝統の継続と新たな漁撈具の登場 ～弥生・古墳時代の漁撈～

弥生～古墳時代になると、発達した水田や付随する水路、溜め池等も、新たな漁撈の場となってゆく。垣下遺跡（宮崎市）の水田に伴う水路中から、弥生時代後期の釜の出土例がある。一方、縄文時代との連続性でみると、まず、切目石錘・土器片錘は消滅する。打欠石錘は、古墳時代遺構に伴う蓋然性が高く、かつまとまった資料として、野首第2遺跡1号竪穴建物（高鍋町）・下耳切第3遺跡40号竪穴住居（高鍋町）が挙げられる。弥生～古墳時代の打欠石錘については、縄文時代遺跡との重複に原因する遺物混入等を完全に排除することが、多くの場合、難しい。

新たな漁撈具も他地域よりもたらされた。管状土錘は、地域によっては弥生時代から盛行しはじめるものの、宮崎県内では古墳時代においても散見されるばかりである。宮ノ東遺跡（西都市）では、古墳時代後期の住居等より出土し、胎土に多くの砂粒を含み全形も大きいものがあつたが、これらは古代以降の管状土錘とおおよそ分離可能であつたため、当該期の管状土錘の特徴と思われる。また、同遺跡には須恵質の管状土錘も見られた。また、管状土錘が本格利用される奈良・平安時代以降のものとの混同例も、打欠石錘の場合と同様に注意が必要である。双孔棒状土錘は、北中遺跡（宮崎市）・上藺F地区（新富町）等のように古墳時代中期には瀬戸内あるいは東九州の影響下で登場し、隅ヶ迫2号横穴墓（新富町）のような副葬例もある。これらは、端面の処理が丸く粗雑であり、胴部全体も太く大振りである。この他、古墳時代中期の球状土錘が内小野遺跡（えびの市）等に、弥生時代末から古墳時代前期の有溝石錘が湯牟田遺跡（川南町）・尾花A遺跡（川南町）で出土した。有溝石錘は、瀬戸内方面からの影響により登場し、丸い河原石に糸掛け用の溝が十文字に細く削り出される。

弥生時代後期後半には、鉄製の漁具が登場する。鹿角製等（宮崎県域での出土例は今のところない）であつた釣針は鉄製へと材質が変化する。鉄製釣針は、宮崎県域全体の弥生～古墳時代で約10例と少ない。小型品が多く、無磯あるいは内磯の2者がある。新田場9号地下式横穴墓（小林市）で出土した釣針は、南九州一帯で1000基を超える地下式横穴墓の中で唯一の例である。刺突系漁具は鈎があり、南方古墳群39号墳（浄土寺山古墳・延岡市）、伊勢ヶ浜古墳（日向市）、尾花A遺跡（川南町）にある。前二者は副葬品と見られ、後者は集落出土である。

魚介類そのものが残された例もいくつかある。柿木原2号地下式横穴墓（宮崎市）のハマグリ、市の瀬10号地下式横穴墓（国富町）のアワビ、県総合農試裏1号横穴墓（宮崎市）のドブガイ等が挙げられる。また、酒元ノ上7号横穴墓（西都市）の須恵器坏の分析からは、ドコサヘキサエン酸（DHA）およびエイコサペンタエン酸（EPA）という特徴的な脂肪酸のピークが認められ、イワシ等の魚介類が坏に載せられていた可能性がある。他の食料残滓としては、宮ノ東遺跡（西都市）の竪穴住居跡の土器埋設炉等出土の魚骨等がある。また、弥生時代後期の下那珂貝塚（宮崎市）は、ヤマトシジミ主体で、ハマ



第4図 宮崎県域出土の鉄製釣針および鉄製銚等

グリ・イソシジミ・カワニナ・マルタニシ等が出土した。弥生時代後期の熊野原遺跡B地区5号竪穴住居（宮崎市）は竪穴内に廃棄されたと見られる大量の甕・壺等が出土し、イシマキガイ・スガイ・ヤマトシジミの他クマノコガイ・キサゴガイ・イシダタミガイ・レイシガイ等の入った壺も含まれていた。古墳時代中期後半～後期前半の中野内遺跡13号竪穴住居（延岡市）では竪穴廃絶後に投棄されたものとして、イボアナゴ・イシダタミガイ・クボガイ・ヒメクボガイ・ヘソアキクボガイ・クマノコガイ・ギンタカハマ・スガイ（殻・蓋あり）・コシダカサザエ（殻・蓋あり）・サザエ・カノコガイ？・アラレタマキビ・レイシガイ・ウニレイシ・ミツクチキリオレ科・ホソオカチョウジガイ・ケガイ・ムラサキインコガイ・タイラギ？・オハグログキ・コケゴロモガキ・マガキガイ・チリハギガイ・チョウセンハマグリがあり、量的に多いのはスガイ・ケガイ・ムラサキインコガイ・チョウセンハマグリである。海産貝は潮干帯の岩礁ならびに砂地に棲息する採取容易なものが大半であり、一部、タイラギ？のように潜水等による採取が予想されるものも含まれる。他に陸産貝もあったが、埋没過程で加わったものであろう。八幡上遺跡（新富町）で竪穴住居に近接して掘り込まれた古墳時代前期の8号土坑は粗雑に掘り込まれた印象と報告され、ヤマトシジミ主体で数%カワニナが出土した。この他、前原北遺跡（宮崎市）でも住居等に伴ってヤマトシジミ・カワニナ・アマオブネガイ・イシマキガイ・スガイの他イシダタミガイ・ケガイ・クマノコガイ・ヒメクボガイ・ウニレイシガイ・レイシガイ・ムラサキインコガイ・マガキ・クボガイ等が出土している。弥生～古墳時代の貝出土例で貝種が判明している例では、遺跡の立地によって異なる至近の採集環境の特徴とよく整合している。

なお、古墳時代までの製塩土器やその生産遺跡、ならびに蛸壺等は、現時点では確認されていない。海岸部の調査例の少なさも一因であろうから、他地域で見られるような専業漁村等の存在の是非は今後の調査を待つことになる。

4. 管状土錘を用いた網漁の発展 ～奈良・平安時代の漁撈～

管状土錘の本格利用は、奈良・平安時代以降である。本池遺跡A地区（都城市）・宇都第3遺跡（都城市）・大島島田遺跡（都城市）・餅田遺跡（小林市）・須田木遺跡（宮崎市）・平田迫遺跡（宮崎市）・赤坂遺跡（宮崎市）・下田畑遺跡（宮崎市）・市位遺跡（宮崎市）・早日渡遺跡（延岡市）・宮ノ東遺跡（西都市）等の県域各地の多くの遺跡でまとまった出土例がある。宮ノ東遺跡（西都市）では、当該期の管

状土鍾105点が出土し、全体に長さ3～5cm・断面径1.5cm前後・孔径0.4～0.8cmに収まり、小型の紡錘形のことが多い。この他、小型品で胴が強く張り出すものや、赤みの強い胎土のように異色のものがある。須恵器質の管状土鍾13点は、生焼けに近い焼き上がりのものや明瞭な面取り痕の残るものが見られる。胎土・焼成からは複数窯からの供給が予想され、その流通経路解明等が待たれる。大島畠田遺跡（都城市）では小型の管状土鍾が土坑中に廃棄されていた他、包含層中より内陸盆地という立地にしては大型の管状土鍾が出土した。いくつかの漁網が同遺跡内で使い分けられていたことを示すのであろう⁵⁾。

双孔棒状土鍾は、京園遺跡（宮崎市）例のように、古墳時代のものと比べて細身で長く、端面も直線的に整形されたものが登場する。双孔棒状土鍾について古墳～平安時代までで時期の判然としない例に宮田遺跡（宮崎市）・鬼付女西A/B地区（新富町）・宮ノ東遺跡（西都市）、1点のみの表採品であるが益貫遺跡（都城市）があり、時期のわかる例と合わせても、大半が沿海というよりやや内に入った、鬼付女川や一ツ瀬川、大淀川等の下流域に分布する。唯一、益貫遺跡のみ内陸の都城盆地であり、分布上、注意を要する。いずれにせよ、内水面漁撈で用いられた鍾なのであろう。

この他、陣ノ内遺跡（宮崎市）22号土坑からヘラ切り底の土師器坏2点にイシマキガイ・ケガイ・クジャクガイの他チョウセンハマグリ・アマオブネガイ・トマヤガイ・イシダタミガイ・ヒメクボガイ・スガイ・エガイやウニの針等が入った状態で出土した。竹瀝C遺跡（新富町）の竪穴住居跡の土器埋設炉から魚骨等が出土した。

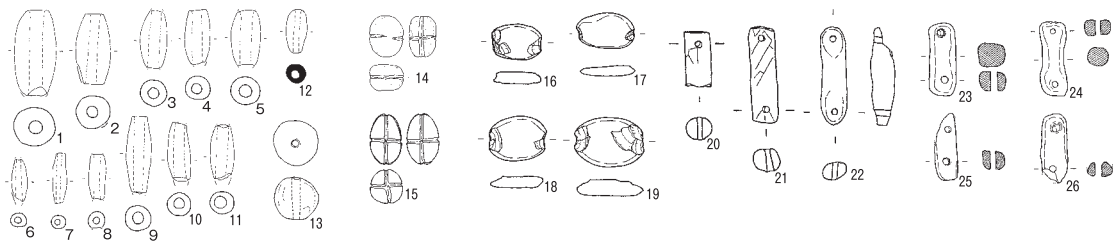
なお、考古資料以外ではあるが、927年に完成した『延喜式』には、日向國からの調（税の一種）である「薄鰈」（アワビを加工したもの）・「堅魚」（カツオ）等が挙げられている。アワビ採取やカツオ漁に関する遺跡・遺物等が未確認とはいえ、県内最古の漁撈に関する文字記録として注目される。

5. 管状土鍾の長細化と滑石利用の漁具 ～鎌倉・室町時代の漁撈～

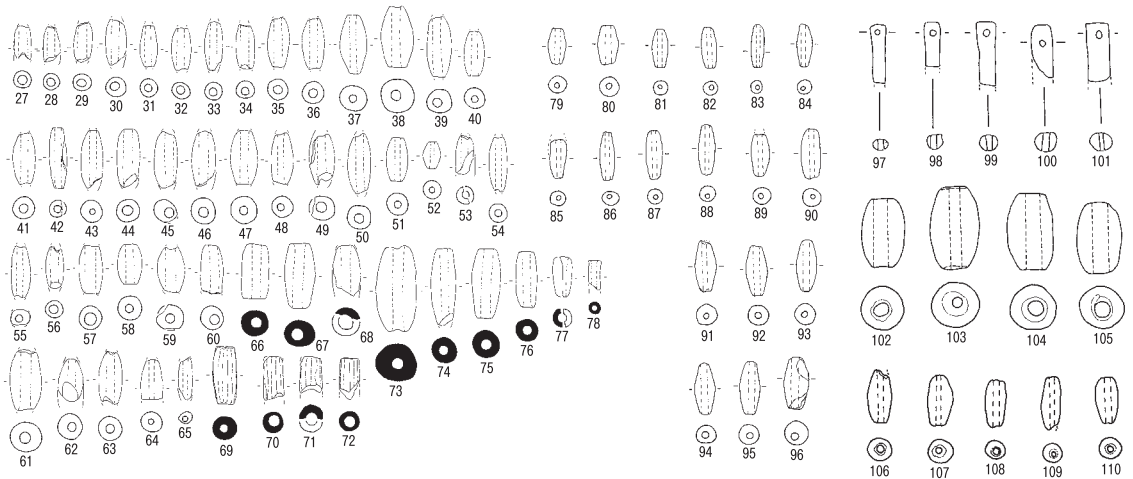
鎌倉・室町時代の管状土鍾は、天神河内第1遺跡（宮崎市）・竹瀝C遺跡（新富町）・本城跡（宮崎市）・清武城跡（宮崎市）・池開遺跡（宮崎市）・三納城跡（西都市）等で出土している。集落はもちろん、日本各地と同様に山城跡からも発見される（中井2001）。管状土鍾は細身になり、網紐を通す孔も小さいものが大半を占めるようになる。重量を比較すると、池開遺跡例のような海で用いられたと見られる土鍾は大形かつ重量があり、河川で用いられた土鍾は相対的に軽量である。縄文時代に石鍾等で見られた使い分けは、時代を超えて共通している。宮ノ東遺跡（西都市）の該期に相当する溝群出土の管状土鍾は復元長4.0～6.0cm前後・胴部径1.0～1.3cm前後・孔径0.3～0.4cmと細長い紡錘形で非常に細かい胎土の一群である。胎土と法量で、古代のものとおおよその区別可能である。管状の鍾には、その他、天神河内第1遺跡（宮崎市）出土の滑石製があり、石鍋をリサイクルした可能性がある。鶴喰遺跡（都城市）や山ノ脇遺跡（鹿児島県）で類品がある。

この他、漁撈用の鍾と見られるものとして、滑石を棒状に磨きだして、両端に紐掛けの溝を切り込む特徴的な滑石製鍾が、正坂原遺跡（都城市）・野首第2遺跡（高鍋町）でそれぞれ1点ずつ出土した。前者は部分的に残る器面のカーヴ具合より、石鍋をリサイクルしたものとなる。後者も石鍋転用の可能性があり、何らかのものが巻き付けられていた痕跡が残る。

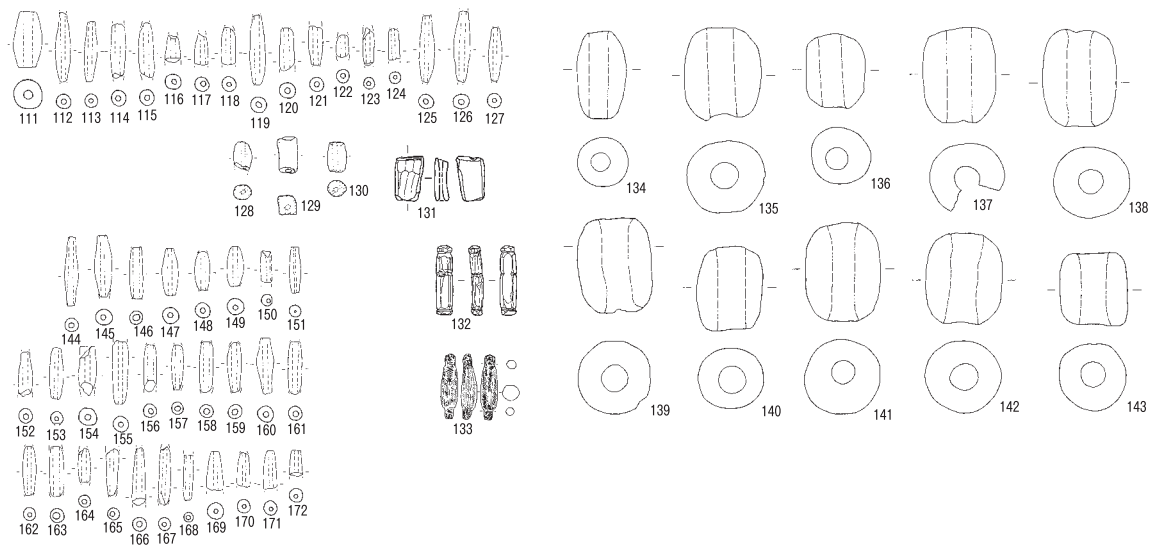
弥生・古墳



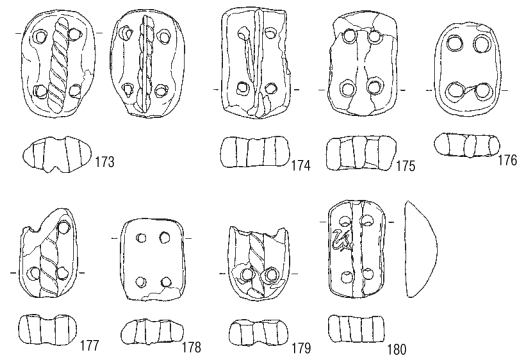
奈良・平安



鎌倉・室町



江戸



1～12.宮ノ東、13.内小野、14.湯牟田、15.尾花A、16～19.野首第2、20～22.北中、
23～26.隅ヶ迫2号横穴墓、27～78.宮ノ東、79～96.宇都第3、97～101.京園、
102～110.大島畠田、111～127.宮ノ東、128～130.天神河内第1、131.鶴喰、
132.正坂原、133.野首第2、134～143.池開、144～172.宮ノ東、173～179.山崎上ノ
原第2、180.東宮 ※断面黒塗りは須恵質

0 10cm

第5図 宮崎県域における弥生時代～江戸時代の漁網錘等の変遷

食料残滓も僅かながら出土例がある。海舞寺遺跡341号土坑（延岡市）からは、14世紀代の屋敷地で食用の後に廃棄されたと見られる、ヒメクボガイ・レイシガイ・ウズイチモンジ・ハマグリが、イネ・オオムギ等とともに出土した。付近に立地する先述の中野内遺跡で出土した古墳時代の貝種構成とは、いずれも近隣の岩礁地や干潟等から採取された点で共通しており、貝類採取地や好まれる貝種が継続した結果と見られる。

6. 四つ目土鍾の登場と現代につながる嗜好のはじまり ～江戸時代以降の漁撈～

管状土鍾は、中世の伝統を引き継いで同様のものが使用される。一例として中世末あたりを含む例ではあるが、宮ノ東遺跡（西都市）の石塔群出土の管状土鍾は復元長5.5～6.0cm前後・胴部径1.0～1.3cm前後・孔径0.3～0.5cmと細長い紡錘形で非常に細かい胎土の一群である。中には、孔径0.15cmと非常に細い孔のものが見られる。この細小化傾向は、網紐の改良とともに進化した。一方で、陶製の管状鍾も窯業の発達に伴って登場し、板平遺跡（日向市）出土の他、民俗資料（門川町・延岡市他）が知られている。

棒状で両端に紐通し用の孔を持つ鉛鍾も江戸時代以降に登場する。鍾そのものは未見ながら、石製鋳型が清武城跡（宮崎市）、飢肥城下町（日南市）、高岡麓遺跡（宮崎市）等で出土している⁶⁾。

四つ目土鍾は、江口・池開遺跡（宮崎市）例から15世紀末～16世紀にはじまり、盛行するのは江戸時代以降、比較的最近まで宮崎市佐土原町から青島あたりまでの沿海で用いられた。1574～1586年に著された『上井覚兼日記』や1934（昭和9）年刊行の『宮崎県漁具図譜』の記述等から、イワシ・カナガシラ・カマス・サワラ等を獲る地引き網に用いられたと考えられる。四つ目土鍾は、九州では宮崎の他に府内城跡（大分県）⁷⁾、円光寺古墳（福岡県）出土例のみであることから、宮崎平野部での出土量は突出している。宮崎県域に和歌山・大分・鹿児島等から漁法が伝えられた点が文献資料等の検討から明らかになっており（渡辺1997）、四つ目土鍾もそのような漁法や漁具の伝播あるいは改良等の中で理解できる可能性がある。

食料残滓についていくつか調査例がある。カラ石の元遺跡9号土坑（延岡市）には、6個体以上のカツオを主に、マアジ・スズキ目・フグ科等が出土し、18世紀後半の農村で食された魚種の一端を窺う好資料となっている。林遺跡（延岡市）は延岡藩城下町近郊の農村であり、江戸時代の貝を含む食料残滓の廃棄場が確認されている。貝の中には、アカニシ・サトウガイ・バイ・イタヤガイといった水深10～30mに棲息するものが見られ、これらは中世までに見られなかったものである。中世までのような磯場や砂浜で簡易に採取するのではない、潜水等も伴うより専門的・高度な技術が必要になるという漁法の変化を物語るとともに、現代につながる貝の嗜好性も江戸時代にある程度まで完成されたことをも示しており、貝類の食用史の上で注目される。

7. おわりに

表題に挙げた黒潮に洗われた宮崎県域ならではの漁撈史という点では、今回、十分に深めることは叶っていない。とはいえ、おもに縄文時代から江戸時代まで、内陸部も含めて宮崎県域全体の漁撈具の特徴や変遷を概観できた。その中で、通史的な特徴として、東日本や瀬戸内海地域といった地理的に宮崎の

東方向から入ってくる文化の影響を、とくに沿海部においてみる事ができた。具体物を挙げれば、縄文時代では切目石錘・土器片錘、弥生時代末～古墳時代初頭の有溝石錘、古墳時代中期以降の双孔棒状土錘、江戸時代の四つ目土錘である。それらには、縄文時代から江戸時代（諸記録からは近現代も同様）に至るまで断続的に導入されてきた新たな漁具に伴って、人の移動や新たな漁法の広がり等もあったであろうし、宮崎に良く順応し発達をみせるものもあった。まさに、宮崎県域の漁撈史は、海を介した文化交流・漁民の動きの歴史としての側面も持っていたのである。今後も検討してゆきたい。

謝辞

貝の同定にあたって、日本貝類学会会員の西 邦雄先生に2009年5月10日に御教示いただいた。また、資料実見や文献収集、検討を進める中での議論等で宮崎県内や各地の埋蔵文化財関連機関や同関係者に多くのご配慮を賜り、また貴重なご意見などをいただくことができた。紙面上、お名前を挙げることはできないものの、ここに明記し、感謝の意を表したい。

※本稿は、平成23年度に実施された企画展Ⅰ『古代日向の漁撈』の展示解説ならびにこれと関連する東アジア学術文化交流講演会『台湾と日向の先史漁撈』（2011年8月6日当館で開催、陳有貝（台湾大学副教授）「台湾の先史漁撈を語る」・藤木「黒潮の先史漁撈を語る」）のために、これまでの拙稿を再構成し、西先生による貝類同定結果を盛り込みつつ、一部新たに書き起こしたものである。各節の出典等は次のとおり。

1節：藤木2009b／2節：藤木2003・2009a・2009b、当館平成22年度企画展『環境をめぐる考古学』解説／3節：今塩屋・藤木2007、藤木2010／4～6節：藤木2008・2010

【註】

- 1) 縄文時代後期以降に見るような大量出土とは明らかに異なり、早期段階の打欠石錘の点数の少なさは、漁網の錘として機能するに足りないとも考えることもできる。また、宮崎県域のみでなく、関西や中四国地方においても早期中葉～後葉にかけて短軸打欠石錘が見られる（関西縄文文化研究会2002、2003・中四国縄文研究会2003）。
- 2) 縄文海進にともなう自然堆積層のカキが延岡市上無田、ハマグリやカキ等が沖田周辺で発見されている。
- 3) 貝塚の増減の背景を説明することは、本県域の考古学の課題の一つであるが、その解釈の1つに火山災害による影響が示されていることは、火山地域に生きてきた宮崎県域の歴史を象徴するものである。
- 4) この現象の背景として、それ以前の打欠石錘等を用いた網漁との錘材の変化にすぎないのか、網構造等も含めた漁法全体の変化なのか、今後議論が必要である。
- 5) 真鍋篤行氏により、瀬戸内地域等の管状土錘等の孔径・胴部径等の数値と民俗資料の漁網錘を比較し、漁網の使い分けに迫った研究が示されている。宮崎県域の資料についても同様の作業が進むことが今後期待される。
- 6) 清武城跡のものは報告書未掲載である。飫肥城下町例は二宮満夫氏、高岡麓遺跡例は藤木晶子氏にそれぞれご教示いただいた。
- 7) ただし、胴部中央に宮崎県域では見られない貫通穴がある。

【主な参考・引用文献】（発掘調査報告書は膨大であり、今塩屋・藤木2007／藤木2003・2006・2009を参照してほしい）
池畑耕一1979「隼人の漁撈文化」『隼人文化』第5号

今塩屋毅行・藤木 聡2007「宮崎県域における弥生・古墳時代の漁撈具」『古墳時代の海人集団を再検討する』埋蔵文化財研究会

内田律夫2009『古代日本海の漁撈民』ものが語る歴史17、同成社

- 関西縄文文化研究会2002『縄文時代の石器-関西の縄文草創期・早期-』第4回関西縄文文化研究会
- 関西縄文文化研究会2003『縄文時代の石器Ⅱ-関西の縄文前期・中期-』第5回関西縄文文化研究会
- 九州縄文研究会2009『九州における縄文時代の漁撈具』
- 九州縄文研究会・肥後考古学会2001『九州の貝塚』(菅付和樹・柴畑光博・廣田晶子「宮崎県」)
- 久保禎子1997「漁網錘の製作技術と漁網復元への一試論－漁師とイワヤが作る漁網錘－」『民具研究』116号、日本民具学会
- 柴畑光博1997「前期の自然環境と遺跡数の減少」『宮崎県史』通史編 原始・古代1
- 甲元眞之1992「海と山と里の形成」『考古学ジャーナル』344、ニューサイエンス社
- 後藤 豪1934『宮崎県漁具図譜』宮崎県水産会
- 下山覚1992「古墳分布域外の漁撈具 - 指宿市橋牟礼川遺跡出土資料を中心として - 」『古代文化』44-7、財団法人古代学協会
- 田中熊雄1953「石錘考」『宮崎大学開学記念論文集』宮崎大学
- 谷口武範1986「宮崎県」『海の生産用具』埋蔵文化財研究会
- 中四国縄文研究会2003『中四国地域における縄文時代石器の実相』第14回中四国縄文研究会
- 中井 均2001「中世城館遺跡から出土する土錘について」『久保和土君追悼考古論文集』
- 長津宗重1990「石器組成について」『丸野第2遺跡』田野町文化財調査報告書第11集
- 名古屋大学文学部考古学研究室1992『考古資料ソフテックス写真集』第7集
- 藤木 聡2003「宮崎県域の錘具の変遷と分布 付.『宮崎県内水面漁具図譜』にみる錘具の紹介」『先史学・考古学論究』Ⅳ、龍田考古会
- 藤木 聡2006「宮崎沿海の四つ目土錘」『宮崎考古』第20号、宮崎考古学会
- 藤木 聡2008「石器」「土錘」『宮ノ東遺跡(本文編)』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第173集
- 藤木 聡2009「宮崎県の縄文時代の漁撈具」『九州における縄文時代の漁撈具』九州縄文研究会
- 藤木 聡2009「打欠石錘の用途と切目石錘の来歴」『九州における縄文時代の漁撈具』九州縄文研究会
- 藤木 聡2010「魚貝類利用の変遷とその特質」『海舞寺遺跡 市之串遺跡 中野内遺跡 森ノ上遺跡(弥生・古墳時代編) カラ石の元遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第189集
- 北郷泰道1985「石錘・土器片錘の総括」『平畑遺跡 他』宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集
- 真鍋篤行1993「瀬戸内地方出土土錘の変遷」『瀬戸内地方出土土錘調査報告書(Ⅱ)』瀬戸内海歴史民俗資料館
- 真鍋篤行1995「弥生・古墳時代の瀬戸内地方の漁業」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』8、瀬戸内海歴史民俗資料館
- 宮崎県淡水漁業指導所1951『宮崎県内水面漁具図譜』
- 山崎純男1983「西日本後・晩期の農耕」『縄文文化の研究』2生業 雄山閣
- 山崎純男1988「九州における海人集団の成立と展開」『古墳時代の海人集団を再検討する』埋蔵文化財研究会
- 若山浩章2001「Ⅱ 日向・大隅の歴史 四 海に生きる」安藤保・大賀郁夫編『高千穂と日向街道』街道の日本史53、吉川弘文館
- 和田晴吾1982「弥生・古墳時代の漁具」『小林行雄博士古稀記念考古学論考』平凡社
- 渡辺一弘1997「宮崎県沿岸部の漁法について」『宮崎県地方史研究紀要』第23輯、宮崎県立図書館
- 渡辺 誠1973『縄文時代の漁業』雄山閣

※紙数の都合で記載していない、各地で進められた研究等も参考としている。

西都原171号墳出土蓋形埴輪の再検討

—立ち飾り部の製作技法を中心として—

犬 木 努・近 藤 麻 美

1 はじめに

平成7年度以降、西都原古墳群の史跡整備事業が本格的にスタートし、平成10～12年度には西都原171号墳、平成12～15年度には同169号墳、平成16・17年度には同170号墳の発掘調査が行われている。西都原169～171号墳における平成調査の成果については、それぞれ発掘調査報告書が刊行されている（松林2003・2004、犬木ほか2008・2010）。

その後、筆者らが実施してきた大正調査・平成調査時に西都原古墳群から出土した埴輪の「全点」実測および両者の接合関係の確認作業の成果については、宮内庁書陵部所蔵の女狭穂塚・男狭穂塚古墳出土埴輪の再実測図とともに、来年度以降に報告の予定である。小稿では、上記の資料調査の成果も踏まえて、西都原171号墳出土蓋形埴輪について、立ち飾り部の製作技法を中心として再検討を行う。

2 西都原171号墳の調査歴—大正調査および平成調査—

西都原171号墳は、女狭穂塚古墳の南西側に隣接する一辺30.3m、高さ4.2mの方墳で、同古墳の陪塚とされる。大正元年12月から同2年1月に行われた「1次調査」では、墳頂平坦面で家形や短甲形の埴輪が出土したが、埋葬施設は確認されていない（浜田・柴田1915）。このほか、墳頂平坦面外周および墳丘第1段目平坦面において、円筒埴輪列が検出されている。

一方、平成10年度から12年度にかけて実施された発掘調査では、墳頂平坦面および第1段目平坦面で、円筒埴輪列が確認されている（松林2003・2004）。墳頂部では、家・蓋・短甲・壺形埴輪が出土した。

西都原171号墳出土の蓋形埴輪について、平成調査時の出土状況を簡単に整理しておく。墳頂平坦面では、外周円筒埴輪列の外側および内側で検出されている。円筒埴輪列の内側で出土した場合でも、墳頂中央ではなく、円筒埴輪列に比較的近い場所で出土している。

このほか、墳頂平坦面以外では、墳丘第2段目斜面および第1段目平坦面において蓋形埴輪片の出土が目立つが、墳丘第1段目斜面および周溝底からの出土はほとんど見られない。墳丘第2段目斜面および第1段目平坦面で出土した蓋形埴輪片については、比較的広い範囲で接合関係が確認されており、第1段目斜面や墳頂平坦面中央で破片がほとんど検出されていないことを考慮すると、本古墳の蓋形埴輪は、墳頂平坦面外周を巡る円筒埴輪の上に載せられていた可能性が高い。蓋形埴輪の検出個体数から見て、全ての円筒埴輪ではなく、一部の円筒埴輪の上に載せられていたと考えられる。

3 西都原171号墳出土蓋形埴輪の観察所見

まず、西都原171号墳出土蓋形埴輪の立ち飾り部について若干の観察所見を記す。ここでは、宮崎県立西都原考古博物館所蔵資料に加えて、京都大学総合博物館所蔵資料にも一部言及し、前者については報告書（松林2004）に未掲載の資料にも言及する。なお、小稿の実測図は、全て今回新たに作成したものである。実測図に付した番号（No.○）は、報告書（松林2004）で各埴輪に付されている挿図番号であ

る。また、実測図に付した記号 ➤ は擬口縁状を呈する粘土紐接合単位の位置を示す。

第1図は、飾り板受部から飾り板にかけての比較的大型の破片である。飾り板2枚は基部付近のみ、他の飾り板2枚は中位まで残存する。飾り板どうしの接合部および受部との間には、補強粘土の貼付が確認できる。現状では、飾り板および補強粘土が一体化した状態で受部から剥離しているため、飾り板・補強粘土の下面（第1図g）および受部上面（第1図e）の状況が非常に明瞭に観察できる。他の破片も含めて、実測図（第1～4図）および模式図（第6図）を用いて、推測される製作工程について記述する。

飾り板受部の下には軸部の上位部分のみ遺存し（第1図i）、同一個体と思われる軸部の破片も残存する（第1図j）。軸部は粘土紐積み上げによって成形され（第5図1）、飾り板受部の上端まで、粘土紐を積み上げて、大きく外反する形状を作出する（第6図2）。「受部」の内面屈曲部に、中央に孔を残すように「環状」に粘土紐を貼付して、受部上面の平坦面を作出する（第6図3）¹⁾。

受部上面には、飾り板の基部となる粘土紐を十字状に設置（貼付）する²⁾。粘土紐の貼付位置にはあらかじめ格子状に刻線を施す（第1図e、第6図4）。まず、受部上面を横断するように「飾り板基部粘土紐」を貼付したのち（第6図5）、その両側に「飾り板基部粘土紐」を半径分ずつ貼付する（第1図g、第6図6）³⁾。「先置粘土紐」の上を、「後置粘土紐」が「乗り越える」ように重ねられる場合、「先置粘土紐」の中央が、「後置粘土紐」によって下に押し下げられることが多いが、本例の場合、飾り板下面の観察によってもそれが明瞭には認められないため（第1図g）、「先置粘土紐」中央の両側面にそれぞれ「後置粘土紐」を設置している可能性を考えておく⁴⁾。

次に、「十字」に設置された「基部粘土紐」の上に飾り板の成形を行う。4枚の飾り板をそれぞれ①～④と呼称する（第1図f）。飾り板交差部の接合状況を上方から観察すると（第1図f）、少なくとも交差部下位から中位付近（飾り板「下半部」）の成形においては、飾り板4枚の成形（粘土紐積み上げ）を同時並行で行うのではなく、対向する2枚の飾り板（①・③）の成形を行ったのち、他の2枚の飾り板（②・④）の成形を行う。その後、両者の接合箇所に補強粘土を貼付する（第6図8）。

先に検討した通り、「基部粘土紐」は、飾り板②・④の下に粘土紐を設置したのち、飾り板①および飾り板③の下に粘土紐を設置している。これに対して、飾り板「下半部」の成形においては、飾り板①・③を先に、②・④をあつて積み上げている。このように、「基部粘土紐」設置の順番と、飾り板下半部積み上げの順番が一致していない点を特記しておきたい。

本資料（第1図）は飾り板「中位」までしか遺存しないが、他の破片を見る限り、飾り板の粘土紐積み上げを終了した段階で、飾り板の全周を刀子状工具によって整形している。形象埴輪の「部材」の外周に刀子状工具による整形痕が認められることが多いが、多く場合、ただ単に外形（外周端部）を整えているのではなく、粘土紐積み上げによって作出された概形を最終的に刀子状工具で切り整えていること——つまり、形象埴輪の粘土紐積み上げ成形と端部整形が不可分の技法である可能性を指摘しておく⁵⁾。

第2図2～6、第3図7～9は、飾り板の上部および鰭部の破片である。2の下端には粘土紐接合箇所に相当する不連続面が看取できる。粘土紐接合面を境に上下に「割れ」る場合、下の破片の上端が「擬口縁」状の凸面を呈するのに対して、上の破片の下端は、「擬口縁」を反転させた凹面をなす⁶⁾。2の下端にもこのような凹面が看取できる。破片中位および外側鰭部にも粘土紐接合面に沿った「割れ」が認められる。3の上部にも同様の痕跡が見られる。6は対向する飾り板2枚の内縁側の破片である。

粘土紐接合箇所での「割れ」が見られるほか、下端には「擬口縁反転凹面」が見られる。

第3図10～16、第4図17・20～22は、飾り板の中位から下位の破片である。10・12・16・20の上端は「擬口縁凸面」状の形状をなし、8・10の下端は「擬口縁反転凹面」状をなす。12の中位には粘土紐接合面に沿った「割れ」が多数認められる。13も同様な「割れ」が看取できる。14は粘土紐「1単位」分の幅に対応する破片である。17は飾り板下端の破片で、飾り板受部に接する部分である。この破片の下端の形状を見ると、飾り板受部の上面は受部中央に向かって緩やかに傾斜しており、第1図のような「有孔閉塞」による受部上面の形状とは異なるタイプと思われる⁷⁾。またこの破片は、「基部粘土紐交差」タイプではなく「基部粘土紐連接」タイプと思われる。

第4図23～25は飾り板受部の破片である。いずれも、京都大学総合博物館所蔵品との接合関係が確認されている。飾り板受部から軸部に移行する部分の内面に、全周にわたって剥離痕が残存するので「環状閉塞」タイプと思われる。第4図18・19は、立ち飾りの軸部の破片である。内面のユビナデ調整が丁寧に施されており接合痕は遺存しないが、粘土紐を積み上げて成形していると思われる。

4 西都原171号墳にみる蓋形埴輪立ち飾り部の製作技法

西都原171号墳の蓋形埴輪の飾り板には、各部に粘土紐の接合面（不連続面）が看取できるので、飾り板は、1個あるいは複数の「粘土塊」を圧延するのではなく、複数の粘土紐を「重ね合わせる」ことによって成形されていることがわかる。

本古墳で出土した蓋形埴輪の飾り板は、すべて粘土紐の接合面に沿って「割れ」が進行しており、飾り板の破片には「擬口縁凸面」や「擬口縁反転凹面」が、非常に明瞭な不連続面として遺存している。また、飾り板の各破片に見られる「擬口縁凸面」はすべて破片の「上端」に見られ、「擬口縁反転凹面」もすべて破片の「下端」に見られることから、飾り板の成形時には、「下位」から「上位」に向かって粘土紐の積み上げが進行したと考えるべきである。

また、「粘土紐接合面」は、飾り板4枚の接合部から飾り板の外縁に向かって——すなわち、飾り板の中軸から外側に向かって低くなっている状況が看取できる（第1図a～d）。このような、「内高外低」とも呼ぶべき粘土紐積み上げ手法は、飾り板の下位・中位・上位、さらには外側の鰭部などにも観察できる。本古墳では、同一個体の飾り板4枚が遺存する個体はないが、ほぼ全ての破片に「内高外低」の粘土紐接合痕が看取できるので、飾り板4枚とも同様の手法で製作していたものと思われる（第6図9）。このような特徴から考えると、本古墳出土の蓋形埴輪飾り板は、軸部および受部が正位になるように置いた状態で、その上に粘土紐を順次積み上げていったものと思われる。

飾り板受部については、大きく外反する「受部」の内面に「環状」に粘土紐を貼付して閉塞する「環状閉塞」技法が認められ（第6図3）、「飾り板基部粘土紐」の設置手法については、「基部粘土紐連接」タイプの可能性が高いことを指摘した（第6図6）。

飾り板の成形に際しては、飾り板4枚を同時並行で積み上げていくのではなく、まず対向する飾り板2枚を積み上げたのち、残りの飾り板2枚を積み上げていることが判明した（第6図7）。最初に、対向する2枚の飾り板をどの高さまで積み上げるのか不明であるが、飾り板交差部中位と飾り板受部の口縁部を結ぶラインで、いったん積み上げを休止している可能性が高い（第6図8）。残り2枚の飾り板

もそのレベルまで積み上げたのち、あらためて飾り板4枚の粘土紐積み上げを飾り板の上端まで進めている。飾り板各部の破片の「割れ」面を観察する限り、飾り板中位から上位においても、「内高外低」になるように粘土紐積み上げが行われている可能性が高い（第6図9）。飾り板の上端まで粘土紐が積み上げられたのち、最終的に、刀子状工具による「端部切削整形」により、飾り板4枚の概形を整えたのち（第6図10）、刀子状工具による線刻を施す（第6図11）。

5 まとめに代えて

従来の蓋形埴輪研究においては、飾り板や笠部の紋様・造形の検討に主眼が置かれており、基台部と笠部の接手法など一部をのぞけば、製作技術の検討が十分になされてきたとは言い難い。そのような中で、近年、新たな視点による観察所見や検討結果が提示されており、注目される。

まず、大阪府堺市飯塚山遺跡出土の蓋形埴輪を再検討した辻川哲朗は、飾り板の両面に板状品の圧痕、また受部の内面に小孔を見出し、これらの痕跡が乾燥による飾り板の変形を防止するために用いた「羽子板状」の「支持具」の痕跡であることを指摘した（辻川2007）。あらかじめ板状に成形した「部材」を組み合わせるのであれば、このような技法を用いる必要はないはずで、上記の痕跡は粘土紐積み上げによる飾り板製作と関連する技法である可能性が高い。

また十河良和は、大阪府堺市百舌鳥御廟山古墳の発掘調査報告書において、蓋形埴輪の「飾り板」や「飾り板受部」の製作技法を検討している（十河2011）。飾り板基部の「粘土紐」についての観察所見や、飾り板の粘土紐積み上げ成形など、本稿の内容と関連する部分も少なくない。

小稿では、西都原171号墳出土蓋形埴輪の立飾り部について、基礎的な観察所見を提示するとともに製作技法の再検討を行ったが、他の古墳出土例の検討結果も踏まえると、単なる個別事例ではなく蓋形埴輪の製作技術一般に関わる普遍的な論点を含むと考える。また同様な視点は、蓋形埴輪にとどまらず、他の器財埴輪や家形埴輪の製作技術にも通底する問題点を含んでいる。今後とも、先例にとらわれない観察所見の蓄積および各種技法の概念化を積極的に進めていく必要があるだろう。

謝辞 宮崎県立西都原考古博物館に所蔵されている西都原171号墳出土埴輪の調査研究に際しては、同館の北郷泰道・東 憲章・二宮満夫・橋本英俊・吉本正典・甲斐貴充・福田泰典・藤木 聡の諸氏および宮崎県埋蔵文化財センターの松林豊樹氏のお世話になりました（所属は全て調査時、年次順）。また、京都大学総合博物館に所蔵されている西都原171号墳出土埴輪の調査研究に際しては、山中一郎先生のほか、阪口英毅・東村純子・村上由美子の諸氏のお世話になるとともに京都大学考古学研究室のご協力を得ました。皆様方のご協力・ご高配に対して、心より感謝申し上げます。

付記 小稿に掲載した図面は今回新たに作成し、掲載写真も新たに撮影した。埴輪の実測は犬木（大阪大谷大学）・近藤（大阪大谷大学大学院生）・金行美智子（宮崎市教育委員会）が行い、トレースは近藤が行った。写真撮影は近藤の協力を得て犬木が行った。実測図の版組は近藤の協力を得て犬木が行い、写真図版の版組は近藤が行った。第6図の製作工程模式図は、犬木の助言を得て、近藤が作図・トレースを行った。本文の執筆は、1・2・4・5を犬木、3を犬木・近藤が行った。

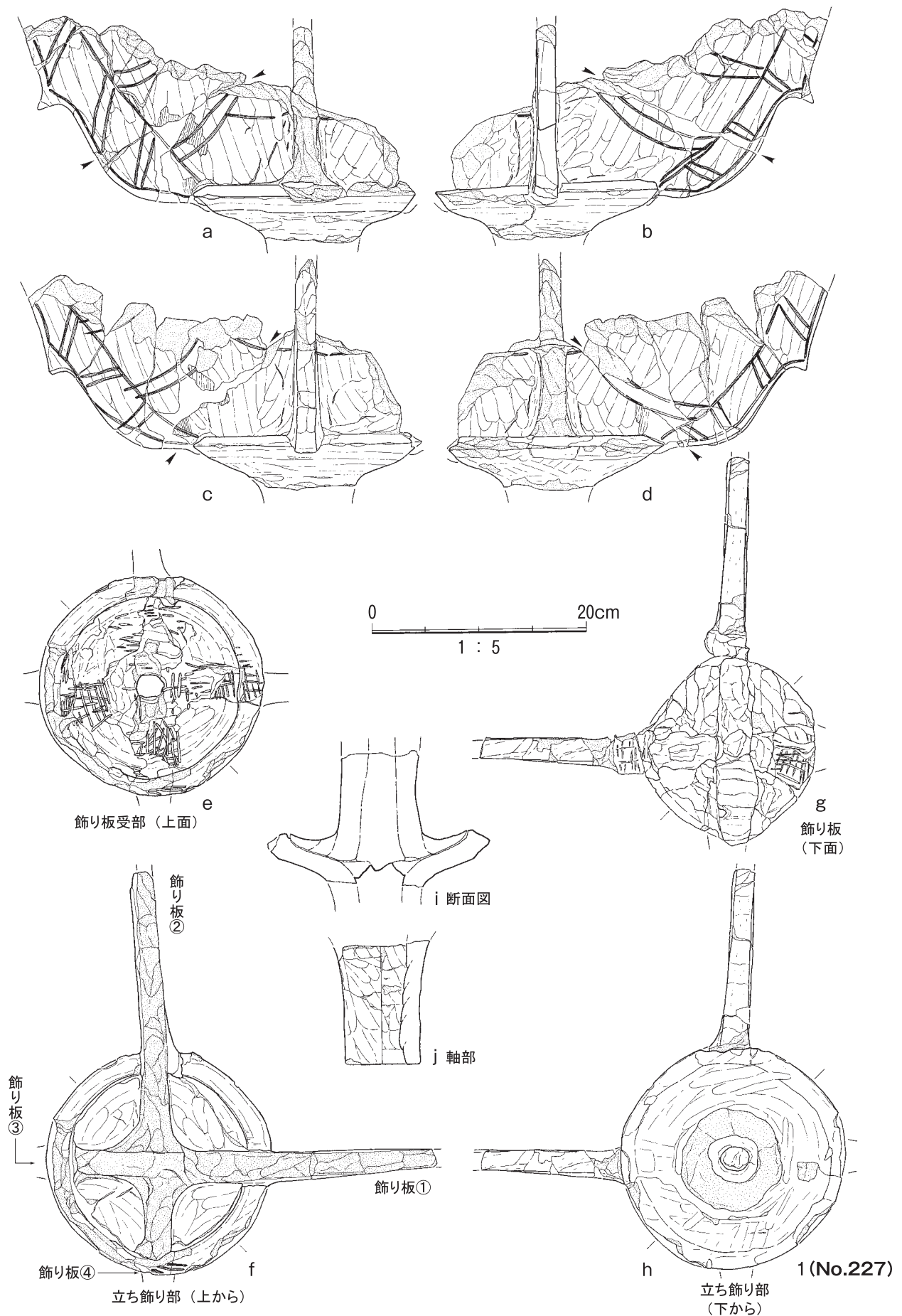
なお本稿は、平成16年度文部科学省科学研究費補助金（若手研究（B））による研究成果の一部を含む。

【註】

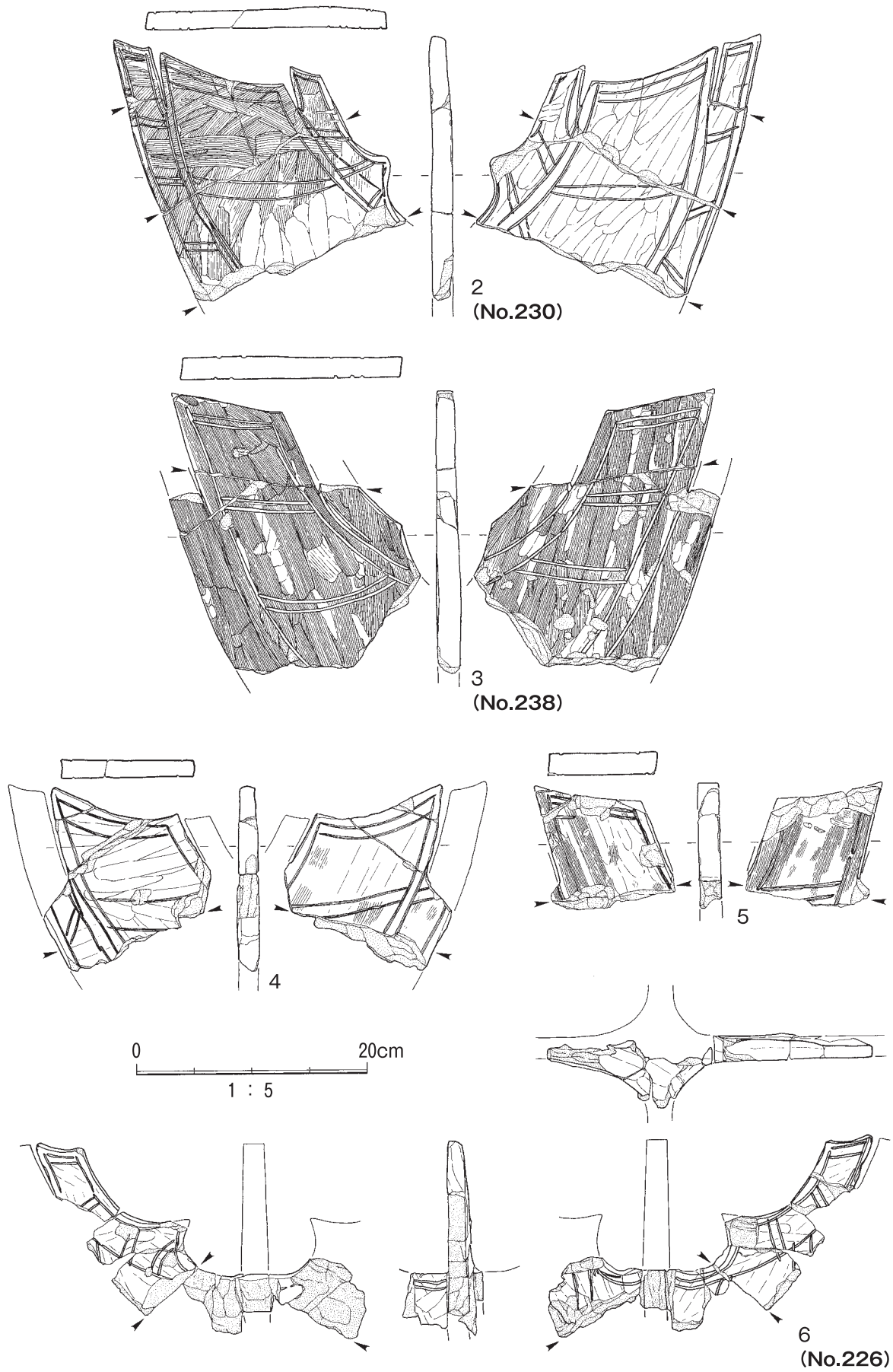
- 1) 飾り板受部を作出するこのような技法を「環状閉塞」技法と呼称する。
- 2) 飾り板の基部に設置される粘土紐を「飾り板基部粘土紐」、このような技法を「飾り板基部粘土紐設置技法」と呼称する。
- 3) 「飾り板基部粘土紐」のうち、先に設置された粘土紐を「先置粘土紐」、あとに設置された粘土紐を「後置粘土紐」と呼称する。
- 4) 「先置粘土紐」と「後置粘土紐」が十字に交差するものを「基部粘土紐交差」タイプと呼称する。また、「先置粘土紐」中央の両側面に、「先置粘土紐」に直交する方向に「後置粘土紐」を付加するものを「基部粘土紐連接」タイプと呼称する。
- 5) 形象埴輪の「部材」に看取できるこのような技法を「端部切削整形」技法と呼称する。
- 6) 前者を「擬口縁凸面」、後者を「擬口縁反転凹面」と呼称する。
- 7) 飾り板受部のこのような形状を「無閉塞」タイプと呼称する。

【参考文献】

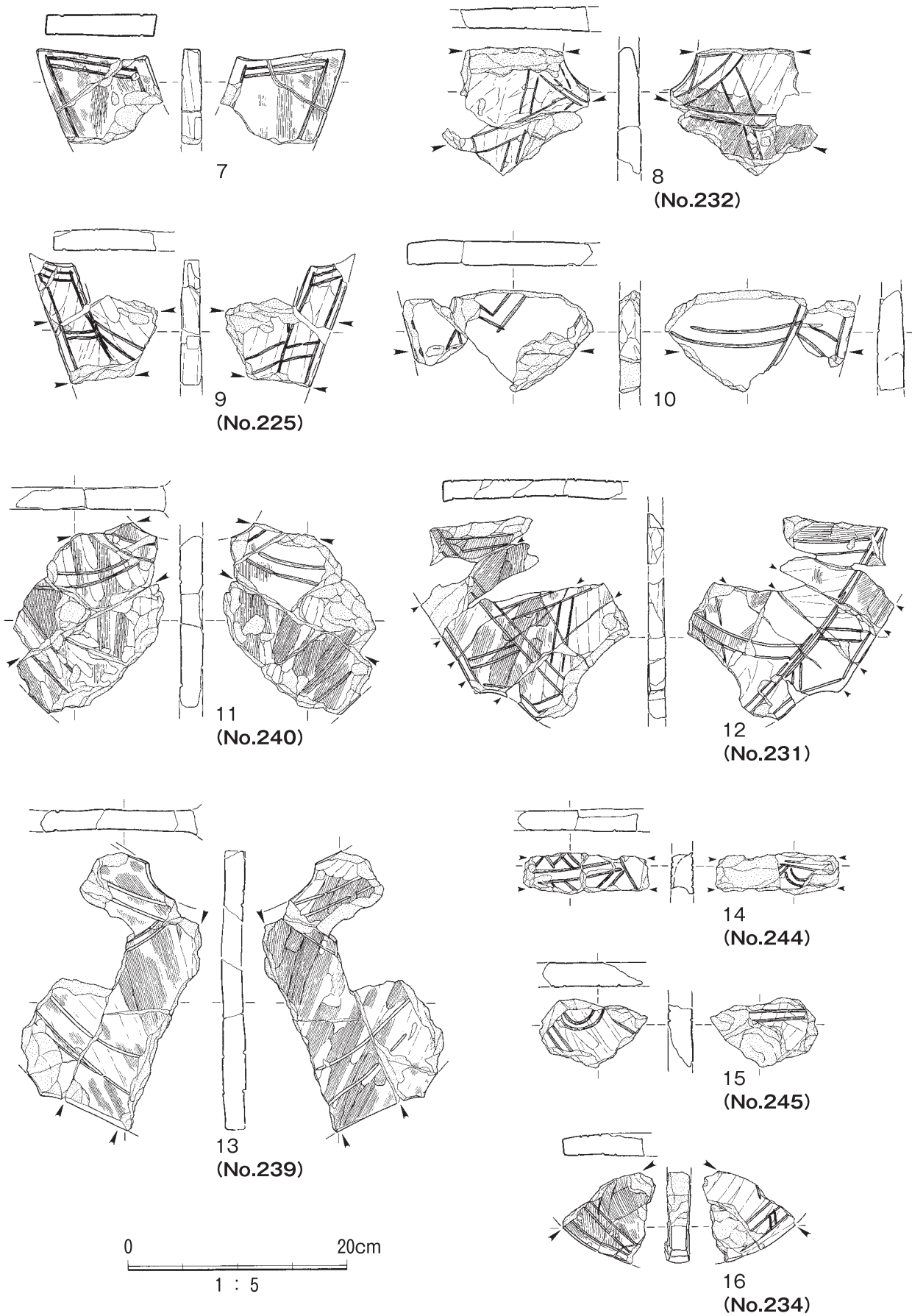
- 犬木 努 2007「西都原の埴輪から見えてくるもの—カタチ・技術・工人・組織—」『巨大古墳の時代—九州南部の巨大古墳—』宮崎県立西都原考古博物館、44～48頁
- 犬木 努ほか 2008『西都原169号墳（遺構編）西都原170号墳（遺構編）』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第7集、宮崎県教育委員会
- 犬木 努ほか 2010『西都原169号墳（遺物編）西都原170号墳（遺物編）』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第9集、宮崎県教育委員会
- 犬木 努・近藤麻美・金行美智子 2011「西都原古墳群出土埴輪の補足調査—宮崎神宮徴古館旧蔵埴輪を中心として—」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第7号、宮崎県立西都原考古博物館、45～57頁
- 十河良和 2011「蓋形埴輪について」『百舌鳥古墳群の調査5 御廟山古墳（GBY-6）発掘調査報告書』堺市教育委員会、162～163頁
- 高橋克壽 1993「西都原171号墳出土埴輪について」『宮崎県史研究』第7号、宮崎県、39～59頁
- 辻川哲朗 2007「堺市飯塚山遺跡出土蓋形埴輪について—埴輪の乾燥工程に関わる器面痕跡—」『埴輪論叢』第6号、埴輪検討会、31～37頁
- 浜田耕作・柴田常恵 1915「第二百十号塚」『宮崎県児湯郡西都原古墳調査報告』宮崎県、101～106頁
- 松林豊樹 2003『西都原171号墳（第1分冊）』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第4集、宮崎県教育委員会
- 松林豊樹 2004『西都原171号墳（第2分冊）』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第5集、宮崎県教育委員会
- 宮崎県 1915『宮崎県児湯郡西都原古墳調査報告』



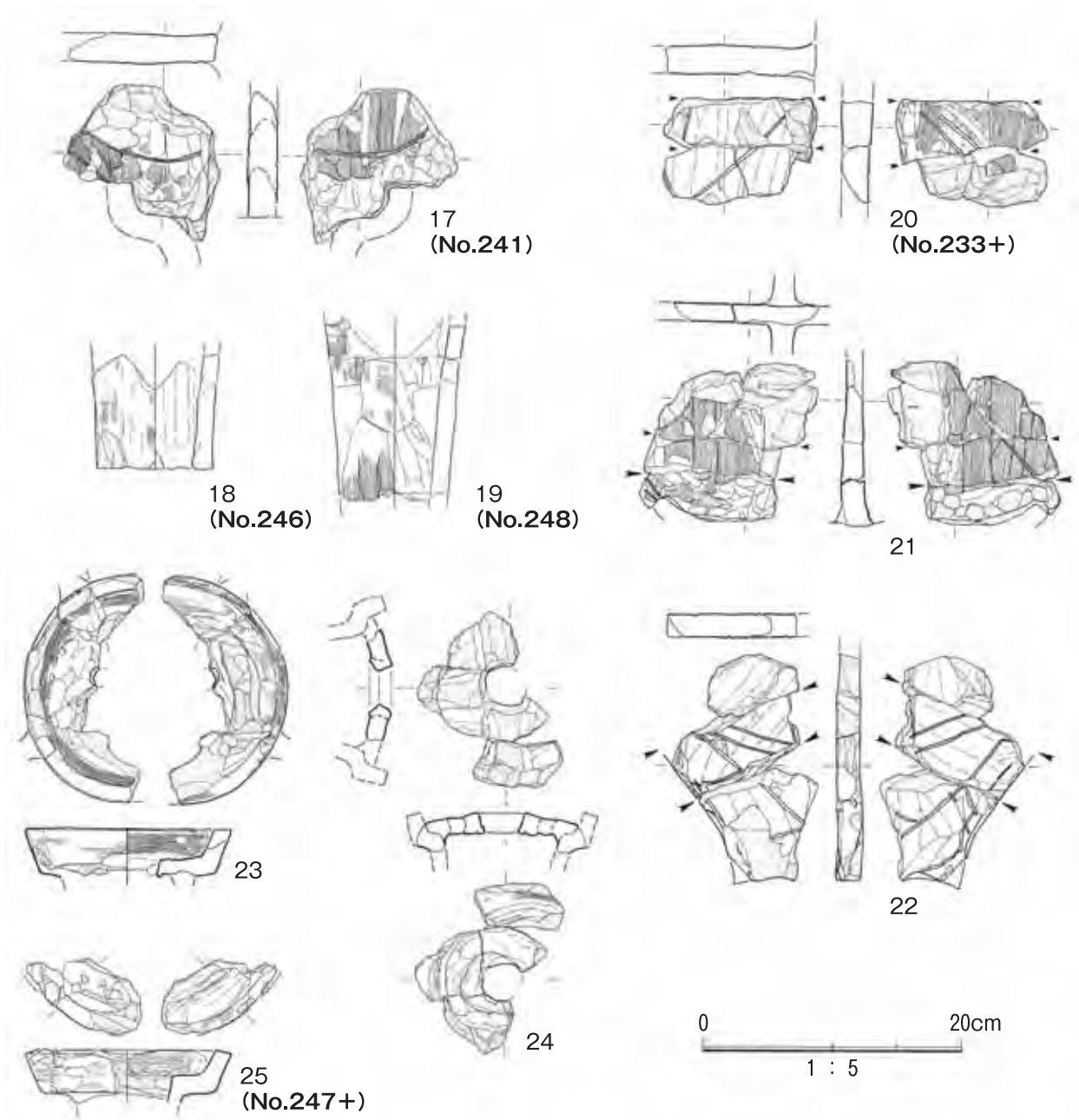
第1図 西都原171号墳出土蓋形埴輪実測図 (1)



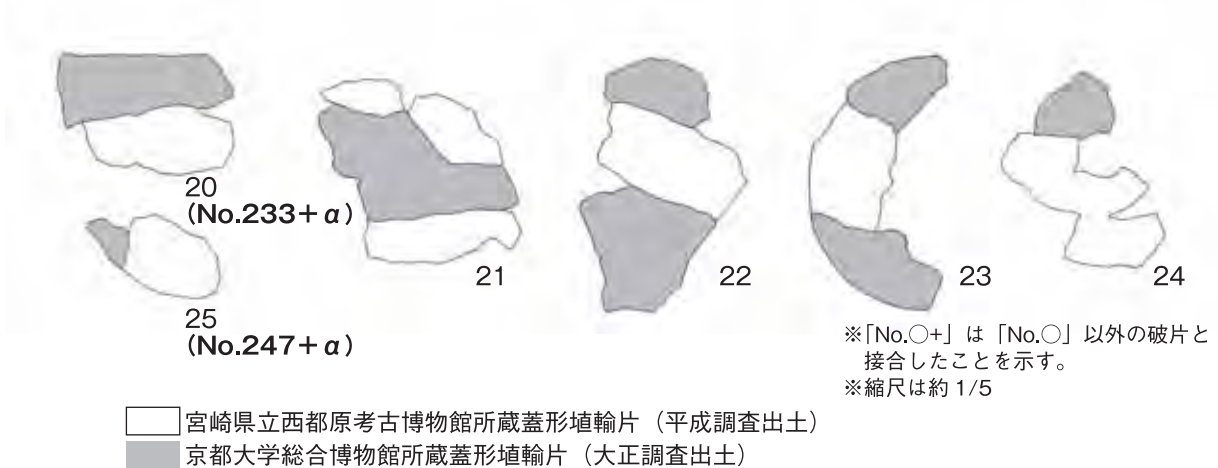
第2図 西都原171号墳出土蓋形埴輪実測図(2)



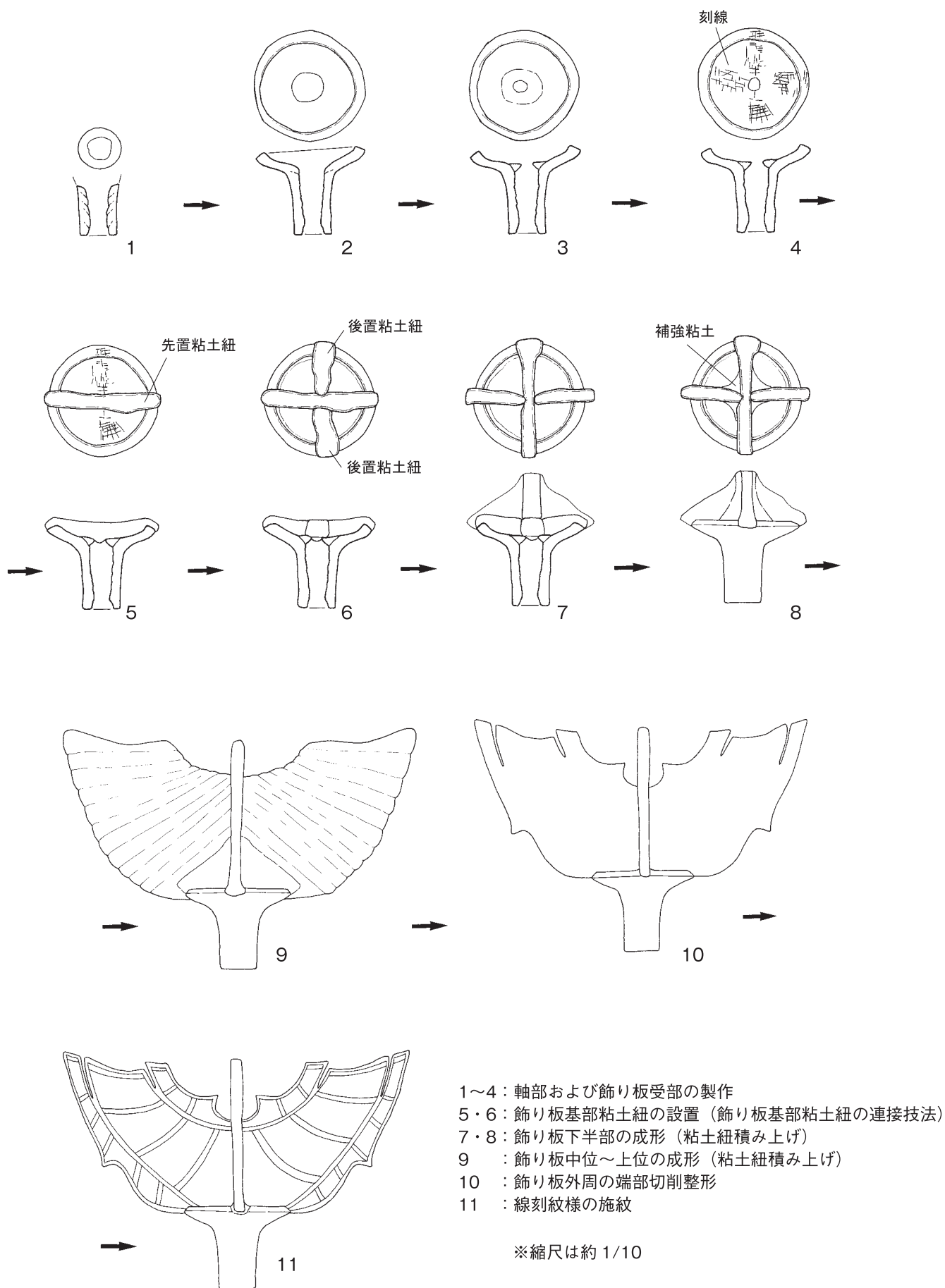
第3図 西都原171号墳出土蓋形埴輪実測図(3)



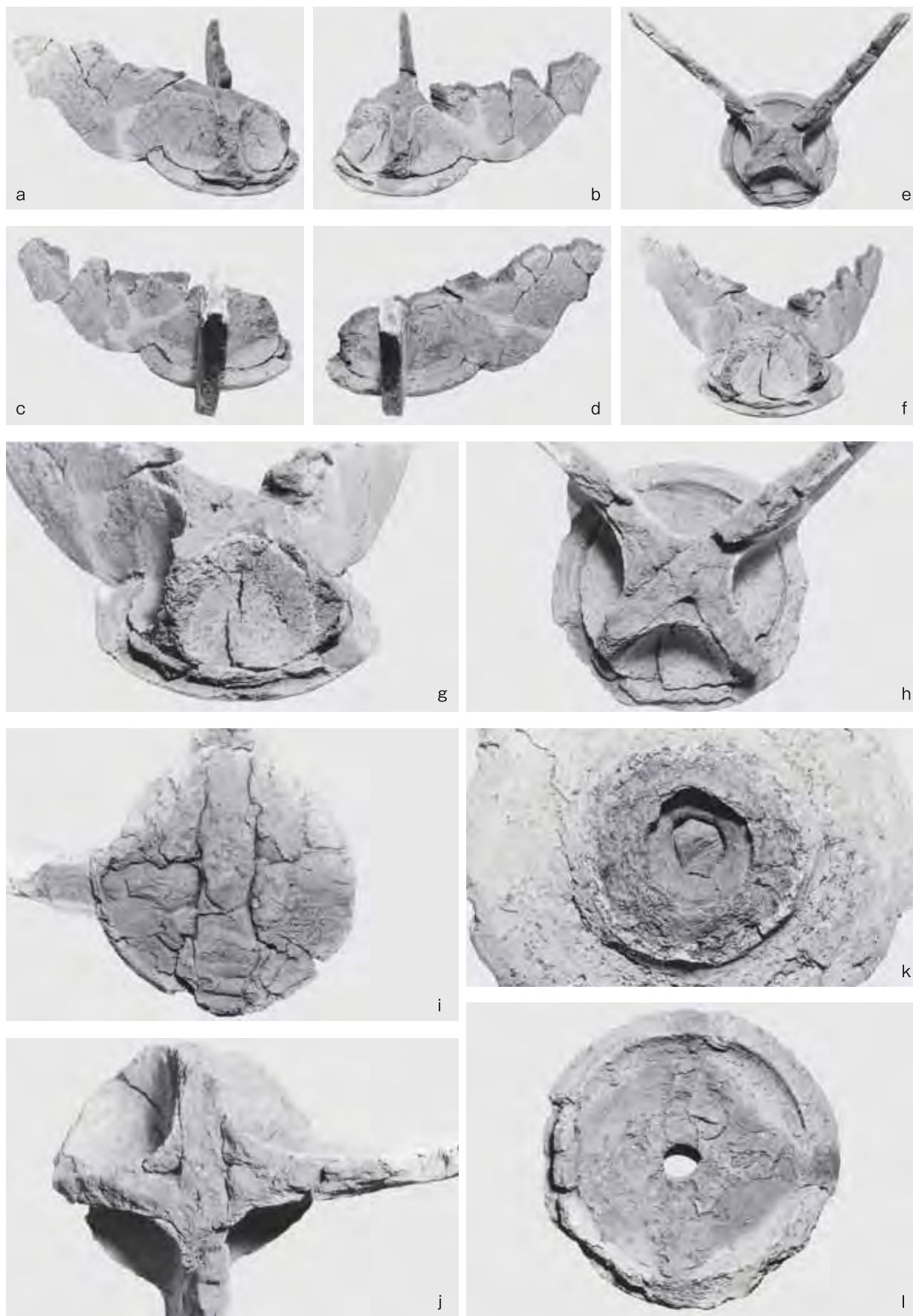
第4図 西都原171号墳出土蓋形埴輪実測図（4）



第5図 大正調査・平成調査出土蓋形埴輪の接合関係[西都原171号墳]



第6図 西都原171号墳出土蓋形埴輪の立ち飾り部製作工程（模式図）



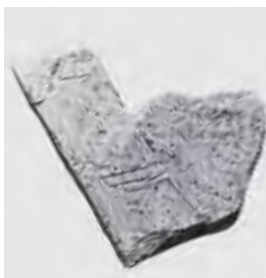
1 (No.227)



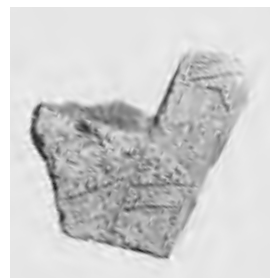
2 (No.230)



9 (No.225)



3 (No.238)



13 (No.239)



6 (No.226)



11 (No.240)



12 (No.231)



8 (No.232)



17 (No.241)

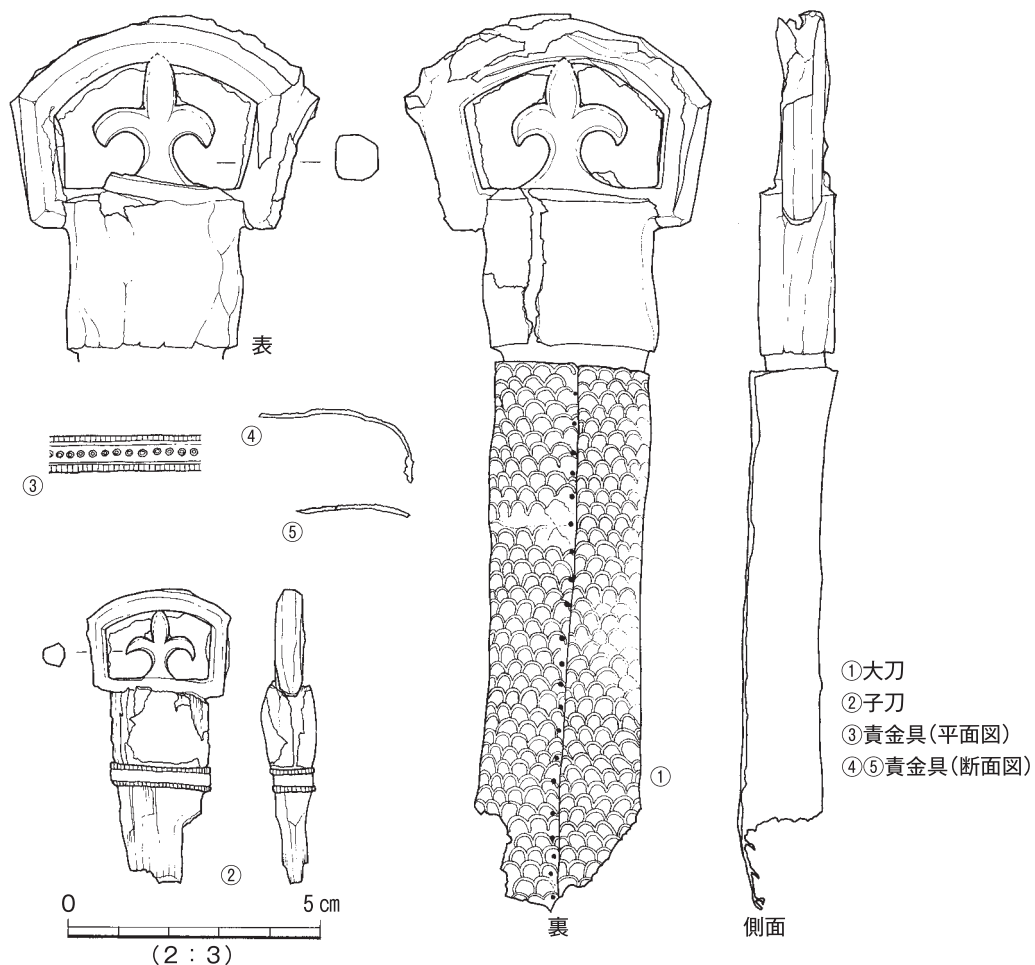


宮崎県持田古墳群出土三葉環頭大刀について

甲 斐 貴 充

1. はじめに

今回資料紹介する持田古墳群出土の三葉環頭大刀[第1図]は、環頭部の外環が円形ではなく、蒲鉾の断面形のように横長長方形の上辺が緩やかに湾曲する上円下方形タイプであり、国内に出土類例が少ない。同タイプの出土例は、三国時代の朝鮮半島、特に半島東南部の新羅の支配地における出土例が圧倒的に多く、新羅系の資料として扱われてきた。古くは、報告書(宮崎県教委1969)において、梅原末治氏が「この大小一具の柄頭は南鮮の三国鼎立時代の古新羅・伽耶地区の環頭を特徴付ける」と指摘している。そうした経緯により、本資料は新羅系考古資料として認識されることが多かった。しかし、本年度、当館で開催した国際交流展「覇者の愛した煌めき」(西都原考古博2011)において、類例とも言える朝鮮半島出土の三葉環頭大刀数例を同時に展示し、比較したところ、いくつかの相違点を確認できた。そこで、本稿では、三葉環頭大刀の先行研究や朝鮮半島出土例を参考にしながら、その特徴についていくつか言及することにする。

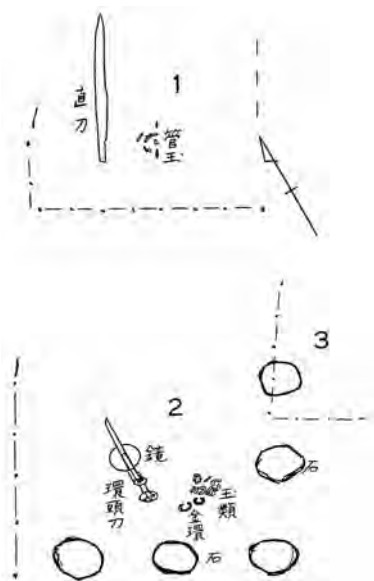


第1図 持田古墳群出土 三葉環頭大刀実測図

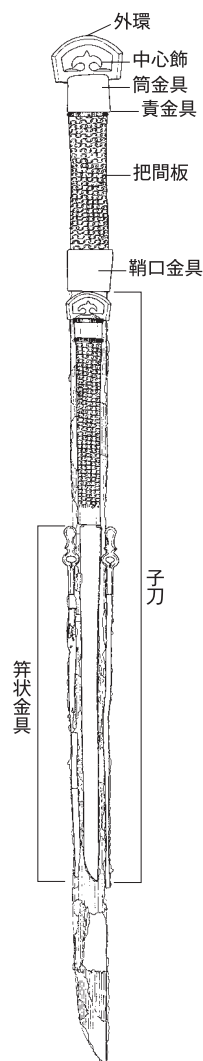
2. 出土状況

三葉環頭大刀の出土した持田古墳群は、児湯郡高鍋町大字持田の小丸川下流左岸の台地上に展開する古墳群である。古墳群は、前方後円墳9基・帆立貝形墳1基・円墳75基の計85基から構成される^{註1)}。1929～1930年頃に大規模な盗掘を受けたが、1931年以降、梅原末治氏が流失した資料をはじめとする追跡調査を行い、一定の成果をあげ、1969年に『持田古墳群』の報告書(宮崎県教委1969)を刊行するに至った。また、古墳群から出土した資料の多くは、一旦多くの人々の手に渡ったのであるが、追跡調査の過程でその多くが宮崎県に戻り、現在では県総合博物館や県立西都原考古博物館に収蔵されている。

今回紹介する三葉環頭大刀も、そうした盗掘の惨禍に見舞われた資料の一つであり、報告書によれば、墳長46mの前方後円墳である26号墳(山の神塚古墳)[旧28号墳]^{註2)}から出土したとされる。梅原氏の聞き取り調査によれば、本資料は、他の遺物の出土状態から複数埋葬と考えられる後円部から、玉類(ガラス製勾玉・水晶製勾玉・水晶製切子玉・管玉などとされる)や垂飾付耳飾とともに、銅鏡^{註3)}と重なるように大刀と子刀の2本1対で出土したとされる[第2図]。現在、本資料は、県立西都原考古博物館が収蔵しているが、大刀・子刀ともに環頭部から把部にかけての部分のみが現存している。報告書によれば、発見当時には刀身までを含んだ完形に近い状態で残存していたようである。



第2図 持田26号墳出土状況



第3図 三葉環頭大刀各部名称

3. 26号墳[旧28号墳]出土三葉環頭大刀について [第1図、写真図版1・2]

本資料の残存部は部分的ではあるが、多くの情報を有している。この残存している部分の各属性について、先行研究で分類(具1998・金2011など)されているものを引用しながら、本資料の詳細について述べることにする。なお、各部の名称等については、先行研究などを参考にして第3図に記している。

①大刀 残存長17.5cm・柄部の幅は3.2cm、環頭部の幅は5.7cmである。外環部分は、鉄地銀張であり、幅約7～8mmで、断面形は外側に4本の稜線をもつ不均等な六角形を呈し、平面形は上円下方形である。中心飾部には三葉の文様が施されており、上円下方形タイプの三葉環頭大刀に分類できる。中心飾部は、錆化著しく不明であるが、鉄地銀張の可能性はある。外環と中心飾部は、X線写真(写真図版2—①③)から判断する

と、中心飾部を外環に差し込む別造りのタイプと考えられる^{註4)}。把間部分は、破損や欠損が著しいが、薄い銀製の金属板の把間板を巻き、把頭部側の端を筒金具で固定している。把間板に用いられている金属板全面には、裏側から打ち出すことによって作り出した連続した魚鱗文を施している。把間部の鞘口側は欠損しており不明であるが、他の類例を考えると、鞘口部側の端部にも筒金具(鞘口金具)が存在したと考えられる。また、筒金具の下端部には、鉄地金銅張の責金具がある^{註5)}。責金具の文様は、両端に縦位の刻目文、その中央部には連珠文が施されている。また、把に巻き付ける把間板を連結する方法としては、佩裏部分の中央部を合わせた後に、4～5mm間隔を釘で留めるタイプである。

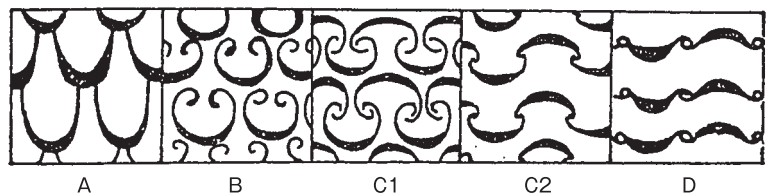
②子刀 残存長5.8cm・柄部の幅は1.9cm、環頭部の幅は2.8cmである。外環部分は、鉄地銀張であり、幅約4mmで、断面形は外側に若干不明瞭ではあるが4本の稜線をもつ不均等な六角形を呈し、平面形は上円下方形である。中心飾部は、大刀とは異なり、鉄地金銅張である。外環と中心飾部は、大刀と同じく、中心飾部を外環に差し込む別造りのタイプである。把間部分は、環頭部側の筒金具とその下端部の責金具のみが残存する。責金具の文様は、大刀と異なり、上下両縁部に縦位の刻目文のみを施している。

4. 朝鮮半島出土の三葉環頭大刀との属性比較

前述したように、上円下方形タイプの三葉環頭大刀の出土例は、日本国内にほとんど無く、朝鮮半島、特に半島南東部の新羅の支配地域が多い。ここでは、類似出土例との比較によって、本資料の位置付けについて考えてみる。各属性比較の視点としては、三葉環頭大刀をはじめ、朝鮮半島出土の装飾付環頭大刀の技術系譜について分析を行っている先行研究(穴沢・馬目1979, 具1998, 金2011)を参考にする。

① 把間の金属板文様について

上円下方形タイプの三葉環頭大刀における把間板の文様は、穴沢啄光・馬目順一氏が鱗状文のB・C1・C2・D類に分類(穴沢・馬目1979)したように、韓国義城鶴尾里古墳1号石室出土例(第6図-3)や慶山林堂6A号



第4図 鱗状文分類図(穴沢・馬目1979より)

墳出土例(第6図-1)などC字形の連続文を組み合わせた連弧文が一般的である。連弧文には全て同じ向きのタイプや交互でC字形の上下を入れ替えるタイプなどがあるが、特に新羅支配地域出土のものは、交互で上下を入れ替えるタイプである。本資料は穴沢・馬目分類のA類が上下逆さまとなった魚鱗文である。本資料と類似した魚鱗文は、新羅支配地域出土のものよりは、羅州新村里9号墳出土の円形三葉環頭大刀や咸陽白川里I-3号墳出土の素環頭大刀(第6図-6)のように百済・加耶支配地域の遺跡からの出土例が多い。そうしたことから、本資料は百済・加耶など新羅以外の地域で製作された可能性がある。しかし、その一方で、蔚山早日里80号墳出土例(第6図-5)において、本資料以外に魚鱗文を施した上円下方タイプ三葉環頭大刀があり、例外的ではあるが、新羅支配地域にも魚鱗文を施す工人が存在した可能性も捨てきれないのである。

② 責金具について

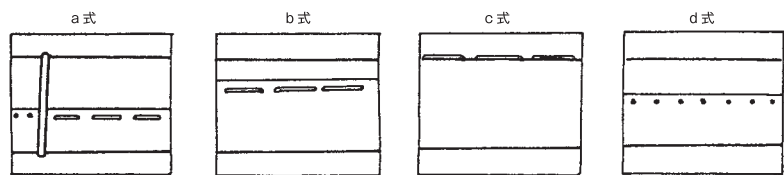
責金具を有する場合、朝鮮半島出土の上円下方タイプ三葉環頭大刀例は、前述した、慶山林堂6A号墳

(第6図-1)、CI-1号墳(第6図-2)出土例や韓国義城鶴尾里古墳1号石室出土例(第6図-3)のように、単純な縦位の刻目文が一般的である。しかし、本資料は、縦位の刻目文と連珠文の組合せ文様である。現段階で上円下方形タイプの三葉環頭大刀には、本資料に類する責金具文様はない。埼玉県將軍山古墳出土の変形三葉環頭大刀の責金具には、縦位刻目文と連珠文の組合せ文様が存在する。また、奈良県珠城山1号墳出土や韓国羅州伏岩里3号墳出土(第6図-8)の円形タイプ三葉環頭大刀・刀には、本資料のように中央部に施される連珠文ではなく、菱形文や、珠文と菱形の交互組合せ文と若干異なる類例が存在する。一方、他型式の単竜・単鳳環頭大刀の責金具には、新納泉氏がⅢ・Ⅳ式に分類(新納1982)する岡山県岩田14号墳出土単竜環頭大刀や大阪府塚原P1号墳出土単竜環頭大刀のように、両端部の縦位刻目文と、中央部の菱形文と珠文の組合せ文が存在する。このように、責金具の視点からも、朝鮮半島出土の一般的な上円下方形タイプの三葉環頭大刀とは製作技法が異なり、他型式の環頭大刀にその源流を求めることができる。

③ 把間板の連結方法について

朝鮮半島出土の上円下方形タイプ三葉環頭大刀例は、具滋奉氏が分類するa～c式(具1998)のように、佩裏部分の中央部や側面部分に、鋸状の金具で留めるタイプが一般的である。特に、韓国義城鶴尾里古墳1号石室出土例(第6図-3)や韓国星州星山洞旧1号墳(第6図-4)^{註6)}のように、側面部に鋸状の金具で連結するものが多い。しかし、本資料は、佩裏部分の中央部に、釘を用いて把間板の佩裏中央部を結合しているタイプ(同分類のd式)である。現段階では、上円下方形タイプ三葉環頭大刀で、本資料のように釘を用いている例は確認できていない。把間の金属板文様が同じ魚鱗文の咸陽白川里I-3号墳出土の素環頭大刀(第6図-6)

や羅州新村里9号墳出土の円形タイプの三葉環頭大刀は、連結方法が同じ釘を用いた方法を多く用いている。



第5図 把間板の連結方法(具滋奉1998より)

5. 持田古墳群出土三葉環頭大刀の製作地について

本資料は、形態系譜的には新羅支配地域に多く出土例が確認される上円下方形タイプの三葉環頭大刀である。しかし、把間板の文様・責金具・把間板の連結方法の3つの属性視点から考えると、細部の技術系譜的には、新羅支配地域よりは、むしろ百済や伽耶の支配地域、もしくは日本列島内で確認される資料との技術点での共通点が多い。ここに形態系譜と技術系譜の矛盾が生じることとなった。

現在のところ、朝鮮半島における新羅支配地域以外の上円下方形タイプの三葉環頭大刀は、韓国高靈池山洞45号墳出土例などと少ない。李漢祥氏は、大加耶の王墓と目される池山洞45号墳から三葉環頭大刀が出土した状況について、6世紀第2四半期頃、大加耶と新羅が密接な関係を築いていた影響により入手したものと捉えている(李2006)。また、金宇大氏は、上円下方形タイプの三葉環頭大刀が新羅地域以外で非常に少ない状況を、新羅地域の三葉環頭大刀において、極めて高い規格性と流通に対しての厳格な管理体制があったと想定している(金2011)。規格性の高いと想定される上円下方形タイプの三葉環頭大刀が新羅支配地域以外で出土する例が少ない事、また、細部において、そうした規格性と異なる技法が多く用いられている事、新羅地域と密接な関係にあるとは言い難い距離の離れた南九州で出土した事などから

考えると、新羅地域を出自と積極的に考える事は難しいと思われる。

ところで、持田大輔氏が竜鳳文環頭大刀の製作技術検討の論考(持田2006)の中で、銀貼有稜素環を持つ竜鳳文環頭大刀2例(福岡県箕田丸山古墳(第6図-7)と個人旧蔵資料)を特殊な例として紹介している。これらは、環頭部の外環と環中の中心部が別造り・外環が銀貼りで断面が六角形・貴金具が金製の双連珠魚々文(両端部が縦位刻目文、中心部が連珠文の組合せ文様と同義)など、新羅系三葉環頭大刀と共通の要素を持つとしているが、一般的な新羅系三葉環頭大刀よりも、個人旧蔵資料の貴金具の形態などはむしろ本資料との共通点が多いと考えられる。持田氏は、こうした百済・伽耶系の他にも新羅系の複数要素を持つ環頭大刀類を、第三国である日本列島内で製作されたと想定している(持田2006)。

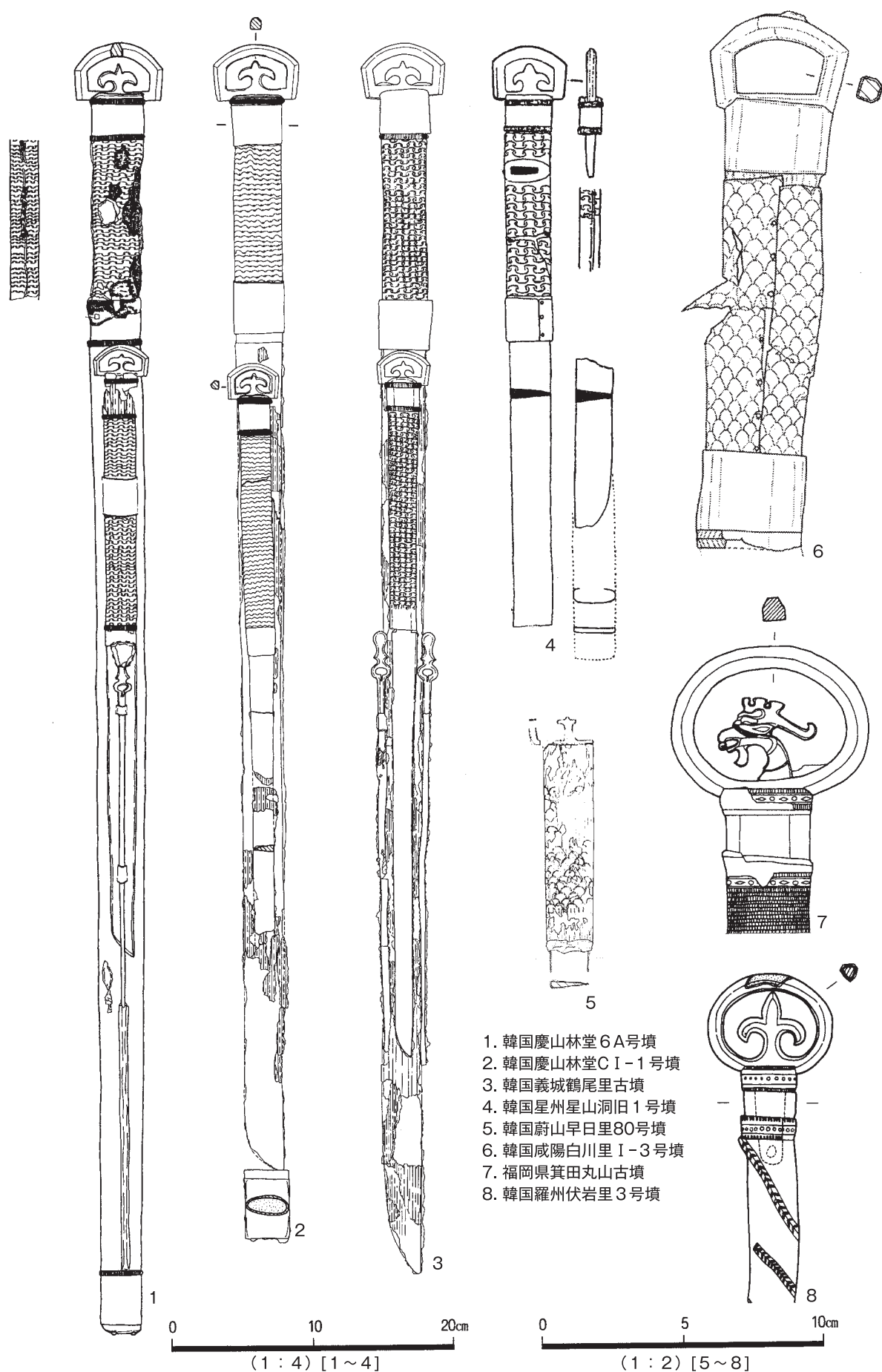
こうした先学の論点から考えると、本資料は、新羅地域で製作されたと考えるよりも、伽耶・百済地域、もしくは日本列島内で模倣製作された可能性や、伽耶・百済の工人が新羅で三葉環頭大刀を製作したとする可能性が考えられる。また、形態系譜と技術系譜の矛盾を説明する理由として、新羅地域で製作された三葉環頭大刀の把間板や貴金具を、伽耶・百済地域、もしくは日本列島内で補修した可能性も考えられるのではなかろうか。

持田26号墳出土の三葉環頭大刀は、古くは新羅地域を出自とする搬入品として考えられていた。しかし、近年の研究結果によると、新羅地域出自であることを積極的に評価する向きは少ないようである。本稿では、細部の技術系譜の検討を行ったところ、新羅地域以外で製作されている可能性が高いことを改めて指摘することができた。今回は資料紹介が中心となる内容であり、自身の勉強不足も加わって、本資料の明確な出自について言及することは出来なかったが、南九州において三葉環頭大刀が出土した理由も含め、今後も継続してこの問題に取り組みたいと考えている。

本稿を作成するにあたり、金宇大・柳澤一男・吉村和昭の各氏には文献の提供や多くの有益な御教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

【参考文献】

- 六沢咏光・馬目順一1979「日本・朝鮮における鱗状紋装飾の大刀」『物質文化』No.33 物質文化研究会
 李漢祥2006「伽耶の装飾大刀の変遷と画期」『古代武器研究』第7号 古代武器研究会
 金宇大2011「装飾付環頭大刀の技術系譜と伝播」『古文化談叢』第66集 九州古文化研究会
 慶北大学校博物館・義城郡2002「鶴尾里古墳」『慶北大学校博物館学術叢書』28
 具滋奉1998「三葉環頭大刀에 대하여」『科技考古研究』第4号 亞洲大学校博物館
 啓明大学校行素博物館2006『星州星山洞古墳群』啓明大学校行素博物館 遺跡調査報告 第13輯
 国立文化財研究所2001『羅州伏岩里3号墳』
 新納 泉1982「単龍・単鳳環頭大刀の編年」『史林』第65巻第4号 史学研究会
 福岡大学人文学部考古学研究室2004『長崎県・景華園遺跡の研究/福岡県京都郡における二古墳の研究/佐賀県・東十郎古墳群の研究』福岡大学人文学部考古学研究室調査報告第3集
 宮崎県教育委員会1969『持田古墳群』
 宮崎県立西都原考古博物館2011 国際交流展図録『覇者の愛した煌めき』
 持田大輔2006「龍鳳文環頭大刀の日本列島内製作開始時期と系譜」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』52
 早稲田大学大学院文学研究科
 嶺南大学校博物館1999「慶山 林堂地域 古墳群Ⅳ」『嶺南大学校博物館 学術調査報告』第25冊
 嶺南大学校博物館2003「慶山 林堂地域 古墳群Ⅶ」『嶺南大学校博物館 学術調査報告』第44冊



第6図 朝鮮半島出土の三葉環頭大刀

【註】

註1) 1961年に国指定史跡に指定された85基は前方後円墳10基・円墳75基となっているが、62号墳[旧61号墳]は帆立貝形墳、76号墳[旧20号墳]は前方後円墳かどうか判断できないので、本稿では前方後円墳9基・帆立貝形墳1基・円墳75基とする。また、現存する古墳は85基であるが、現段階では照会できない消失墳も含まれており、その数は85基以上になる。

註2) 持田古墳群は、1961年に国指定史跡に指定された際に以前と異なる古墳番号を新たに付している。以前の番号を「旧番号」、指定後の番号を「新番号」とする。本稿では新番号を用いるが、[]で旧番号を付け加えることにする。

註3) 出土した銅鏡は、報告書によれば、現在（財）五島美術館が所蔵する画文帯神獣鏡と考えられている。

註4) 本稿では、印刷の関係で判別しづらいが、X線写真のフィルムを見ると別造りであることがわかる。

註5) 報告書（宮崎県教委1969）では責金具が大刀に付属しているが、現在は付属していない。

註6) 本稿では、星山洞旧1号墳出土三葉環頭大刀の図面出典を『星州星山洞古墳群-第38・39・57・58・59号墳-』（啓明大学 行素博物館2006）の参考図面から引用したが、原典は朝鮮総督府1920『大正六年度古蹟調査』である。

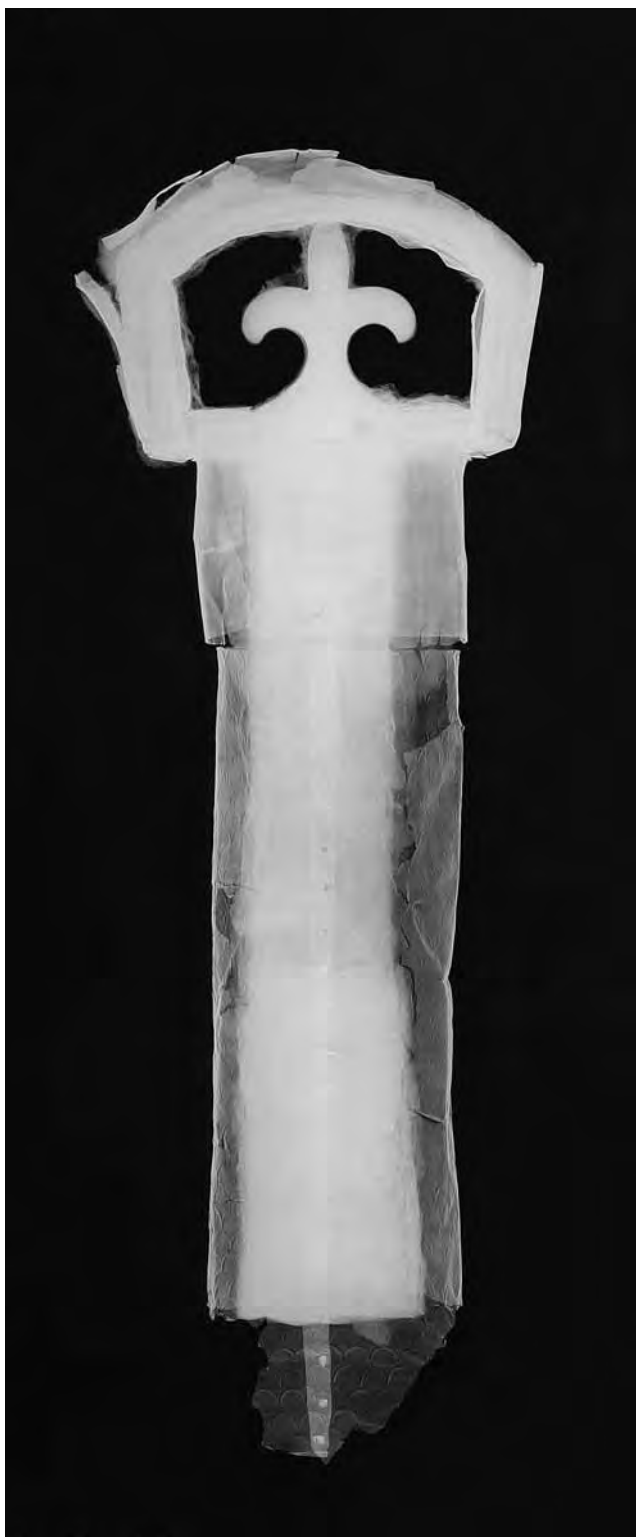


①大刀（左）と子刀（右）
②責金具 ③把間板と接合状況
④大刀の環頭部 ⑤子刀の環頭部

写真図版1 持田26号墳出土三葉環頭大刀

【図版出典】

第1図：著者製図／第2図：宮崎県教委1969／第3図：慶北大学校・義城郡2002を利用／第4図：穴沢・馬目1979を一部改変／第5図：具滋奉1998／第6図 1：嶺南大学校博物館2003 2：嶺南大学校博物館1999 3：慶北大学校・義城郡2002 4：啓明大学校行素博物館2006 5・6 金字大2011 7：福岡大学人文学部考古学研究室2004 8：韓国国立文化財研究所2001



①大刀



②子刀



③大刀環頭部拡大

新名爪に残る城郭遺構について

福 田 泰 典

はじめに

宮崎市新名爪に鎮座する新名爪八幡宮北側の丘陵で一つの城跡が確認された。地元にはその存在を窺わせるものとして、同八幡宮の裏手に位置するこの西蔭平の丘陵に「城木立^{じもくて}」の呼称が残されていたが、これまでその存在はほとんど知られていなかった。

宮崎県内で確認された中近世城館跡の数は、平成10年に刊行された宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書から拾い上げると、その規模や残存度合いに差異はあるもののその数は500を超える。しかし、その数は悉皆調査で得られた数であり、確たる保存の手立てが講じられた訳ではなく、その後の開発等の影響でその姿を消したり、計上からもれたこの新名爪の城跡のような確認事例もあつたりと、その数は今後も増減を繰り返すことが必至である。

本稿では、城跡が確認された新名爪という地域の歴史を概観し、確認された城跡の占地や構造について考察する。

1 新名爪という土地

宮崎市の中心部を貫流する大淀川左岸の垂水台地。この台地の縁辺部及び大小の派生した丘陵には、開析谷がよく発達し、多くの迫地形が見られる。新名爪はこの洪積台地から平野部に向けて派生した丘陵の北側に広がる一帯である。国道10号と国道219号の分岐点がここに位置しており、北バイパスの開通にともなって飛躍的に交通量が増大するとともに、商業施設も数多く集まったことでその景観を大きく変えた。

しかし、そこを流れる新名爪川の流域に広がった低沖積地に展開する水田地帯は、昨今の開発によりその面積は減少したとは言え、近隣の島之内、下那珂方面を見通すことができるほど今も広々とした水田地帯が展開している。それでは、この景観の源はどのぐらいの時期まで遡ることができるのであろうか。これまでに周辺で行われた発掘調査の記録にはその手掛かりが残されている。

(1) 発掘調査の成果から

新名爪周辺で発掘調査が行われた遺跡として、前田遺跡、^{まえだ}前田二月田遺跡、^{まえだ に がつ だ}北ヶ迫遺跡、^{きた が さこ}保木下遺跡^{ほきのした}の4遺跡が報告されている。個々の遺跡の概要は次のとおりである。

前田遺跡) 古墳時代から近世に至る遺構・遺物が確認され、霧島火山を起源とする高原スコリアに覆われた土層から水田跡や溝状遺構が検出されている。高原スコリアは、自然科学分析の結果から10世紀から13世紀の降下時期を得ており、植物珪酸体分析により多量のイネが検出された水田は平安時代中期から後期に位置付けられる。特筆できる遺物としては、水田耕作に使用した大足がある。ほぼ完形で出土しており、共伴した土器から古墳時代の6世紀後半の遺物に比定される。該期の大足がここまで良好な状態で出土した事例はなく、農耕文化を考える上で貴重な資料となっている。

前田二月田遺跡) 前田遺跡の北側に隣接する遺跡であり、氾濫原に流れ込んだ弥生土器を中心とする遺物が出土した。遺構としては溝状遺構1条が検出され、それに伴う遺物として底径が10cm前後の土

師器坏が2点出土している。両者とも糸切り底の個体であり中世に帰属する資料である。また、弥生時代の遺物の中には石庖丁も含まれ、該期にこの地域で水田が営まれていたことを示している。

北ヶ迫遺跡) 中世を除く縄文時代晩期から近世までの遺構が確認されているが、中世は遺物が若干含まれている程度である。検出された古墳時代から古代の竪穴住居跡7軒と近世の掘立柱建物跡8棟は時期的にかなり離れているが、眼下に広がる耕作に適した平地と、時としてそれを脅かす新名爪川の影響を受けないこの丘陵に居を構えた人々の選択は自然であろう。北ヶ迫遺跡の出土資料の中で特筆すべきものとして近世の道路状遺構の埋土中から出土した円面硯がある。出土状況を勘案して直接的に遺構との関係の中で捉えることはできないが、古代の竪穴建物跡が検出されていることからそれらの遺構と関連する遺物である可能性が指摘できる。丘陵上に他の場所からこの破片を持ち込んだとは考えにくく、識字層がこの地に存在したことの傍証となるであろう。

保木下遺跡) 新名爪川の河川改修に伴い調査が行われ、水田遺構とそれに伴う施設と考えられる溝状遺構(水路)などが検出されている。検出された水田の時期については、検出層の下層で確認された遺物等の様相から中世末から近世初頭の時期幅が想定でき、若干の時期差がある可能性が指摘されている。同遺跡内では畦畔によって明確に区分できる一単位ごとの水田面は確認されなかったが、調査区の北端部から新名爪川の方に向かって高低差を考慮して営まれていたことや、大小の水路によって灌漑されていた状況が明らかになっている。また、水田面から検出された縞模様状の遺構については、裏作として行われた耕作に由来する畑畝の可能性も指摘されている。

遺物としては弥生時代中期を中心とする大量の土器が出土しており、そのほかにも古墳時代の土師器・須恵器、中世の国産陶器や貿易陶磁(青花)が確認されている。

北ヶ迫遺跡を除く3遺跡での、稲作等の農耕に関連する遺構や遺物の存在、北ヶ迫遺跡で検出された複数時期の住居跡の存在。これらの事実は、新名爪の氾濫原に営まれていた生産の場と居住空間の土地利用上の相異も想定し得る材料である。新名爪近辺では中世の集落を捉えた調査事例はまだないが、保木下遺跡の所在する島之内や次郎ヶ別府のように低湿地の中に形成された微高地に展開する現在の集落も見受けられる。このような集落の立地は、その起源を少なくとも中世段階まで遡ることが可能であろう。また、新名爪の北に位置する広原地区には、本宿、麓地区のように丘陵の裾部に沿うように集落が点々と繋がっている状況も確認できる。眼前に広大な低地と新名爪川の流れを一定の距離を保つこのような集落立地も往時の景観を反映していると考えられるであろう。

(2) 文献史料に見える新名爪

新名爪の地名の由来についてはその詳細を把握していないが、到津文書の「八幡宇佐御神領大鏡」の中に記されている「新名爪別符」がその初見と考えられる。同文書には同別符に関して、国司の菅原義資が治暦2(1066)年に荒野を開発し、宇佐宮領に寄進し別符として立券した経緯が記されている。その後、養和年間(1181~1182)には、当時日向地頭であった土持景綱が宇佐八幡宮の分霊を勧請して新名爪八幡宮が創建された。古くは「土持八幡」とも呼ばれ、旧郷社としてこの地に生きる人々と今も共にある。土持氏は古代末から戦国期に至るまで、日向国内で一定の力を保ち続けた氏族で、日下部氏の

勢力基盤を継承することでその存在を確たるものとしたとされる。同八幡宮には、福岡県観世音寺、大分県宇佐八幡宮と合わせて3面しか残っていない室町時代の作とされる木造の舞楽面陵王が社宝として受け継がれてきている。同八幡宮が鎮座する丘陵中腹からは、その眼下に広がる水田地帯を一望でき、逆に水田地帯からは八幡宮を仰ぎ見ることができたはずであり、新名爪別符の神領経営における精神的な拠り所として大きな存在であったことは想像に難くない。同八幡宮に関する遷座等の記録は現段階では確認されていないことから、創建当時の場所に今日まで鎮座していると考えられる。また、建久8(1197)年の「日向国図田帳写」にも新名爪別符は田数80町として那珂郡の内に記載され弁済使として土持太郎宣綱の名が見える。

そのほかに、戦国期の新名爪を知ることができる文献として宮崎城主であった島津の武将上井覚兼が記した「上井覚兼日記(伊勢守日記)」の存在を忘れてはならない。同日記には新名爪関連の記事が散見されるが、天正14年10月12日の条に次のような記述がある。

(前略) 拙者も十四日打出之由、佐土原より承候つる間、其分二校量申て候へ共、又々、十五日可然由候間、如其打出可申由申候、海田衆之事、新名爪にて可待合由、申候也、飢肥之返書到来候、續之義、其覚悟由有也、(後略)

この時期、島津氏は豊後の大友氏と日向国領有権争いの最中であり、日向地頭の上井覚兼も義久に伴って進軍する。日記の内容は、南から参集してくる海田(加江田)衆に対し覚兼が合流場所として新名爪を指示したものであり、当時の北進ルート上に新名爪があったことを示している。現在、新名爪周辺の北進ルートは、北バイパスと花ヶ島から芳土、蓮ヶ池を経て新名爪に至る旧国道10号の2つが存在する。当然のことながらバイパスルートは丘陵の開削で設けられたものであり、旧国道沿いのルートが本来の北進ルートと考えられる。ただ、この付近は蓮ヶ池の地名が示すとおり、迫地形から湧出した水を水源とする溜池や沼が今でも残っていることや、旧小字名に小牟田、西牟田などの湿地に由来する地名も残っていることから、小径の存在は別として主要な交通の経路として選択される場所であったかは疑問が残る。しかし、現地地形を見る限りでは切通状の開削の痕跡が見られないこと、丘陵間に一定の距離もあることから、その間にルートが存在したと考えることが妥当であろう。

古代・中世において日向の国の主要な位置を占めた西都方面へと至る米良街道に沿うルートと微高地に展開した集落を繋ぐように住吉を経て佐土原の下田島方面へ連絡するルート。参集の場所としてこれら2つルートの分岐点である新名爪が選ばれたことは、当時既に交通の要衝として位置付けられていたと考えることができるであろう。

2 確認された城跡

宮崎市街地を流れる大淀川周辺からこの新名爪、島之内周辺には文献にその名が残る城跡のほかにも、これまでの悉皆調査等で中世城郭の存在が確認されている(第1図参照)。それらの中には中世日向史の中で主要な位置を占めた城郭もあるが、反対に存在がほとんど知られていなかった城跡もある。



- | | | | | |
|-------------|-----------|---------|---------|---------|
| 1 新名爪城跡（仮称） | 2 丹後城跡 | 3 城跡A | 4 宮崎城跡 | 5 今城跡 |
| 6 竹篠城跡 | 7 陣ノ下 | 8 蓬萊山城跡 | 9 古城跡 | 10 曾井城跡 |
| ア 新名爪八幡宮 | イ 奈古神社 | | | |
| a 前田遺跡 | b 前田二月田遺跡 | c 北ヶ迫遺跡 | d 保木下遺跡 | |

第1図 宮崎市街地近郊の城館跡等の分布

宮崎平野を取り囲むように横たわる下北方から島之内方面にかけて連なる丘陵には、未知の遺構が残されている可能性は十分に残されている。

(1) 新名爪周辺の城郭

新名爪の周辺の城郭としては、宮崎城跡、丹後城跡などがよく知られている。

宮崎城跡（第1図 4）

宮崎城跡は市街地近郊に在りながら開発の影響を受けることなく当時の遺構がよく残っている城郭の一つであり、「目引城」「龍峯城」「馬索城」などの別称がある。

2004年度から2007年度にかけて宮崎市教育委員会により約10万平方メートルを対象とした測量が実施され「宮崎城跡 測量調査報告書」として既に刊行されている。宮崎城は、伊東48塁の一つに数えられ、都於郡城、佐土原城と並び伊東氏の領国経営で主要な位置を占め、特に宮崎平野部の領有権争いの拠点として大きな役割を果たした。伊東氏が島津氏に敗れ日向から敗走の後、島津氏の家老であった上井覚兼が在城し、先述の「上井覚兼日記」を世に残した。宮崎市街をほぼ一望できる丘陵に城取りされており、遠く青島方面までをその視野に入れる。青島の南側に突出する仏舍利塔がある丘陵には、上井覚兼の父である上井薫兼が在城した紫波洲崎城跡があり、宮崎城跡からその位置を視認できる。同城の築城時期は定かでないが、建武2(1335)年に既に「池内城」としてその名が見えることから、南北朝期の早い段階には城郭構えが整っていたと考えられる。

城は丘陵尾根筋に複数の曲輪を展開させ、その間に巧みに空堀を配し防御性を高めるとともに、蛸足状に丘陵裾野に張り出す大小の尾根筋にも連続する大小の曲輪を設け、谷筋からの侵入に備えている。城郭としての規模も大きく、城内へ至る複数の登城路があった。その一つである満願寺口近くの同寺墓地には、伊東義祐の子、伊東義益のために建立された秀美な供養塔（「桂圓法光尊灵位」の銘あり）が残されているほか、近くの病院駐車場にも戦国末期の悲劇を伝える伝権藤八右衛門の墓が大切に祀られている。

丹後城跡（第1図 2）

国指定史跡蓮ヶ池横穴墓群がある丘陵の一部に城取りされている。この丘陵は宮崎城の対面から東に延びているものであり、その東端部付近に位置する。土持氏家臣であった三須丹後守の居城と伝承が残る城で、平部嶠南が著した日向地誌には次のように記載されている。

丹後城趾 丹後山ノ東南面ニアリ往昔三須丹後守ト云者ノ居城ナリト云ヒ傳フ 延陵世鑑
ヲ考フルニ永徳ノ頃宮崎土持氏ノ家臣ニ三須石見守時信ト云者アリ 蓋シ其同族ナラン 今
未其城後ヲ登覽スルニ遑アラス 詳ニ其景況ヲ言フ能ス 他日將ニ實地ヲ一閱シテ追加スル
所ナラントス

この記述内容からは現地を踏査しても城跡の明瞭な痕跡を把握できなかったことになるが、空堀や曲輪など城跡は比較的明瞭に残っていることが現在では確認され、吉本正典氏により縄張り図が作成されている。城域はやや不明瞭であり、主郭と目される曲輪から南北に分かれ、その後屈曲しながら概ね西方向に延びていくが、尾根筋の加工は先に進むにつれてその処理が曖昧になる。しかし、この様相は丹後城が東方向を強く意識した城であることを示していることにほかならない。東端の丘陵端部からその

先に見据えるものは海であり、眼下を往来する人とモノの動きである。丹後城の占地はこの2点を抑えることを主目的に行われたと考えられ、宮崎城が網羅することができなかった東から北東方向の死角を補うという戦略上の大きな意味を付加されていたと考えられる。

城跡A（第1図 3）

国道219号を挟んで宮崎市立住吉小学校と対峙する丘陵に位置する城跡であるが、文献等にこの城跡に比定される城の名は現れない。この丘陵の南側に点在する集落の一つに「麓」の名があり、付近に周知の城跡や館が存在しないことから、「麓」という地名はこの城跡に由来するものではないかと考えられる。城跡は、昨今丘陵端部周辺が伐開され、遠くからもそれが自然地形ではないことが分かるようになり、丘陵上の平坦面とそれらを断ち切るように配された少なくとも2本の空堀を視認できる。城跡の南側には、権現中池と槇柱池のほかに5つの溜池があるが、迫地形からの湧水を利用したものと考えられ、当時は小河川や湿地が広がり、それらを城の南側の防備として取り込んでいたと考えられる。

(2) 仮称 新名爪城跡

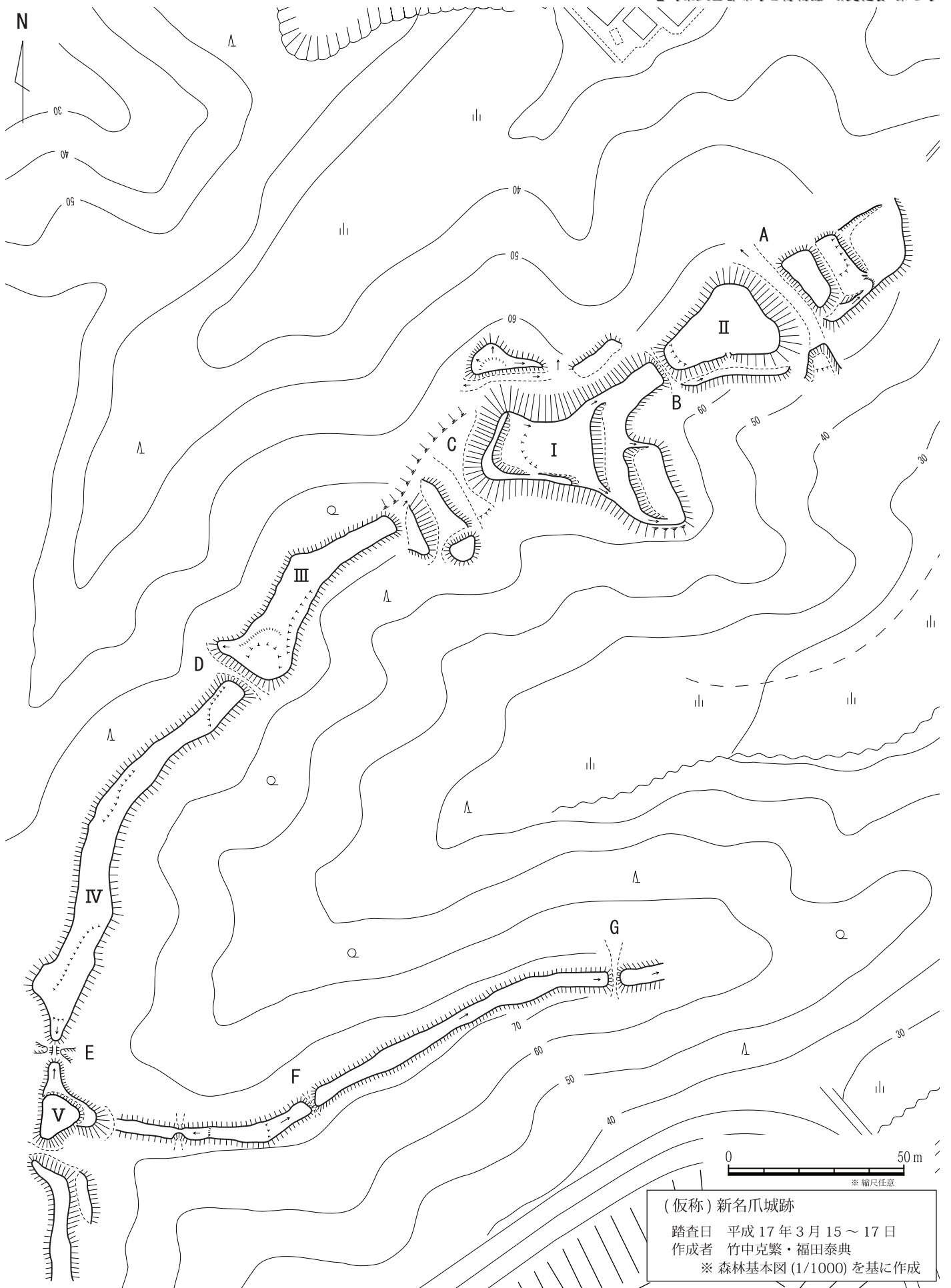
今回報告する城跡は、新名爪八幡宮の北隣の丘陵に城取りされている。国道10号分岐点からほど近くに位置し、周辺には中世の石塔なども数多く残っている。

城郭遺構が残存している事実は、平成17年に宮崎市教育委員会の竹中克繁氏の踏査で明らかになった。遺構が確認された西蔭平一帯の丘陵は、蛸足状に比較的狭隘な尾根筋が展開しているが、このような様相を呈する丘陵から派生した尾根筋の中で、城跡が確認された尾根筋は一定の面積を確保することができる。反対に新名爪八幡宮後背の尾根筋を見るとかなり狭隘であり、城地の選定に際してこの尾根筋が選ばれた理由の一つに地形的な制約があったことが考えられる。現状では樹木が繁茂し必ずしも視界良好とは言えないが、その状況を差し引いて考えれば最高標点付近からは北東方向の下那珂方面から丹後城跡がある丘陵北裾野付近まで比較的広い視界を確保できる。

第2図に城跡の縄張り図を示した。

城域としては主郭と考えられる曲輪Ⅰを中心に北東から南西方向に延びる尾根に対する加工が見られる範囲と堀切G（この先に八幡宮が鎮座）から曲輪Ⅴに至る尾根筋の範囲と考えられる。曲輪Ⅳから見て北西方向にも尾根が続き、腰曲輪状の平場や尾根に対して直交する土塁状の高まりも見られるが積極的には評価できない。

曲輪Ⅰはその西側から南側にかけて土塁を巡らし、尾根方向に沿うその両端部を堀切B・Cで裁ち切り堅固な守りを見せる。土塁の内側には弱い段が認められ、さらに東に下るとその先に二段に分かれて曲輪が設けられている。曲輪Ⅱは曲輪Ⅰと堀切Bにより分断される。比較的平坦な曲輪であるが、その南側の一部に平入りの虎口と考えられる部分があり、その下には約30mにわたり帯曲輪が取り付く。曲輪Ⅰ・Ⅱの配置は、堀切Bの南側端部方向への侵入に対し両側面から対応できる構造となっている。曲輪Ⅱのさらに東には、地表面観察でやや幅広の堀底をもつ堀切Aが設けられ、曲輪Ⅱの北東側の切岸はかなりの比高差があり東方向から尾根筋に沿っての侵入を容易には許さない。曲輪Ⅰの西端に視点を振ると、曲輪Ⅰの南西側に続く曲輪Ⅲとの間には、堀切Cが配されている。緩く開き気味の堀切であるが、曲輪Ⅰの土塁上端から堀切Cの堀底までは切岸によるかなりの急斜面となっている。また、堀切Cの北西側は急崖となっており、曲輪Ⅰの北側に認められる2つの曲輪からの回り込みは容易ではない。曲輪



第2図 新名爪城跡縄張り図

Ⅲ・Ⅳは堀切の存在は確認できるが、細長く続く平坦面にはさほど加工の痕跡が認められない曲輪であり、曲輪Ⅴへと続いていく。曲輪Ⅴは深く入り込む谷を正面から見据える場所に位置し、曲輪Ⅳとの間には土橋状の遺構が確認できる。曲輪Ⅴから八幡宮の方へと延びる尾根筋には堀切の跡が2箇所ほど認められる。狭隘な尾根筋であり堀切としてはかなり浅くなっているが、尾根筋の移動を抑える観点から見ればこの2本の堀切での存在で十分であろう。尾根筋の加工は、東方向に進むにつれて曖昧になり城郭遺構としての認識は難しくなる。

新名爪城跡の堅固な守りは堀切Cを顕著な境とする。曲輪Ⅰに設けられた土塁等の遺構配置には、西方向からの侵入を拒む強い意識をそこに見ることができる。

おわりに

新名爪八幡宮に隣接する尾根に築かれた城。そこに城取りを考える存在としては土持氏一族をおいて他は考えられないであろう。しかし、新名爪別符との不可分な関係を安定して保っていたはずの土持氏がそこに城構えを必要とした理由は何であろうか。この問題は、新名爪城跡の成立時期を考える上でも大きな問題である。

その画期の一つに、15世紀半ばの縣・財部の土持氏と伊東祐堯との確執がある。日向に下向した伊東氏と土持氏の関係は、伊東氏の勢力増長とともに不安定要因を増していき、両氏の対立の構図が鮮明になっていく。日向国一円支配の夢を抱いた祐堯は、最終的には縣土持氏を残して版図拡大を形にしている。一方、この戦いに敗れた財部土持氏は、新名爪60町を馬飼料として扶持される結果となり、別符成立以来の縁ある土地に於いて威勢を振るう時代は終焉を迎えたのである。

現存する新名爪城跡に残る急崖を生み出す切岸や堅固な土塁を設けての防備は、混沌とした時代の渦に巻き込まれながらも、先祖から継承してきた土地を死守しようとする意識を如実に映し出している。今我々の前に黙して対峙する城跡の姿が整ったのは、この画期としての15世紀の中頃をさほど遠く遡らない時期ではないだろうか。

城跡にはその土地の記憶が如実に刻まれている。未確認の城跡を確認するための地道な踏査の作業は、その土地の記憶を少なからず今に呼び戻す。本稿が、失われつつある県内各地に残る中小の城郭遺構の洗い出しと認知、保全に向けた活動啓発の一助となることを願う。

【参考文献】

- (1) 上井覚兼日記〔上・中・下〕 大日本古記録 東京大学史料編纂所編纂 岩波書店 1954
- (2) 日向地誌（復刻版） 青潮社 1976
- (3) 宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅰ・Ⅱ 宮崎県教育委員会 1999
- (4) 前田遺跡 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第9集 宮崎県埋蔵文化財センター 1998
- (5) 前田二月田遺跡 宮崎市文化財調査報告書 第43集 宮崎市教育委員会 2000
- (6) 北ヶ迫遺跡 宮崎市文化財調査報告書 第44集 宮崎市教育委員会 2000
- (7) 保木下遺跡 宮崎県教育委員会 1986

「日向国神代絵図」にみえる湧水について

安 藤 正 純

1 はじめに

本稿では、西都市歴史民俗資料館に所蔵されている「日向国神代絵図」¹⁾について一つの考察をこころみる。この絵図は、児湯郡三宅村（現西都市大字三宅）の庄屋をつとめた児玉実満（1765～1836）が西都を中心とした地域の史跡とその伝承を調査・記録したものであり、長崎で版木作成を依頼し、1823（文政6）年に刊行したものとされる²⁾。

絵図自体は『宮崎県史 別編 神話・伝承資料』に写真掲載されているが、実満が記した史跡の解説文の内容の信憑性が疑われることから、その文章解読はなされていない³⁾。

しかし、実満が実地踏査に重きをおいていたとすれば⁴⁾、地理学的・地形学的側面から資料的価値を得ることが可能である。今回は絵図に描かれた湧水をもとに、その呼称と地形からそれを試行してみる。なお本稿では古文書を引用している際には、なるべく旧字体を新字体にあらためている。

（※本稿掲載の略図、絵図、地図上の○印は、分り易いように筆者が付けたものである。）



（図1）「日向国神代絵図」
〔西都市教育委員会所蔵〕



（図2）左図中央部の拡大

2 「日向国神代絵図」の特徴

本題に入る前に、「日向国神代絵図」の絵図としての特徴をあげておく。まず、最初に印象付けられるのは、神社の鳥居の数の多さであろう。恐らく、実満は、自身で踏査した範囲にあった神社や祠に関しては、由来が神代にあると考えられるものをほぼ全て絵図上に記録しているものと考えられる。多くの神社や祠は鳥居だけが記されているが、それに比較すると地元の三宅神社は精緻な描き方がなされて

いる。ただし、19世紀前半の三宅神社を正確に模写しようと努めたものなのか、または「神代」の様子を想像復元したものかは不明である。

また、絵図上には人が住む集落がないことから、神代の後につくられたと考えられるものは極力、絵図上から抹消されていると考えるべきであろう。それでも、神社の境内にある「寺」が記載されていることには矛盾を感じる。なお、鳥居と同様に多くみられる池は、神社の境内にある場合や神話的伝承をもつ場合に限り記載されているのであらうと考える。つまり農業用の溜池は除外されているのである。じつは西都市三宅には、農業用溜池として中世につくられたとみられる稚児ヶ池があり、児玉実満が生きていた19世紀前半には、すでにそれが存在していた可能性が高い。

確実な資料は無いが、稚児ヶ池の築堤工事の完成は15世紀前半頃のこととされており⁵⁾、実満にとっては、19世紀前半から数百年程度さかのぼる時代は「人の世」であり神代のことではないから、人工的な堤防をもつ稚児ヶ池は記載していないのだと考えるべきであろう。そのことからみると、実満は神話伝承と（人代の）伝説の区別はつけようとしていたものと思われる。

しかしそれでも、「日向国神代絵図」は、台地上と平地上の区別がつきにくいなど、地形描写が不完全であることから地図として見るならば非常に分かりにくいものと言わざるを得ない。

なお、西都原台地上にある古墳に関しては、神話伝承の残る男狭穂塚、女狭穂塚、事勝塚等について記載がされている。ただし、206号（鬼の窟）古墳に関しては、現代に伝わる鬼に関する神話伝承とは違い、「開耶姫命」の産所（「無戸室」）として記載している。

3 「乳の水」と「濱の河」

この絵図について筆者が注目をするようになったのは、西都原台地（実満は「齋殿原」と記載）の縁辺部と思われる部分で2か所の湧水を記していることからである。現代、発行されている地図や地形図においては、それを見ることはできないので尚更である。

1か所は206号墳（鬼の窟）のすぐ東側で、台地のくびれ部とも思われ、現代の地図においても傾斜の緩い谷状地形を呈している。「神代絵図」では「乳の水」として記され、

開耶姫命此ノ水以天甜酒を造らせ給ふ此レ酒の濫觴なり今乳の水と唱へ女の乳汁足らざるハ此ノ神に告し此ノ水を飲ムときは忽にして乳汁湧ルの霊水なり田(由)緒のこと爰に略ス
との解説が加えられている。お産の後、乳の出の悪い女性が飲むと良いという伝承があったらしい。

もう1か所は「濱の河」であり、「神代絵図」では2本の瀧として記載されている。北側を「男瀧ト云」、南側が「女瀧ト云」と記載している。必ずしも確信に満ちた記述ではなく、実満はあくまでも伝承として記述する姿勢をみせており、

一名身濯河と云神達爰に身濯給ふ所と云り因て今此ノ地に於は死カル汚産ム汚レの事を始め汚穢不淨にあへる時ハ男女爰に身濯して此ノ飛瀧の宮を拝し奉り亦此ノ水以て家を清ム而るときハ不淨の御たゝりある事なし
とあり、禊ぎ（身濯・ミソソギ）の場となっていたことを記している。

19世紀前半に当地にあった伝承を、神代に起源をもつものとして記す姿勢には疑問がもたれるが、その当時の民俗事例を示したものとすれば貴重な資料とはなり得るであらう。

4 湧水に関する昭和初期の略図、絵図、地図

実は、西都原台地縁辺部の湧水（滝）に関しては、本館所蔵資料では、昭和初期の略図2点、絵図1点、地図1点で、その記録がある。また、民間所蔵の絵図1点があるのでそれを紹介する。



図3 古蹟西都原案内図（表面）

(1) 古蹟西都原案内図の裏面略図（「西都原略図」）

「古蹟西都原案内図」は、財団法人穂北古蹟保存会⁶⁾が1928（昭和3）年10月に発行したものである。表面は国鉄妻線の妻駅を利用する観光客に対する案内文章であり、都萬神社、石貫神社などの合計14か所の見所がある中で、

陰陽瀧 神代の昔天孫瓊々杵尊の皇妃木花開耶姫命の定田なる狭名田の稲にて天の甜酒を醸し淳浪田の稲もて飯となして大嘗祭大儀供膳に用ひ玉ひし靈泉の遺蹟にして此附近を酒元と稱す

との紹介文がみえる。裏面が西都原近辺の「西都原略図」（図6）であり、地形描写が正確ではないので正確な位置は分かりかねるが、陰陽瀧（裏面では瀧の文字が使われている）は台地上の東南隅に位置している。

(2) 西都原考古博物館所蔵絵図

つぎに紹介するのは、やはり昭和初期とされる西都原考古博物館所蔵の絵図（図7）である⁷⁾。立体的な地形描写がされているが、その正確さにはかなり疑問のあるものである。しかし、絵図の下方には線路（昭和59年廃止の妻線）があり汽車がはしっており、昭和初期、妻駅を中心に発展をみせる妻町の姿をも垣間見ることができる。

また絵図上の台地の縁の部分に2か所の湧水が確認される。1か所は206号墳（絵図上では「鬼窟墳」と記載されている）と思われる古墳の脇の部分からであり、もう1か所は少し離れて、その左側に「陰陽瀧」として記されている部分である。「日向国神代絵図」の「乳の水」と「濱の河」に対応している可能性が高い。ただし、湧出水量は神代絵図では両者同じように描かれているが、この昭和初期の絵図では左側の「陰陽瀧」の方が多いようにみえ瀧壺が存在している。

それに対して、右側の湧水には瀧壺はなく、湧出水を貯水しているのは、人工堤防をもつ稚児ヶ池と思われ、池の面積もかなり広大にみえる。

(3) 西都原古墳群図

3点目は、「昭和11年測量同12年製図」の当館所蔵地図（昭和46年複製）である（図8・9）⁸⁾。等高線が精密であり、正確な測量を実施したものであることが窺えるので、今後、西都原台地の研究をすすめていく場合には貴重な資料となり得るものである。

「陰陽瀧」は台地上の東南縁辺部に位置し、その名称だけが印字されている。そのすぐ左側には西都原13号墳と35号墳があり、両古墳の間地点の右側は急傾斜の谷状地形を呈しているの、瀧はそこから湧出し



図4 陰陽瀧の現状（西都市大字三宅）

ていることになるかと推測される。

この地図をもとに、筆者自身が現地踏査を実施した結果、現代においても湧水が確認できた⁹⁾。西都市大字三宅酒元地区に存在する「滝」は、調査の時期が冬期で晴れていたこともあり、水量もかなり乏しい状態であった。梅雨期や大雨の際には水量はかなり違う可能性もあるので一概には言えないが、現状では滝と定義することはできないものであると言えよう。また、筆者がこの湧水近辺の数件の民家で聞き取り調査を実施したところ、「陰陽滝」ではなく、これを「ハマンコ」と呼んでいることが判明した。

(4) 日向国児湯郡西都原図

1930（昭和5）年7月15日発行の「語人は語る」（非売品）¹⁰⁾ という当時の史跡紹介書の中に折り込まれている絵図である（図10）。「日向国児湯郡西都原図」というタイトルが下部に付けられている。遠方から西都原台地を写生したような感覚をもたされる絵である。絵図の中央に西都原台地上にのぼっていく道路がみられ、ちょうどのぼり口にあたる部分の左側に滝がえがかれている。滝の名前は記されていない。

(5) 西都原略図

次項でふれる『西都原案内』（1928年発行）の中に折り込まれている略図である。内容的には(1)の「古蹟西都原案内図」の裏面略図に非常に似通っているので、年代的にみて、ほぼ同時期に作成されたものであることが分かる。「陰陽滝」も(1)の資料とほぼ同じ位置に記載されているので、ここで敢えて掲載はしない。

5 『妻町勢誌』にみえる湧水

前項で紹介した5点の略図、絵図、地図において、西都原台地の東南に位置する陰陽滝（または瀧）について紹介したが、この滝と「日向国神代絵図」にみえる「乳の水」、「濱の河」との関わりについては、1926（大正15）年8月1日発行の『妻町勢誌』¹¹⁾ に記述がみえる。

当時の児湯郡妻町（当時）近辺の史跡紹介書であるが、陰陽瀧については3頁にわたり詳細に記している。抜粋すると、

八、陰陽の瀧（いんやうのたき）

前記古蹟所在地である石貫から引き返して西都が原廻りの本道に出でゝすすむこと約二町にして、左手の林中に入ればこの瀧がある。断涯から落ちて来る二條の清水、泉水となつて混々としてつきない。夏季涼味豊にして眺望亦好く来り遊ぶものが少くない。里人濱の川（ハマンコ）と稱して居る。神代の昔天孫瓊々杵尊、皇妃木花開耶姫命の定田である狭名田の稲で天の甘酒を醸し淳浪田の稲もて飲を炊き大嘗祭の大儀供膳に用ひ給ひし靈泉の遺蹟であると稱する。現今此の附近を酒元（サカモト）と呼ぶ。…（中略）…

陰陽の瀧は又名養老の瀧とも云ふ。此處に小祠を祀る、婦女の乳汁の足らざるものはこゝに祈りて此の水を嘗める時は即座にして乳汁わき出づる靈水であると傳へらる。

とあり、これを要約すれば、陰陽の瀧は2本の湧水からなり、里人が「濱の川（ハマンコ）」と呼んでおり、別名養老の瀧とも言われていて、乳の出の悪い産婦が飲むとよいという伝承があったことになる。



図5 『妻町勢誌』の表紙

『妻町勢誌』の陰陽の瀧にかんする説明は、開耶姫命の神話伝承が伝わっていること、産婦の乳の出が良くなるという霊驗的な面からみると、「日向国神代絵図」の「乳の水」の記述を引き継いでいることになる。しかし、それが2本の湧水であること、集落内の人々（里人）が「濱の川（ハマンコ）」と呼んでいることからすれば、地理的な位置は「濱の河」のことを言っていることになり矛盾が生じることになる。

なお、『妻町勢誌』発行から2年後の1928（昭和3）年には、財団法人穂北古蹟保存会が『西都原案内』（非売品）を刊行しており¹²⁾、『妻町勢誌』の文章を要約・抜粋して「陰陽の滝」を紹介しているがここでは掲載しない。

6 まとめ

19世紀前半、児玉実満が、「日向国神代絵図」を記した時代背景としては、本居宣長以降の『古事記』研究を中心とする国学の隆盛が一端にあると考えられ¹³⁾、史跡に関する記述内容に関しても実満の個人的な思い込みとみられる表現があることから、歴史学的な資料価値としてはそれほど高い評価を与えることは不可能である。しかし地理的・地形学的観点からみれば、「乳の水」「濱の河」以外にも研究対象となる素材はまだ探しだせるであろう。今後、このような視点から「日向国神代絵図」の研究は進められるべきであるとする。

また、今回の原稿作成にあたって、昭和初期の西都原近辺の略図、絵図、地図の資料収集ができたことは収穫であった。江戸時代の「日向国神代絵図」、また“現代”のものを別とすれば、西都原やその近辺を含めた略図や絵図に関しては、昭和初期以外のものを筆者はまだ見ていないので、この時期に制作が偏っているものと考えられる。

1914（大正3）年、宮崎県営鉄道が宮崎・妻間で営業を開始し、その後、妻軽便鉄道となり1922（大正11）年には杉安まで鉄道を延伸している¹⁴⁾。鉄道整備にともない、この時期、児湯郡妻町民の間で、駅利用者に対する観光振興の気運が盛り上がっていた可能性もある。推測ではあるが、「日向国神代絵図」にみえる「濱の河」を文学的修辞表現で「陰陽の滝（瀧）」と言い替えたのは、恐らくは、この頃、地元の史跡研究に携わっていた方々ではなかったのだろうか。しかし、実際にはその呼び方は浸透せずに、現状でも「ハマンコ」という呼び方がされている訳である。

なお、「日向国神代絵図」の掲載に関しては、西都市教育委員会社会教育課の許可を得ている。また、資料収集過程において、西都市内に住まれる元宮崎県史調査協力員の法元加夫氏と西都原考古博物館ボランティアスタッフの橋口徹郎氏に協力をいただいた。さらに、現状の「濱の河（川）」の写真掲載に関して西都市在住の吉野英機氏に許可を得ている。この場を借りて感謝の意を申しあげたい。

【註】

- 1) 本稿では、『西都の歴史』(1976)にならい「日向国神代絵図」と表記する。なお、『宮崎県史 別編 神話・伝承資料』(1994)では「日向神代絵図」と紹介されており、「国」がない。
- 2) 『西都の歴史』(1976)、『宮崎県史』(1994)より。
- 3) 『宮崎県史 別編 神話・伝承資料』(1994)では、絵図を12分割して、撮影した写真のまま掲載している。
- 4) 『西都の歴史』(1976)より。
- 5) 『宮崎県土地改良史』(1978)においても、築堤工事に際する人柱伝説の信憑性は否定しながらも、築堤そのものは中世のこととして「周辺水田の灌漑に大きく裨益した」と記している。
- 6) 財団法人穂北古蹟保存会については、『妻町勢誌』(1926)に「大正十一年五月二十日財団法人組織の下に穂北古蹟保存会が設立せられ、専ら穂北の御陵墓及古墳古蹟の祭典、古墳古蹟に関連せる遺物、古文書の蒐集発見及此等のものゝ調査研究維持保存並に顕彰等に盡力している。」と記されており、1922年の設立であることが分かる。
- 7) 当館所蔵品は、フィルムカメラの時代に、絵図を写真撮影してプリントしたもので、撮影時の裏書き等が無いため、その年代を確定させることは困難である。またフィルムそのものも残っていない。ただし、そこに描かれた道路や街並みの状況から、昭和初期の妻町の状況を知る元宮崎県史調査協力員の法元加夫氏はその頃のものとして推定されている。なお、絵図中では、現在の県立妻高等学校が「中学校」となっており、絵図中央部分には「女学校」も見えることから、戦後の学制改革以後の状況を示すものではないことは確実である。
- 8) 正確には、西都原考古博物館設立前の、西都原資料館によって複製されたものである。なお地図の下部に縮尺は5,000分の1と記載されている。
- 9) 2011(平成23)年12月7日・24日、2012(平成24)年1月21日の3回にわたって実地踏査と聞き取り調査を実施している。
- 10) 法元加夫氏所蔵図書。
- 11) 同上。『妻町勢誌』の裏書には、「定価金一円」とあり、非売品ではなかったことが分かる。
- 12) 西都原考古博物館所蔵図書。
- 13) 『国史大辞典』によると『古事記』は、江戸時代の国学者が研究対象にするまでは、文化人たちから注目をされる書物ではなかった。
- 14) 宮崎・妻間の営業開始に関しては『宮崎県史 通史編 近・現代1』(2000)より。鉄道の杉安までの延伸に関しては『西都の歴史』(1976)を典拠としている。

【参考文献】

- 松崎貞利『妻町勢誌』日向商工時報社 1926年
穂北古蹟保存会編『西都原案内』日向商工時報社(非売品) 1928年
久保季夫『語人は語る』新店書籍部(非売品) 1930年
『西都の歴史』西都市 1976年
『宮崎県土地改良史』宮崎県農政水産部耕地課 1978年
『国史大辞典』第5巻(「古事記」の項目) 吉川弘文館 1985年
『宮崎県史 別編 神話・伝承資料』宮崎県 1994年
『宮崎県史 通史編 近・現代1』宮崎県 2000年



図6 西都原略図（古蹟西都原案内図の裏面略図）

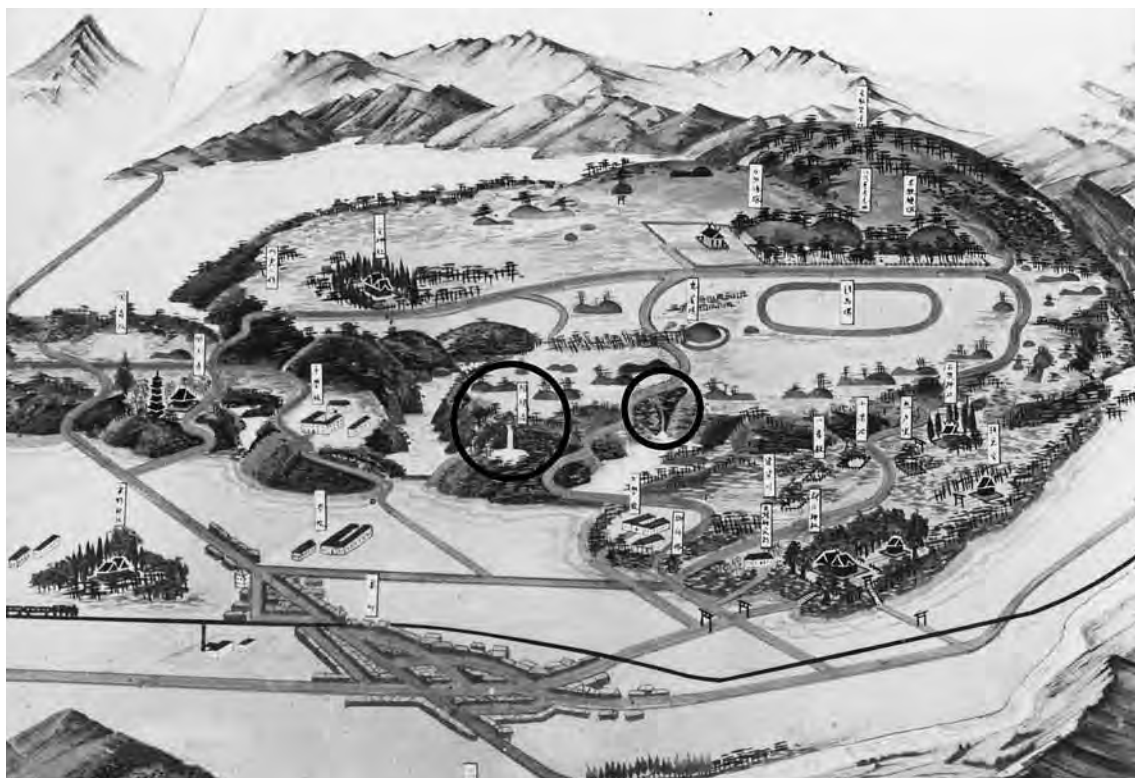


図7 西都原考古博物館所蔵絵図



図8 西都原古墳群図（写真撮影）

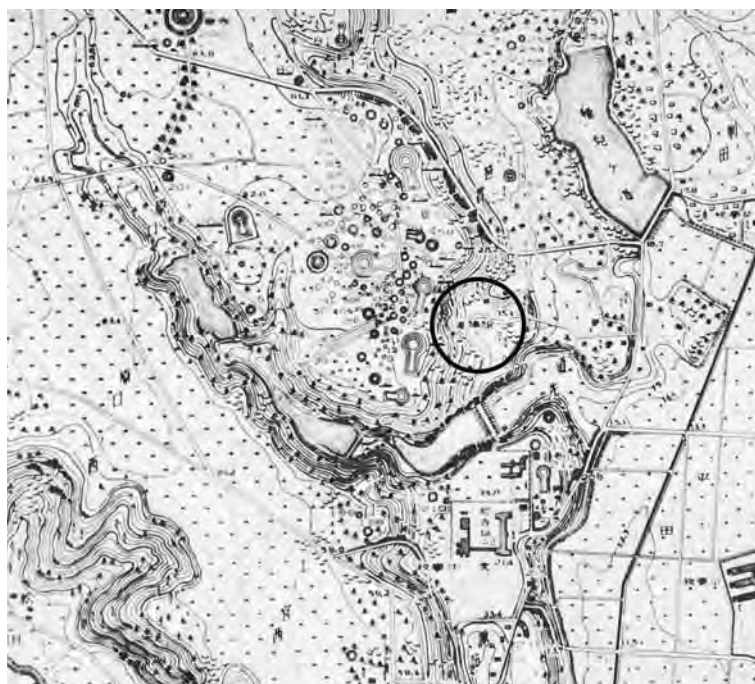


図9 西都原古墳群図（スキャナーで部分読み込み、縮尺任意）



図10 日向国児湯郡西都原図

有馬七蔵・本山彦一・藤森栄一と幻の有馬コレクション

藤 木 聡

1 はじめに

有馬七蔵は、大正～昭和時代初期における考古資料の収集家であり、その人物や収集品（以下、有馬七蔵の収集品について有馬コレクションと呼ぶ）について、宮崎県域の考古学黎明期を牽引した石川恒太郎によって紹介がある¹⁾（石川1949・1986ほか）。有馬コレクションは、学術上の価値の高い内容であったが、文字による目録といくつかのモノクロ写真を残し延岡空襲で焼失してしまった。そのためなのか、有馬七蔵について考古学研究の中で触れられる機会は少なく（小野1989）、有馬七蔵はまさに“忘れられた先駆者”（吉留1999）なのである。

本稿は、有馬七蔵ならびに有馬コレクションの特質に迫るために、今の時点で把握しうる関係資料を整理したものである。

2 学界が注目していた有馬七蔵と有馬コレクション

有馬コレクションは、数千点に及ぶ膨大な量があり（第1表に挙げただけでも3709点ある）、いずれも自ら採集し、かつ出土地も明確なものであった（石川1949ほか）。宮崎県域の考古学史の中で最も古くに収集された考古資料の1つとも言える。そのような有馬コレクションに触れた公的記録の1つとして『宮崎県史蹟調査 第七輯 東臼杵郡之部』（宮崎県1929）があり、有馬コレクションの写真7枚が「石器土器」の項に掲載され、「古墳並に其遺物」にも1911（明治44）年に開口した横穴墓より出土した耳環・ガラス製小玉・鉄製斧および鑿の所蔵者として有馬の名が挙げられている。

有馬コレクションについて、当時の日本の考古学界の中心で活躍していた研究者等も注目していた。いくつか残された記録を辿ると、まず、1917（大正6）年12月28日から同31日、翌1918（大正7）年1月5日に喜田貞吉・濱田耕作・梅原末治を有馬が案内し、今井野や大貫貝塚での踏査や発掘調査の加勢をしている。濱田等のいる吉野屋に有馬も投宿し語り合った日もあったという²⁾（若山1926）。1925（大正14）年10月18日午前には、鳥居龍蔵が土器や刀剣類について視察した³⁾（東臼杵郡史蹟調査会1926）。1936（昭和11）年には、弥生土器等の調査のために東京考古学会員として藤森栄一が有馬のもとを訪ねている（藤森1936）。三浦敏に案内され延岡他を調査した坪井正五郎もまた、有馬と接触した可能性がある⁴⁾。

各研究者の注目点はさまざまであったと思われるが、たとえば濱田・梅原が長時間スケッチしたという石鍬（若山1926）や、喜田が天下一品の折り紙を付けた2点の黒色の石材製の磨製石鍬等が挙げられる（写真3）。鋸歯縁の磨製石鍬は珍しいものとしていち早く資料紹介され（小松1924）、喜田も日本列島各地の石鍬資料を検討する中で有馬コレクションに触れている（喜田1933）。また、藤森は旧石器の可能性ある資料や半月形刃器等に言及している（藤森1936には半月形刃器は出てこない）。

石鍬や磨製石鍬ならびに藤森栄一が注目した資料について、戦災により実物がすでに失われていることは先述のとおりである。そのような中、有馬七蔵寄贈の資料を含む関西大学所蔵本山彦一蒐集考古資料は、失われた有馬コレクションの一端を実物で物語る貴重な資料群として重要である。また、やはり



写真1 有馬七蔵とコレクション（石川1985）
六畳間に所狭しと並ぶ膨大な参古資料



写真2 有馬七蔵とコレクション
（大阪毎日新聞1940）

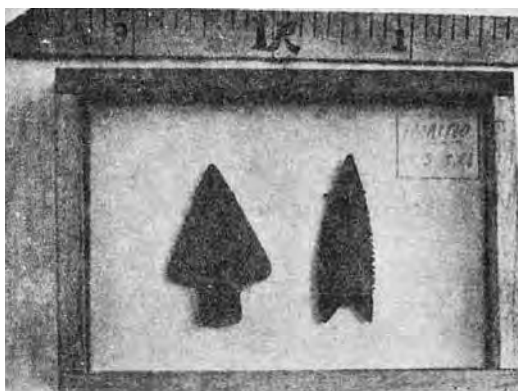


写真3 喜田が天下一品とした磨製石鏃



写真4 半月形刃器（写真所蔵：諏訪市博物館）



写真5 磨製石鏃等（写真所蔵：諏訪市博物館）



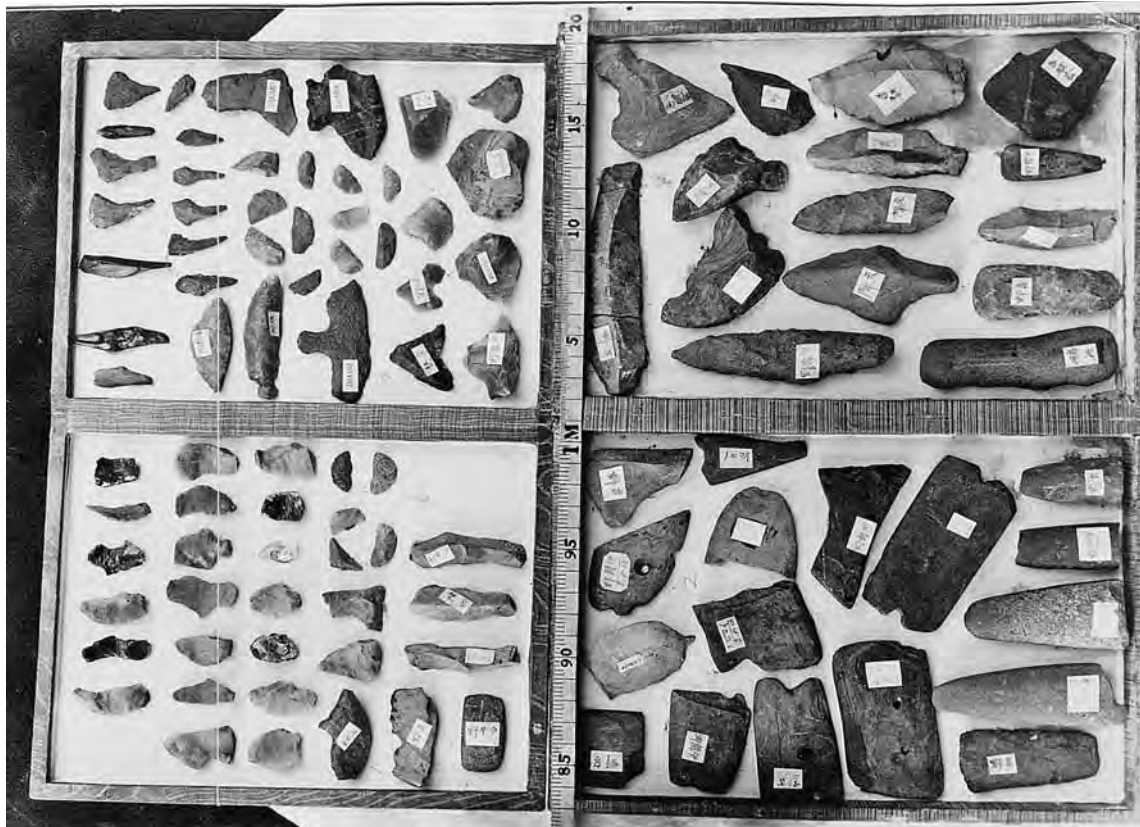
写真6 縄文式土器（写真所蔵：諏訪市博物館）



写真7 石錐等（写真所蔵：諏訪市博物館）



写真8 剥片等（写真所蔵：諏訪市博物館）
※写真3～8は全て写真のみで、実物は戦災で失われている。



※実物は戦災で失われており、写真のみが残っている。

写真9 半月形刃器・剥片尖頭器・石庖丁・石斧等の写真（写真所蔵：宮崎県立西都原考古博物館）

石器		石庖丁	12	紋様付破片	15	玉類		古鈴	1
打製石斧	56	石鎌	1	埴輪円筒破片	2	古墳代曲玉	14	兜破片	1
磨製石斧	51	礎	3	瓶	2	石器代曲玉	8		
打製石鏃	886	擦切製玉斧	1			管玉	9		
磨製石鏃	82	鉄器代石庖丁	1			石粒玉	52	鉄器	
半磨製石鏃	1	石皿破片	1	祝部土器		丸玉	2	鉄鏃	15
片刃石斧	14	皮切具	148	提瓶	2	吹製粒玉	623	直刀	1
石鏃	1	石鎗	5	横瓶	1	石帯	1	鉄	3
石鏃	90	丸石	5	蓋杯	3	白玉	2	鏃	3
天狗飯匕	3	石鏃	5	高杯	1	櫛形曲玉	1	小刀子	4
石匙	2	石剣	5	粉殻付土器片	1	猿形曲玉	1	石切鏃	2
奇形石器	5	敲石	6	紋様付片	16	葉形曲玉	1		
石鏃	1			高杯破片	2	瑛	1		
鱗引石	12			総破片	257	玉材惜残ノ玉	1	雑	
石槌	12	弥生土器		埴	2			貝塚出土貝殻	35
台石	3	高杯片	41			金環、鏡、鈴		貝塚出土魚骨	1
石笛	1	壺	13	縄文土器		金環	24	貝塚出土歯	6
紡錘車	2	碗	3	壺破片	1	銀環	1	貝塚発見獣骨	3
切道具	1	瓢形土器	7	把手	9	鏡片	1	鉄滓	1
半磨製石斧	9	土器脚部	3	紋様付破片	250	鏃	1	土器着色用朱塊	2
円形石斧	1	土鈴破片	1	穴を穿つ片	7	漢鏡	1	剣鞘ヲ巻キタル銀條	1
錘石	35	土器破片鏃	1			鍔鏡	1	経塚石	3
押石	2	鉢形土器片	5			鍔片	1	青瓷破片	5
凹石	1	小杯	15			小柄	1	古墳中ノ朱	1
石錐	25	土器破片	532			和鏡	1		

※延岡史談会編「考古資料遺物目録」に基づき作成された『延岡市史』より作成

第1表 有馬コレクションの内訳

実物は失われ写真のみ残された遺物があり、その写真より引き出すことのできる今日的に重要な情報も少なくない。これらについて、次節以降で詳しく述べてゆきたい。

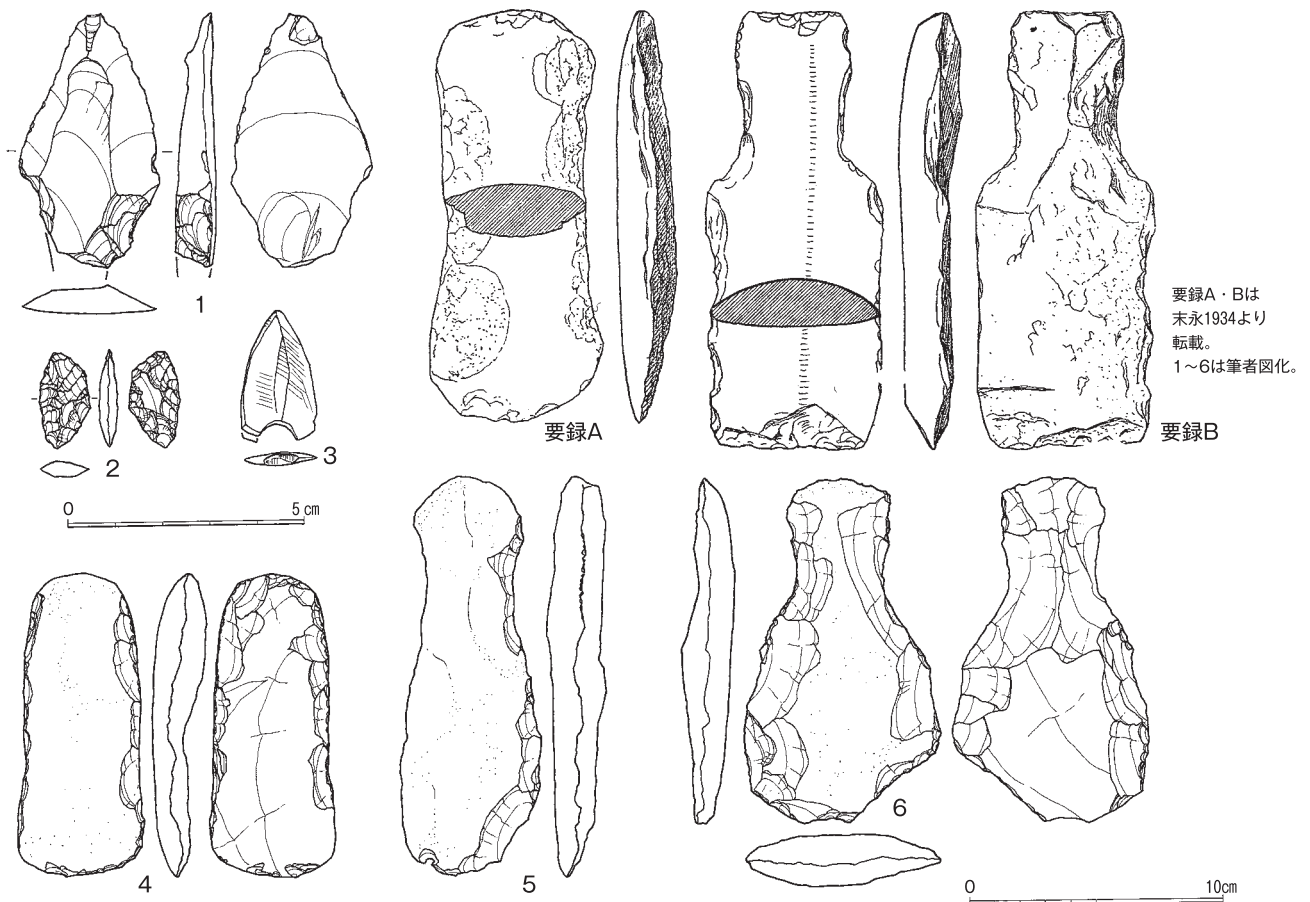
3 関西大学博物館所蔵本山彦一蒐集考古資料の中の宮崎県内資料と有馬コレクション

関西大学博物館所蔵本山彦一蒐集考古資料⁵⁾は、神田孝平による蒐集品等に加え、本山により大正時代から昭和時代初期に蒐集された、時代・地域ともに多岐にわたる考古資料である（関西大学博物館2010）。宮崎県関連の考古資料については、末永雅雄が作成した『本山考古室目録』（末永1934）に有馬七蔵寄贈のものを含めて23点の石器が挙がっており、新たな目録『関西大学博物館蔵本山彦一蒐集資料目録』（関西大学博物館2010）で石器2点が追加された。これら25点の宮崎県内資料のうち、有馬七蔵寄贈のものは、磨製石鏃1点、打製石鏃4点、異形石器1点、打製石斧2点（ここまでの8点は延岡市今井野採集）、打製石斧2点（日向市平岩採集）である。

個別資料を観察してみよう。関西大学博物館の資料コードで⁶⁾ MY-S 1071は緑色の頁岩製磨製石鏃であり、基部に明瞭な袢りがある（第1図3）⁷⁾。MY-S 1072は、チャート製打製石鏃2点、安山岩系の石材製打製石鏃2点、チャート製の異形石器1点（第1図2）、砂岩製打製石斧2点（第1図6・要録B）である。打製石鏃は、有馬コレクションの中に実に886点あり、同コレクション中で最も多く収集された器種である。異形石器は後節で詳論する。打製石斧は有肩に作り出されており、縄文時代晩期から弥生時代に相当するものであろう。濱田・梅原が長時間スケッチしたという石鏃もこのような有肩品であった可能性がある。MY-S 1074は打製石斧2点であり、ともに耳川流域で多く見られる砂岩製である（第1図4・5）。礫片を素材に、裏面のみ周縁より打ち欠いて短冊形に成形される。

有馬寄贈品以外の宮崎県内資料は次のとおりである。MY-S 1073-1は石斧とされていたが、自然礫であろう。MY-S 1073-2は磨製石斧で、砂利を含む凝灰岩系石材を用いる。両側面に緩く膨らむ面が作り出される。基部は欠損する。形態より縄文時代後期のものであろう。MY-S 1073-3は扁平打製石斧の基部であろうか。頁岩製である。MY-S 1075は打製石斧1点、打欠石錘1点である。打製石斧は砂岩礫片の周縁のみ加工して仕上げられる（第1図要録A）。打欠石錘は砂岩製である。MY-S 1076は砂岩製打欠石錘3点である。MY-S 1077は磨製石斧である。緑色珪質岩製で、おそらく使用後の再研磨等を経てかなり小さくなるまで使い込まれている。基部側には、装着にかかわる仕掛けと思われる、敲打痕を残す弱い袢りがある。石材や形状よりみて、縄文時代早期のものである。MY-S 1078は磨製石斧である。礫がそのまま活かされ、凸部を中心に敲打整形の後、刃部のみ研磨される。MY-S 1079はホルンフェルス製磨製石斧である。敲打整形の痕跡がよく残っており、基部を欠損する。縄文時代後期のものであろう。MY-S 1081はホルンフェルス製打製石斧である。緩い肩がある。MY-S 1082は緑色の凝灰岩質の石材製であり、周縁より粗く打ち欠いて全体が成形される。打製石斧等の未製品の可能性がある。MY-U 4087は白く風化した流紋岩製の剥片尖頭器である（第1図1）。石材や石器形状から宮崎県北部採集品でよからう。MY-U 4097は石斧とされていたが、砂岩礫である。

有馬寄贈分も含め、本山彦一蒐集考古資料の宮崎県内資料25点は、全て石器である。他県域出土等の本山彦一蒐集考古資料には土器や石器、金属器等もある中で、宮崎県域のそれは石器以外の考古資料を含んでいない。器種の内訳は、打製石鏃・打製石斧・磨製石斧・打欠石錘という、宮崎県北部から児湯郡あたりの縄文・弥生遺跡等で一般的に多く採集されるわかりやすい石器で主に構成されている。採集地については、具体的な地名が注記されていないものであっても、今日の発掘資料と器形や石材の特徴に照らすと、五ヶ瀬川流域等の宮崎県北部から児湯郡あたりまでで採集された資料と判断される。いず



第1図 関西大学博物館所蔵本山彦一蒐集考古資料の中の宮崎県資料 1～3: 2/3 4～6・要録A/B: 1/3

番号	器種	有馬寄贈	現行政	墨書き	朱墨	図 No	法量
MY-S 1071	磨製石鏃	有馬寄贈	延岡市今井野	東臼郡南方村字 天下伊舞野	天下伊 1071 日向国	第1図3	2.8×1.5×0.3cm
MY-S 1072	打製石鏃	有馬寄贈	延岡市今井野				
MY-S 1072	打製石鏃	有馬寄贈	延岡市今井野				
MY-S 1072	打製石鏃	有馬寄贈	延岡市今井野				
MY-S 1072	打製石鏃	有馬寄贈	延岡市今井野				
MY-S 1072	異形石器	有馬寄贈	延岡市今井野			第1図2	2.1×1.1×0.3cm
MY-S 1072	打製石斧	有馬寄贈	延岡市今井野	裏面に東臼杵 南方	裏面に東臼杵 南方	第1図6	13.6×7.8×2.0cm
MY-S 1072	打製石斧	有馬寄贈	延岡市今井野	※未実見		要録B	
MY-S 1073-1	自然礫		延岡市今井野		表に日向		
MY-S 1073-3	扁平打製石斧		延岡市今井野		表に日向		
MY-S 1073-2	磨製石斧		延岡市今井野		表に日向		
MY-S 1074	打製石斧	有馬寄贈	日向市平岩	表に日向東臼杵郡 平岩村、裏に有馬七蔵義新贈		第1図4	12.0×4.9×2.1cm
MY-S 1074	打製石斧	有馬寄贈	日向市平岩	表に有馬七蔵義新贈、裏に日向東臼杵郡平岩村		第1図5	15.8×5.7×2.4cm
MY-S 1075	打製石斧		日向市美々津	表に日向児湯郡美々津字石並		要録A	
MY-S 1075	打欠石錘		日向市美々津	日向児湯郡 ミミツ			
MY-S 1076	打欠石錘		高鍋町持田	日向児湯郡持田村			
MY-S 1076	打欠石錘		高鍋町持田				
MY-S 1076	打欠石錘		高鍋町持田	日向児湯郡持田			
MY-S 1077	磨製石斧		都農町	表に日向国児湯郡 苅生			
MY-S 1078	磨製石斧		都農町	表に日向児湯郡内野々	表に日向児湯郡 ●●●内野々		
MY-S 1079	磨製石斧		高鍋町上江	表に日向児湯郡 上江村字上江	裏に日向 上江		
MY-S 1081	打製石斧		宮崎市 佐土原町	表に大きく 佐土原、裏に日向国宮崎郡 佐土原町字巨田村發見 ●●贈			
MY-S 1082	打製石斧等の未成品		高千穂町	表に四十三年十二月十七日 高千穂田崎則壽氏所贈	表に日向		
MY-U 4087	剥片尖頭器		宮崎県内	裏に矢の根	表に日向	第1図1	5.4+α×3.0×0.9cm
MY-U 4097	礫		宮崎県内	裏に石斧	表に日向		

第2表 関西大学博物館所蔵本山彦一蒐集考古資料の宮崎県資料の一覧表 ●は判読困難

れも、大正時代以前に宮崎県内で採集されていた考古資料であり、宮崎県内で最も古い年代において、先史時代の遺物という認識のもと採集されたものとして重要である。

4 藤森栄一の見た旧石器と半月形刃器 ～有馬コレクションの注目資料について～

前節で本山彦一のもとへ渡った有馬七蔵の採集品等を紹介してきたが、この背景として有馬と関わった多くの人々の存在があり、その1人に『かもしかみち』等で有名な藤森栄一がいる。そして、藤森の「九州廻記」(1936)⁸⁾には「・・・(前略) 延岡で有馬七蔵翁を訪ねました。北日向の資料はだいたいそろっています。非常に卓見をもった方です。洪積層の泥流下から獲られた旧石器のようなものを、十数個持っておられます。いまになお採集可能だそうです。直良さんなんか御覧になったらどうでしょう。」とある。また、『かもしかみち』への再録時に付された写真(写真4・7・8の一部を切り抜いた6片を組み合わせている)の解説には「“剥片と半月形刃器” 日向南方村高野出土、有馬七蔵翁旧蔵。日本にめずらしい石器ということで、後に学界の注目をあびたが、現品は失われ、この写真だけが残った。実測図のないのが残念である。」と註書きされる。この「九州廻記」に登場する旧石器と半月形刃器は、特に今日の考古学研究の上で取り上げておくべきものである。

まず、旧石器について藤森が述べた点は、旧石器時代研究者の間で話題になることがあった(小野1989・吉留1999)。しかし、ごく短い文章記録であり、具体的な石器の特徴や採集地が不明なため、藤森栄一が有馬コレクションのどの石器をして“旧石器のようなもの”と述べたのか、その採集された洪積層の泥流がどの地層を指すのか等を未だ明らかにできていない⁹⁾。そのような現状の中、藤森の見た「旧石器のようなもの」を知る手がかりとして宮崎県1929掲載の、有馬コレクションを写した写真9を取り上げてみたい。写真9には、伊舞野・イマヒノ：磨製抉り入り方形石庖丁／磨製石斧、吉野・吉埜：磨製石斧、大貫：磨製石斧／打製石錐／打製石匙等の縄文～弥生時代にかけての石器資料を確認できるが、注目点は「天降」と採集地名の書かれた紙が貼られた、剥片尖頭器の存在である。さらに、その剥片尖頭器の右隣は「天降」の両面加工の尖頭器、次が「伊舞埜」の剥片尖頭器、「天降」の剥片尖頭器の斜め左上には「伊舞野」の角錐状石器あるいは基部から先端まで加工が多く入った剥片尖頭器がある。剥片尖頭器に伴うような大型の縦長剥片もいくつか確認できる。

日本で旧石器時代が広く認知されてゆく契機となったのは、1948年の岩宿遺跡の発見である。つまり、岩宿発見よりも少なくとも20年は遡る、写真が初めて公開された1929年以前において、旧石器という認識があったかは別として、有馬七蔵によって剥片尖頭器等が採集されていた。藤森が有馬を訪ねた1936年には剥片尖頭器等がコレクションされていたわけであり、旧石器時代に強い関心を寄せていた直良信夫も見学すると良いと藤森が思った可能性もある。いずれにせよ、宮崎における岩宿遺跡発見前史として、さらに旧石器資料への当時の認識等を垣間見せる資料として注目できる。先述の本山彦一蒐集考古資料中にあった「矢の根」と注記された剥片尖頭器も同様である(第1図1)。

次に半月形刃器についてである。藤森が有馬を訪問し半月形刃器に触れた点を振り返った有馬七蔵の長男、有馬純一郎によれば(大阪毎日新聞「上日向の古代文化を語る座談会」1940年)「(前略) 特に珍しいのは蝶形の皮切で、これは長さ一寸くらゐの石器です、この地方独特のものらしく以前考古学会から調査に来られた藤森氏もまだ見たことがないと非常に珍しがってをられました」という。

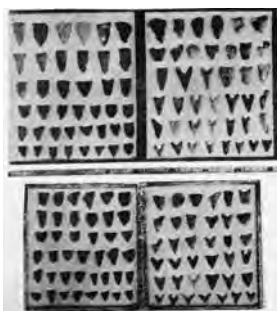


写真10 石鏃 (宮崎県1929)



写真11 縄文土器 (宮崎県1929)



写真12 縄文土器2 (宮崎県1929)



写真13 縄文土器3 (宮崎県1929)

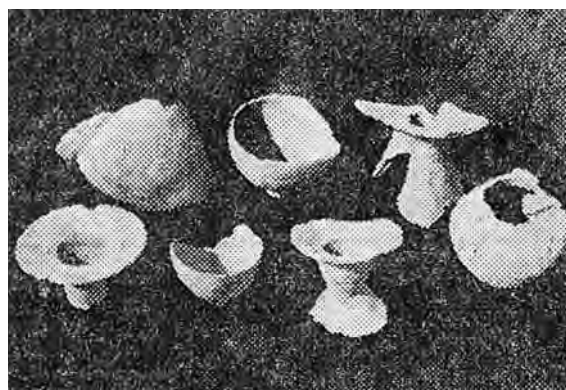


写真14 弥生土器 (石川1949)

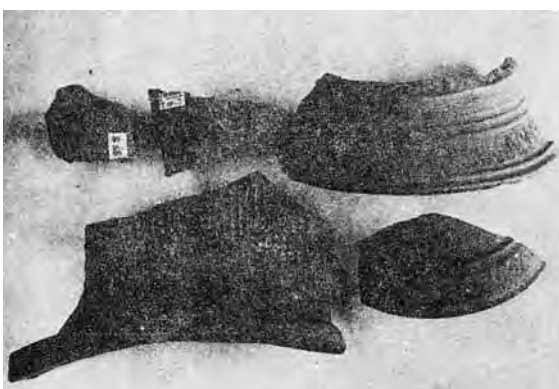


写真15 須恵器 (宮崎県1929)

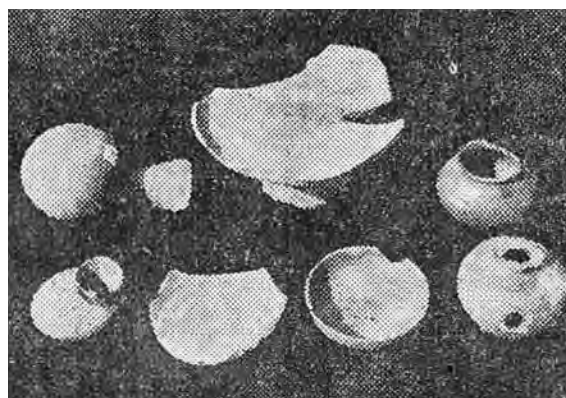


写真16 土師器・須恵器 (大阪毎日新聞1940)

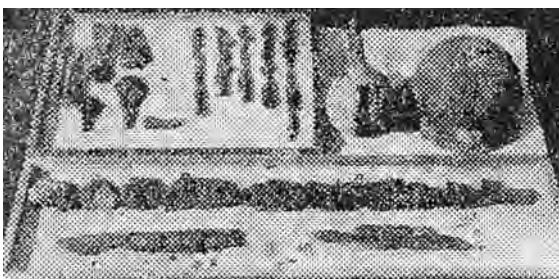


写真17 鉄製品他 (大阪毎日新聞1940)

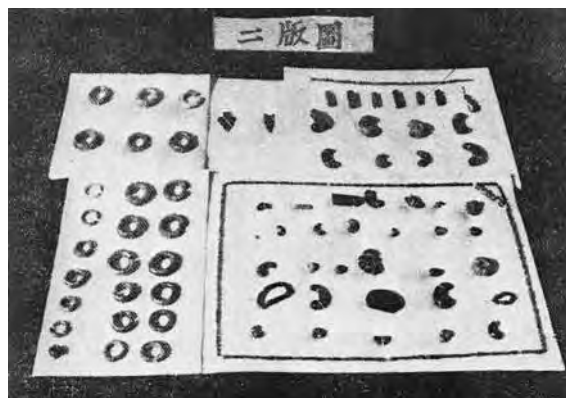


写真18 耳環／勾玉他 (石川1949)

※写真10～18は全て写真のみで、実物は戦災で失われている。

藤森の写真には、ピントが合っていないながら40点の半月形刃器を数えることができ（写真4）、宮崎県1929掲載写真についても左上の木枠内に10点、左下の木枠内に5点見られる（写真9）。この点数からは、偶然の産物ではなく、一定の目的でもって量産された石器と見られるのであるが、類品について、延岡周辺のみでなく、剥片石器を製作使用した宮崎県内の旧石器～弥生時代までの公開された資料の中にも見たことがない。これは、半月形刃器が延岡周辺のある時期に限定された石器である可能性も暗示している。その編年的位置や他石器との関係、用途等の性格付けがなされることが期待され、将来に備えて写真から得られる情報について整理しておきたい。

半月形刃器の石材は、モノクロ写真であるが、その色合いや石器表面の光沢具合等より、安山岩系・姫島産黒曜石・チャート等のようなものである。平面は、一辺が直線、もう一辺が外湾することを基本とする半月形であり、器面の様子からは平坦剥離で薄手に仕上げられているように見える。いくつかは、直線的な辺の中央がやや浅く内側に湾曲するもの、外湾する辺が二辺の直線からなることで頂点が3箇所になるものがある。大きさは約2 cm×1 cmに収まっている。前節で紹介した関西大学博物館所蔵本山彦一蒐集考古資料中のチャート製異形石器1点も、半月形刃器に相当すると考えられる（第1図2）。なお、ひとまず半月形刃器と呼んできたが、有馬純一郎が呼んだ蝶形という名称も、半月形石器¹⁰⁾との混同といった研究史上の紛らわしさを回避する点や、半月形でないいくつかの資料にも該当できる呼び名であり、名称の候補に加えておきたいと思う。

有馬コレクションの中から、剥片尖頭器と半月形刃器を取り上げ、その今日的意味を述べてきた。同コレクションの実物が失われたことは、延岡地域の考古学に留まらない大きな損失であったが、実物がないことによる限界を超えて、その資料価値は大きいのである。

5 おわりに

今回、有馬七蔵に関する全ての資料を網羅できているのではないけれども、有馬七蔵とそのコレクションの実態解明、さらには考古学的活動の学史的意義への顕彰にいくらか寄与できたものと思う。宮崎県における考古学史の黎明期を垣間見る1つの機会となれば幸いである。

謝 辞

関西大学博物館ならびに同館学芸員の山口卓也氏には、貴重な資料を十分に調査する機会をいただいた。長野県の諏訪市博物館には藤森栄一所蔵写真を提供いただき、亀割均館長、中島透氏には大変お世話になった。また、宮崎県総合博物館の石川悦雄氏には、調査の方向性を示すとともに、宮崎県内の考古学史やその位置づけについて多大な御教示をいただいた。宮崎大学の柳澤一男教授、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の芝康次郎氏、宮崎県埋蔵文化財センターの今塩屋毅行氏、宮崎県立図書館情報提供課には文献収集等でお手を煩わせた。延岡市教育委員会の山田聡氏、旧 北方町教育委員会の小野信彦氏にも、有馬七蔵に関することや延岡周辺の石器資料について御教示いただいた。文末であるが、記して感謝の意を表したい。

【註】

- 1) 有馬七蔵について、石川恒太郎の紹介等の他に、有馬七蔵78歳の1940年に開かれた大阪毎日新聞「上日向の古代文化を語る座談会」（以下、毎日）や翌1941年の大阪朝日新聞「異色を趁うて⑤」の記事（以下、朝日）等にも多くのエピソードが出てくる。なお、「上日向の古代文化を語る座談会」メンバーは、「九水延岡支部社員 有馬純一郎、延岡市史編纂主事石川恒太郎、延岡市会議員児玉保、曾根賢、延岡市会議員門馬豊次、中村・龍原記者」と記事にある。有馬純一郎は有馬七蔵の長男である。これら新聞記事や石川1949の記述によって有馬七蔵について補足しておく。有馬は、子供の頃より化石に興味があったといい、有馬10歳の時、化石を求めて掘った貝塚からの出土品を亮天社の教師である馬目成三に評価してもらったことや（朝日）、亮天社に通っていた15歳前後の頃、元延岡藩家老で漢学者である原時行に磨製石剣を見せられた経験等により、古器物にも興味を深めてゆく（石川1949）。亮天社について補足すると、旧延岡藩藩校の廣業館が閉校した後の1873（明治6）年に私立中学校延岡社学（1875（明治8）年に亮天社と改称）が設立され、1903（明治36）年の県立延岡中学校の創立でもって廃校となったが、その間、県内唯一の私立中学校として多くの人材を輩出した（甲斐1986他）。亮天社の学生名簿に有馬七蔵の名がある（大野・甲斐1986）。有馬七蔵は、その後、南方村（現在の延岡市南方地区）の学校教員を長く勤め、その間、南方村周辺をくまなく歩いて考古資料を収集した。有馬コレクションの大半は南方村周辺主のものであるが、平岩村（現在の日向市平岩地区）へ教員として転任した際の平岩村採集品も一部含まれる。また、コレクションを求めて、海外からの見学もあったという（毎日）。1935（昭和10）年の昭和天皇行幸の際にも玉類や石器の数々を天覧品として出展した（毎日）。この他、有馬について「言われることは実物に基づいて結論を得るという科学的姿勢」であったと石川恒太郎は評している（毎日）。
- 2) 『蔵六随筆集』（若山1926）には随筆ならではの面白いエピソードが多くある。例えば、踏査中に「長峰中島二氏屢々自然石を採って濱田教授に見せます教授は笑ひつつ『成程使へば使へませうが使った痕跡がありません』と言はれます。」、あるいは喜田について「元氣益々旺盛で善談佳謔口を衝いて出ます。」、梅原の体型が昨年より肥えたこと等が描かれている。
- 3) 1925（大正14）年は、鳥居龍蔵による2回目の延岡調査であり、同10月24日には発掘品の分類作業にも従事している。また、1929（昭和4）年の鳥居龍蔵による延岡調査に助手として加わっている（鳥居1935）。
- 4) 三浦敏が坪井正五郎を案内して、児湯郡・東臼杵郡・西臼杵郡の史跡調査を行った際、「此日午前は当地所蔵者の石器を借りて之を調査す其種類は石斧石鏃石錐等にして皆西臼杵郡地方の遺物を収集せしものに係る（後略）」（『延岡市史』にある三浦敏「三十二年四月児湯及東西臼杵郡巡回記事」）とある。これについて、三浦の案内で坪井が見たのは、おそらく有馬コレクションであったと石川恒太郎はみている（大阪毎日新聞「上日向の古代文化を語る座談会」1940年の石川恒太郎による記事）。ただし、有馬が採集したのは東臼杵郡なのであり、三浦の言う西臼杵郡ではないため、石川恒太郎の思い違いの可能性もある。
- 5) 本山彦一は、1853（嘉永6）年に熊本県で生まれ、慶応義塾で学んだ後、兵庫県学務課長、神戸師範学校長等を経て大阪毎日新聞社相談役になり、1903（明治36）年には同社社長に就任、1927（昭和2）年には富民協会を設立、1930（昭和5）年には貴族院議員に選出された人物である。考古学への造詣が深く、西都原古墳群第一次調査に記者（東野善太郎）を派遣するだけでなく自らも立ち会った。1911（大正元）年12月25・26日付けの日州新聞記事によれば、12月23日午後7時に神戸より木浦丸に乗船、細島より上陸し、同25日午後7時から、妻町石川亭で上下穂北村有志主催の濱田耕作他の歓迎慰労会に参加している（石川1988）。宮崎県との関わりで言えば、1903（明治36）年12月15～19日等に宮崎を訪問している（故本山社長伝記編纂委員会1937）。なお、関西大学所蔵本山彦一蒐集考古資料18,945点は、現在、国の登録有形文化財（美術工芸品考古資料の部）に指定されている。
- 6) MY-Sは0001から1000番台までで関西大学博物館蔵本山彦一蒐集資料の石器時代遺物、MY-Uは4000番台で同資料の番号未登録・不明資料であることを示すコードである。本山彦一蒐集考古資料の資料調査について、2011（平成23）年7月8日、関西大学博物館において実施し、宮崎県内資料について実見できた。資料コードの順に、器種名、墨書きあるいは朱書きの内容等について第2表に記した。一部、関西大学博物館2010と所見等が異なっ

いるが、その責は藤木にある。

- 7) 余談であるが、MY-S 1071磨製石鏃は台紙に縫い付ける保管方法であった。これは、藤森栄一がかつて「実見するのに厄介」と記したように（藤森1936）有馬コレクションが1点1点糸で縫い付けられていた点と一致するのは偶然であろうか。
- 8) 「九州廻記」は、1936（昭和11）年に東京考古学会員として弥生土器等の調査を中心に九州各地を訪ねた記録であり、郷愁と感傷の多くの言葉に彩られた内容は考古学の可能性とロマンを戦後考古ボーイの中・高校生に深く印象付けた（戸沢1995）。
- 9) 採集地が延岡市南方周辺であったと仮定し、地層に関して予想される当時の認識を踏まえれば、“洪積層の泥流”の候補には阿蘇4火砕流、始良Tn火山灰や表土下の浅い位置にあたる鬼界アカホヤ火山灰等が挙げられる。
- 10) 半月形石器は、縄文文化の起源をめぐる論争の中で渡来石器として取り上げられてきた（小野田1983・橋本1988ほか）。

【主要参考・引用文献】

- 石川悦雄1988『西都原発掘75周年展』（図録）宮崎県総合博物館
- 石川恒太郎1949『延岡市史』延岡郷土研究会（1981年に国書刊行会より復刻版）
- 石川恒太郎1970「鳥居博士と宮崎県」『鳥居龍蔵博士の思い出』徳島県立鳥居記念博物館
- 石川恒太郎1986「日向考古学の先駆者 有馬七蔵のこと」『えとのす』第31号、新日本教育図書株式会社
- 市山幸作1983『太平洋戦争延岡空襲戦災記』延岡空襲戦災記刊行会
- 大野正年・甲斐 勇1986「前記外亮天社組織、教師、卒業生（中退を含む）」『延岡亮天社の概況と周辺』亮天社出版委員会
- 小野田正樹1983「半月形石器」『縄文文化の研究』第7巻、道具と技術、雄山閣
- 小野信彦1989「宮崎県の旧石器時代研究史」『宮崎考古』石川恒太郎先生米寿記念号上巻、宮崎考古学会
- 甲斐 勇1986「延岡藩学と亮天社の沿革」「女兒教舎併設と亮天社の廃校」『延岡亮天社の概況と周辺』亮天社出版委員会
- 関西大学博物館2010『関西大学博物館蔵本山彦一蒐集資料目録』
- 喜田貞吉1933「我が国発見石鏃の脚に就いて（一）」『考古学雑誌』第23巻1号、日本考古学会
- 小松眞一1924「日向発見石鏃の或様式」『人類学雑誌』第39巻第7・8・9号
- 故本山社長伝記編纂委員会1937『松陰本山彦一翁遺稿』大阪毎日新聞社
- 末永雅雄1934『本山考古室目録』
- 諏訪市博物館2011『諏訪地域考古資料 藤森栄一蒐集品目録』
- 戸沢充則1995「解説 永遠の「かもしかみち」」『かもしかみち』学生社
- 鳥居龍蔵1935『上代の日向延岡』
- 延岡市教育委員会社会教育課1979「第2章1 指定経過」『史跡南方古墳群保存管理計画書』
- 橋本勝雄1988「縄文文化起源論」『論争・学説 日本の考古学』第2巻、雄山閣
- 東臼杵郡史蹟調査会1926『第二回 第三回 延岡附近古墳調査』
- 藤森栄一1936「九州廻記（一）」『考古学』第7巻第8号、東京考古学会（1995『かもしかみち』（解説付新装版）学生社）
- 宮崎県1929『宮崎県史蹟調査 第七輯 東臼杵郡之部』
- 宮崎県1989『宮崎県史 資料編（考古1）』
- 吉留秀敏1999「忘れられた先駆者－宮崎の“かもしかみち”－」（福岡旧石器文化研究会ホームページ：ハカタントロボス掲載）
- 若山甲蔵1926『蔵六随筆集』宮崎県政評論社

旭台地下式横穴墓出土鉄鏃における X線CT撮影を用いた線刻・穿孔判別の有効性について

嶋 田 史 子

1 はじめに

宮崎県西諸県郡高原町に所在する旭台地下式横穴墓群は、1975年の発掘調査により13基の地下式横穴墓が確認されている。副葬品として大刀、剣、鉄鏃、刀子が出土しており、9号墓からはこれら以外に鉄銚、貝輪、鉄鏃では二段逆刺鉄鏃が出土している（宮崎県教育委員会1976、宮崎県2003）。旭台地下式横穴墓群の造営時期の中心は、近年の見解では古墳時代中期前半段階となっている（九州前方後円墳研究会2001、和田2007、吉村2011）。

今回、X線CT撮影を試みるきっかけとなったのは、奈良県立橿原考古学研究所の吉村和昭氏が旭台地下式横穴墓出土遺物の資料調査の際に、鉄鏃に見られる亀裂のような縦筋は線刻の可能性のあるのではないか、丸い窪みについては穿孔か刻印のどちらなのか、という疑問を持たれたことによる。

線刻（刻印）を有する鉄鏃は、県内内陸部の地下式横穴墓より出土する鉄鏃に散見される（宮崎県1997）。旭台地下式横穴墓では報告書刊行段階で線刻のある鉄鏃は報告されていないが、その後の収蔵・データ整理の中で数点確認されている（西都原考古博物館2009）。また近年の論考の中では、鏃身部に線刻を施すなどの要素を南九州の独自性としてとらえている（鈴木2002、川畑2010）^{註1）}。

X線CT撮影は遺物を輪切りにすることで、肉眼では見えない断面の情報を得ることができるため、考古遺物では土器・埴輪の接合痕跡の観察より、製作技法の解明に一役かっている（橋本2011）。鉄製品については至近の事例で福岡市の元岡G-6号墳より出土した象嵌大刀について、大刀の構造はもとより象嵌の線を打ち込んだ順番、重なりなど詳細な観察を行っている（上角2011）。

九州歴史資料館では、X線CTスキャナの設備を備えており、今回、鉄鏃の穿孔・線刻の判別を行うために、旭台地下式横穴墓出土鉄鏃の一部を撮影して頂いた。その中で9号墓、11号墓出土鉄鏃2点についての成果を報告する。

2 X線CT撮影の手法と成果

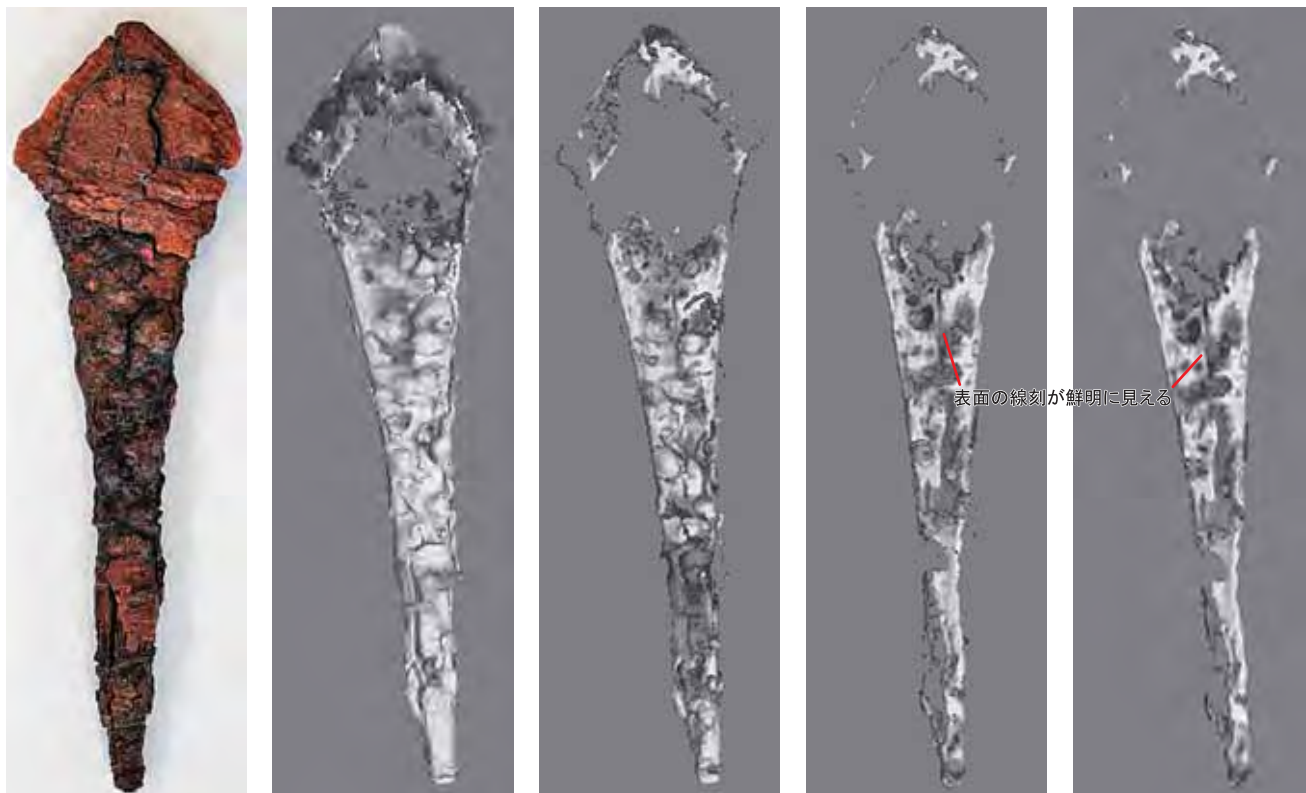
(1) 旭台9号地下式横穴墓出土圭頭鏃 ―線刻の有無の判別―

9号墓出土の鉄鏃の中には、今回撮影対象のもの以外に2点肉眼で線刻が確認されている（西都原考古博物館2009）。今回撮影して頂いた鉄鏃で線刻はこれまで認識されておらず、表面に縦筋が観察されることから線刻の可能性を吉村氏が指摘した。裏面については第1図の写真からも見てとれるように、肉眼では何の痕跡も確認できない。

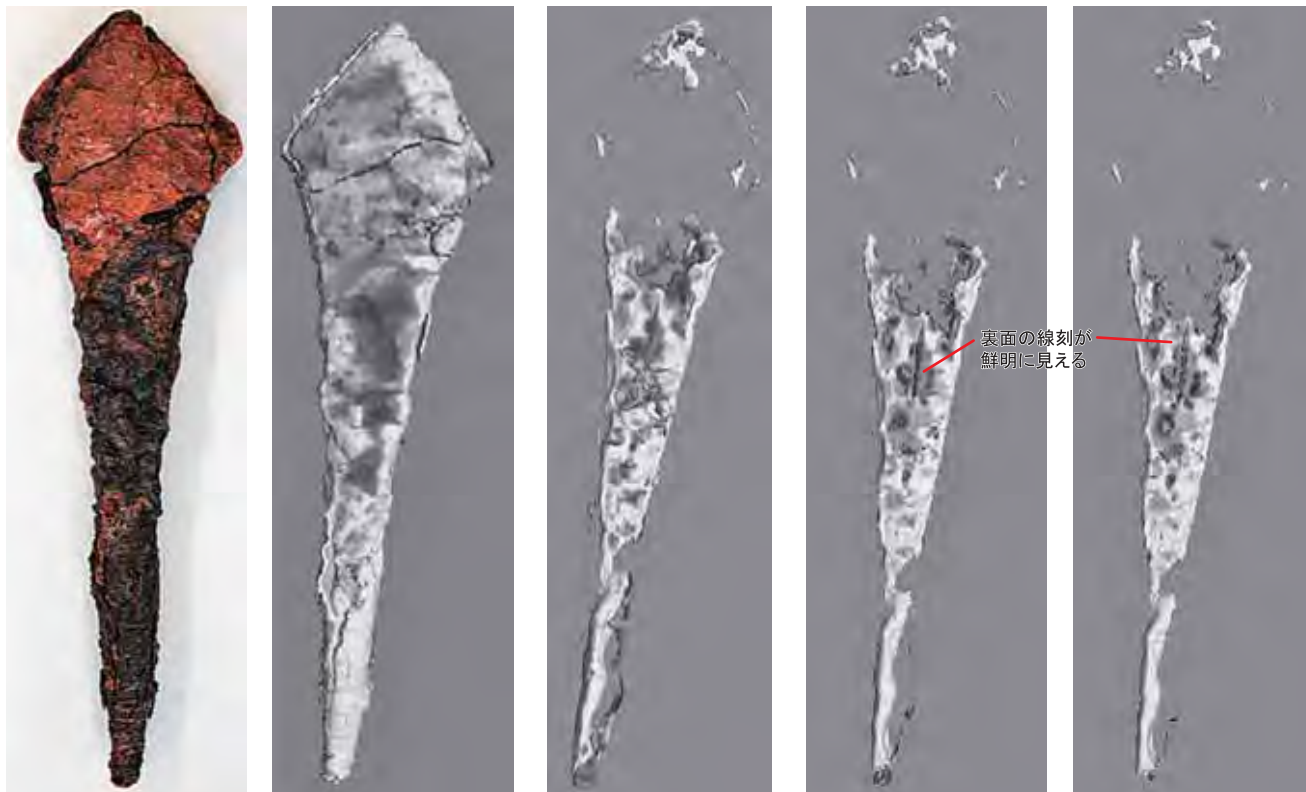
その他の遺物所見として、刃部には表裏面に何らかの有機質が残っている。また茎部分には矢柄と口巻きの一部が残り、その下層には繊維の巻きつけが見られる。

〈手法〉X線CT撮影を行って頂き、撮影後の画像解析段階で表面裏面双方から徐々に透過を強くし、平面で線刻の有無を確認した。次に平面で認識した線刻と思われる箇所を横断面を輪切りにし、断面で線刻の痕跡を確認した。

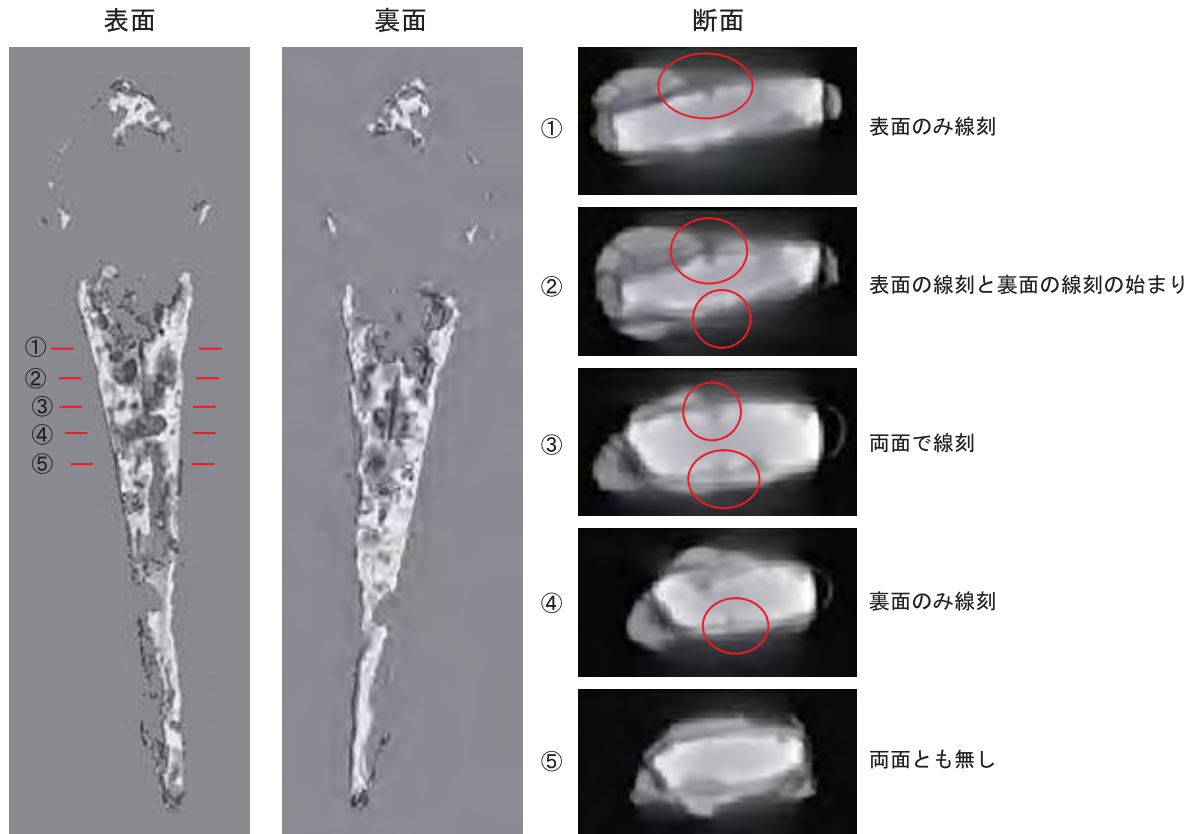
表面より



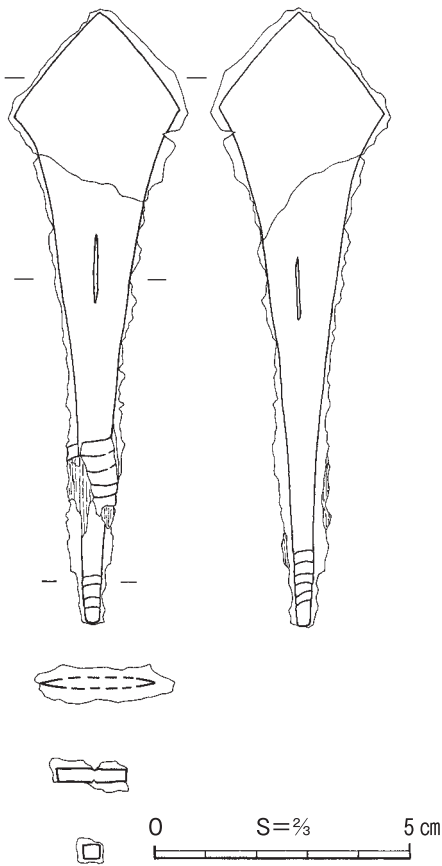
裏面より



第1図 9号墓出土鉄鏃の写真及びX線CT撮影画像(1)



第2図 9号墓出土鉄鏃のX線CT撮影画像(2)



第3図 9号墓出土鉄鏃実測図

〈成果〉平面の撮影から線刻は両面で確認できる。さらに線刻は断面でも確認でき、平面で確認した位置と対応している(第2図)。画像の精度上明瞭ではないが、線刻の断面形はVの字となっている^{註2)}。

表面の線刻は、肉眼で亀裂のように見えた箇所と対応しており一方、裏面では肉眼で何の痕跡も確認できなかった箇所に線刻が確認された。線刻の長さは両面とも約1.2cmであった。

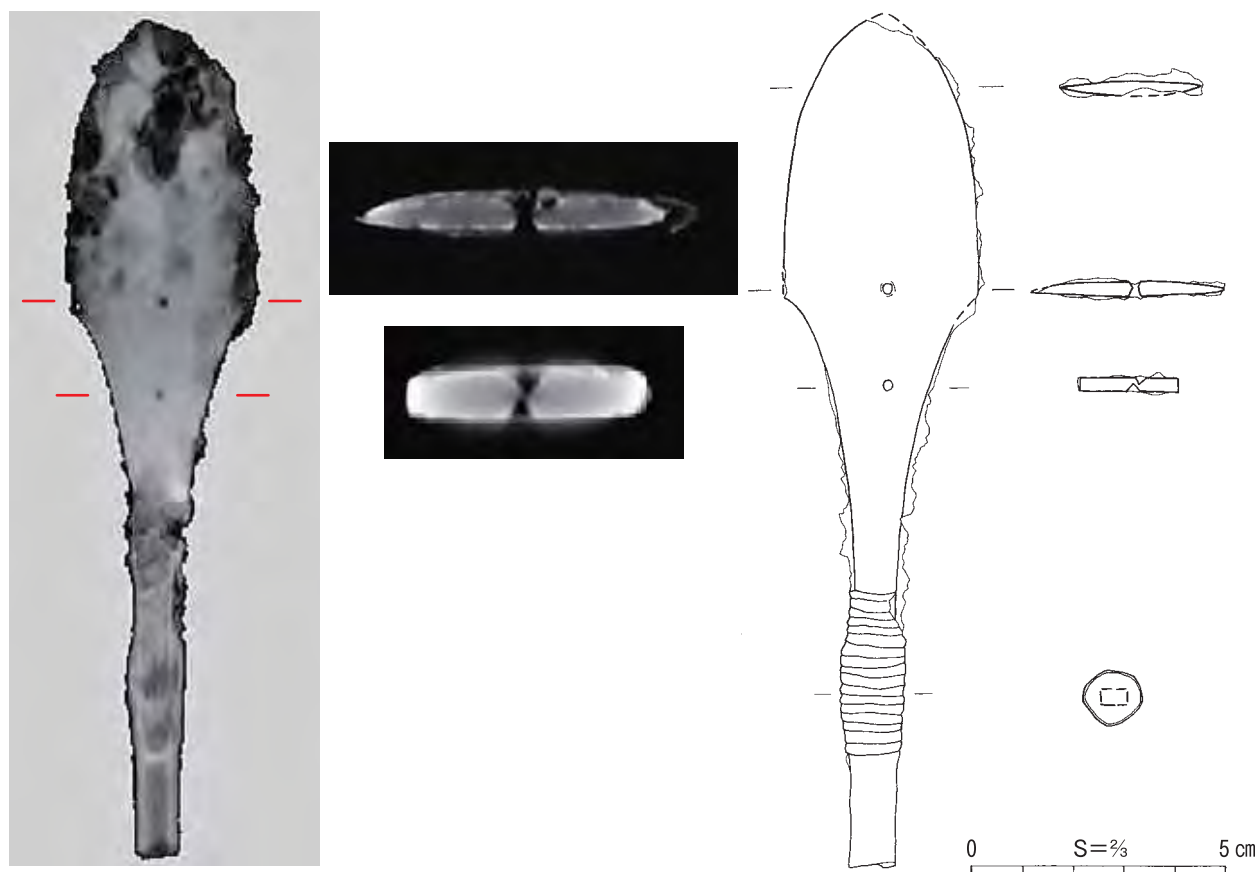
(2) 旭台11号地下式横穴墓出土三角形鏃－穿孔・刻印の判別－

肉眼観察では上部1箇所の丸い窪み、穿孔もしくは刻印を確認していた。

〈手法〉X線CT撮影を行って頂き、平面で丸い窪みの箇所を確認し、その部分を輪切りにして断面情報を得る。

〈成果〉X線CTに伴う高精度なX線撮影の結果、肉眼で把握していた上部1箇所に加え、新たに下部1箇所で穿孔もしくは窪みが確認された。下部のものは上部に比べ輪郭がぼやけてお

り透過に差が見られる。平面で確認された2箇所の○部分の断面を輪切りにしたところ、表裏双方からの両面穿孔を行っていることがわかった。さらに上部では貫通しているのに対して、下部では表裏面にズレが見られ、おそらく貫通していない状況が確認された。下部は穿孔を目指していたのであれば失敗していることになる。その他、断面の画像からは幅2.5mm程の先端が尖った工具の使用を想定することができる。



第4図 11号墓出土鉄鏃のX線CT画像・遺物実測図

4. まとめ

今回X線CT撮影により、亀裂が見られた箇所や肉眼で何の痕跡も見られなかった箇所から線刻が確認された。また、穿孔・刻印の判別についても本来錆に埋もれて肉眼では確認できない断面の情報を得ることで、判別はもちろんのこと穿孔方法まで言及することができた。今後も新たな知見を得られる可能性が高いと思われる。

過去に保存処理された遺物を再処理する際に、樹脂を除去した段階で線刻が見えてきたという経験がある。今回の成果からも、まだ錆に埋もれた線刻が存在する可能性を孕んでおり、今後それらを明らかにするためにX線CT撮影による判別は有効であると思われる。そして保存処理を行う段階でも事前調査をさらに重要視し、その上で錆の落とし具合等を留意する必要があると考える。

九州歴史資料館の村田忠繁氏、加藤和歳氏には大変お世話になり、X線CT撮影等に関して有益なご教示を頂きました。奈良県立橿原考古学研究所の吉村和昭氏には、ご自身の観察所見を御教示頂き、また

公表することを許可頂きました。末筆ながら記して厚く御礼申し上げます。

註1) 鈴木氏は、「線刻の確認例は地下式横穴墓独自の良好な遺存状態とも関連しており、注意が必要である」と指摘をしている。また川畑氏は大型定角式鉄鏃の整理の中で鏃身部への装飾として線刻や穿孔について言及しており、鏃身部に1点の穿孔を施す鉄鏃例として取り上げている旭台11号の鉄鏃は今回のX線CT撮影により、穿孔は2箇所であることが判明した。

註2) 9号墓出土鉄鏃はX線CT撮影時、遺物の設置が斜めになってしまい、断面もその状態のまま切っているため、①～⑤の写真は厳密には鉄鏃の長軸に合わせた本来の断面形とは若干ずれがある。

【参考文献】

- 上角智希ほか 2011「福岡市西区元岡G-6号墳出土銘文大刀の事前調査について」第16回中・四国九州保存修復研究会発表レジメ
- 川畑 純2010「大型上角式鉄族の変遷と雲部車塚古墳の鉄族組成」『研究紀要』第3号 雲部車塚古墳の研究 兵庫県立考古博物館
- 鈴木一有2002「九州における古墳時代の鉄鏃」『考古学ジャーナル』No496
- 橋本達也2011「古墳時代鹿児島県のやきものづくり」『やきものづくりの考古学』鹿児島大学総合研究博物館
- 吉村和昭2011「西諸県地域における地下式横穴墓の墓群形成と埋蔵原理－立切・旭台両地下式横穴墓群を対象として－」『平成23年度宮崎考古学会研究資料集』宮崎考古学会県南例会実行委員会
- 和田理啓2007「楠牟礼地下式横穴墓」宮崎県埋蔵文化財センター
- 和田理啓2007「九州における古墳時代中期の鉄鏃」『第10回九州前方後円墳研究会宮崎大会発表要旨・資料集 九州島における中期古墳の再検討』九州前方後円墳研究会
- 九州前方後円墳研究会 2001『九州前方後円墳研究会資料第Ⅱ分冊資料編 九州の横穴墓と地下式横穴墓』
- 宮崎県教育委員会 1976「Ⅰ 旭台地下式横穴墓群発掘調査」宮崎県文化財調査報告書 第19集
- 宮崎県立西都原考古博物館 2009『宮崎県内出土鉄製品データベース』
- 宮崎県 1993『宮崎県史 資料編』考古2
- 宮崎県 1997『宮崎県史 通史編』原始・古代1

隼人の楯の文様についての一考察 (2)

崎 田 一 郎

はじめに

昭和38年12月3日から昭和39年3月19日にかけて奈良国立文化財研究所が実施した平城宮発掘調査の第14次調査で出土した隼人の楯の表面には渦文と鋸歯文の2種類の文様が描かれている(図1参照)。平成22年度の本館の研究紀要において楯に描かれた渦文について、南九州および南西諸島の祭祀や儀礼から一つの考察を述べたが、今回は、渦文と鋸歯文の両者について考えられる点をあげてみたいと思う。

1 南西諸島の祭祀・儀礼にみられる文様について

図3～6は、南西諸島と南九州の祭祀・儀礼に現れる来訪神である。図3は、鹿児島県硫黄島の八朔踊りの「メンドン」、図4は鹿児島県悪石島の盆行事の「ボゼ」、図5は鹿児島県竹島の八朔踊りの「タカメン」、図6は鹿児島県下甕島の「トシドン」である。これらの来訪神の仮面を見てみると人間の顔とは全く異なったものをモチーフにしていることがわかる。出村卓三(鹿児島県歴史資料センター黎明館資料収集協力員)氏は、これらの仮面を「精霊型の面」と呼んでいる。そして、精霊型の面をつけた神々は、神話や宗教の影響で神を人の形で表現する以前の原初的な神の姿を表現したものとしている。

これらの精霊型の面に描かれている文様を見てみると「トシドン」はネズミのようなほ乳類の顔がモチーフになっているため目立った文様は見られないが、「タカメン」と「メンドン」には耳の位置にあたる部分に渦文、「ボゼ」には赤と黒の縞模様と目と口の位置に渦文状の丸文が描かれているのがわかる。これらの中で隼人の楯の文様と相似している文様を持つものが「メンドン」の仮面である。

硫黄島の八朔踊りは、旧暦の8月1日と2日の両日にかけて行われる。八朔踊りは、島の悪霊を祓う伝統行事で、祭りでは、矢旗を背負い、太鼓を抱えた踊り手による舞が終わったところに「メンドン」が現れる。そして手に持ったスッペン木の芝で作った神木で見物人を叩いて回り、厄を祓うものである。

この「メンドン」の仮面を見てみると左右の耳と思われる部分に赤と黒の2色で渦巻き状の文様が描かれていることがわかる。(地元の方によると、かつての「メンドン」の仮面は、この渦巻き状の輪が現在のものより少なかったそうである。)この左右の渦巻きは、それぞれ独立した渦巻きに見えるが、中央の顔の部分で繋げるとS字文を描くことが確認できる(図7、8参照)。



図1 隼人の楯復元図

奈良国立文化財研究所 1978 『平城宮発掘調査報告Ⅹ 宮城門・大垣の調査』奈良国立文化財研究所学報第34冊より



図2 下甌島、竹島、硫黄島、悪石島位置図



図3 メンドン



図4 ポゼ



図5 タカメンの仮面



図6 トシドン



図7 メンドンの仮面

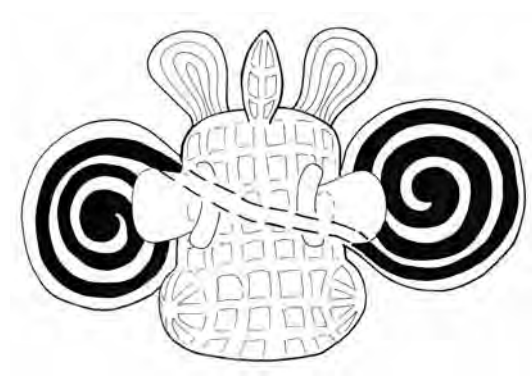


図8 メンドンの仮面の渦文



図9 鹿谷寺銅鐸

辰馬考古資料館 1988 『考古資料図録』より



図10

兵庫県社会文化協会 1969 『神戸市』桜ヶ丘銅鐸・銅戈 (図版篇)』より

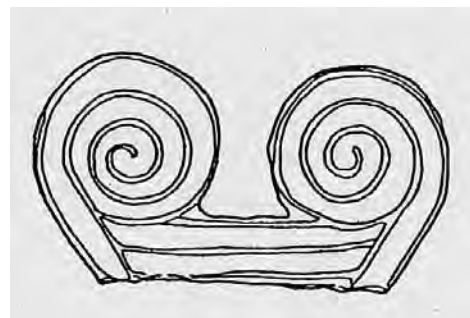


図12 銅鐸の渦文飾耳破片

高橋信昭「愛知県朝日遺跡出土の銅鐸片」
1982 『考古学雑誌』第68巻第1号より



図11

兵庫県社会文化協会 1969 『神戸市桜ヶ丘銅鐸・銅戈 (図版篇)』より



図13 銅鐸の渦文飾耳破片

沼津市教育委員会 1977 『沼津市藤井原遺跡第3次発掘調査概報』より

渦文は、縄文土器や耳環などの縄文時代の遺物に見ることができ、弥生時代には銅鐸や一部の土器や木製品にも描かれている（図9～11参照）。辰巳和弘氏は近年弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡から銅鐸の渦文飾耳の破片（図12, 13）の出土例が増加していることに注目している。そして、これらに渦文部分が完全に遺っていることから、渦文を神聖視し、銅鐸から意図的に分離して所持しようとした人々の存在を指摘している。また、これらの中には、藤井原遺跡（静岡県）から出土したもの（図13）のように紐を通すための小さな孔が穿かれ、ペンダントとして用いられたと考えられるものも存在することから、祭祀を司った者が聖なる渦文によって邪霊から身を護る護符として用いたという見解を述べている。

一方、「精霊型の面」を着けた原初的な姿をした来訪神に渦文やS字文が見られることは、来訪神の持つ厄除けや魔除けの役割がこれらの文様に込められていると共に、これらの文様が太古から南九州の地で描かれ、人々の生活に深く浸透し、周知されていた形状であったことが考えられる。

2 鋸齒文の由来と意味について

隼人の楯の頂部と底部には、鋸齒文が描かれている。鋸齒文は連続する5つの鋸齒を二重に施文しており、外側を黒、内側を赤で塗色している。

小林清樹氏は、鋸齒文の起源を西周時代の青銅で長短の剣をおさめる連鑄式劍鞘本体の縦に交互に入れた三角形の透かし文様とし、これを二匹の蛇が絡み合いながら上昇する様子のうち交点付近を透かしと表現したものとしている。その際、三角形が蛇のウロコやマムシの頭部の形状を連想させることも文様の要素になったと考察している。また、剣と蛇は、敵対するものを倒す（もしくは殺す）という同一性から、「辟邪」としての観念で捉えられ、このことから三角形の透かし文様は、蛇を象徴化した辟邪の図像表現としている。

三角形の透かし文様は西周後半に連続Z字文（雷光文）となり、朝鮮半島に伝わって鋸齒文に変化した。その後鋸齒文は、弥生時代前期末に銅鐸の文様に取り入れられ、弥生時代中期前半に播磨で土器、吉備で器台や壺、弥生時代後期末に吉備の特殊器台に描かれるようになった。

県内出土資料では新富町百足塚古墳出土埴輪（図14）の一部に鋸齒文の意味を考えるうえで興味深いものがある。百足塚古墳は、一ツ瀬川北岸の台地上に分布する祇園原古墳群内にある前方後円墳で古墳時代後期の築造と推定されている。平成10～12年度に実施された調査の結果、周溝と同様に墳丘を完周する周堤とそこから西側くびれ部に向かう幅2mの土橋が確認された。また周堤に樹立されていたと考えられる大量の形象埴輪片が出土した。これらの中で、図16の盾型埴輪、図17の袈裟状の衣服を付けた女性、図18の器を捧げ持つ女性には、三角形が描かれているのが確認できる。また、図14の柵型埴輪は頂部を鋸齒状に造作してある。

図15によると盾型埴輪は、墳丘部分から出土していることがわかる。盾の基本機能が防御であることから、盾型埴輪に三角形文を描くことで邪霊から埋葬者と墳丘を守る機能を高めようとしたことが考えられる。また、図17と図18のモデルとなった女性は、宗教儀礼で用いる袈裟状の衣服を身に付けていることから神事に携わった巫女であったことが考えられる。三角形文が描かれた衣服を巫女が着用することで、神事の際に邪霊が取り付かないようにしていたことがうかがわれる。



図14 百足塚古墳出土柵状埴輪

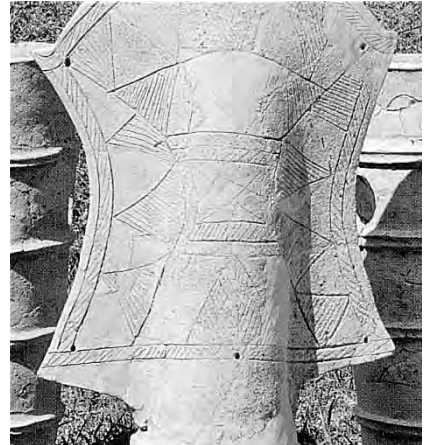


図16 盾型埴輪

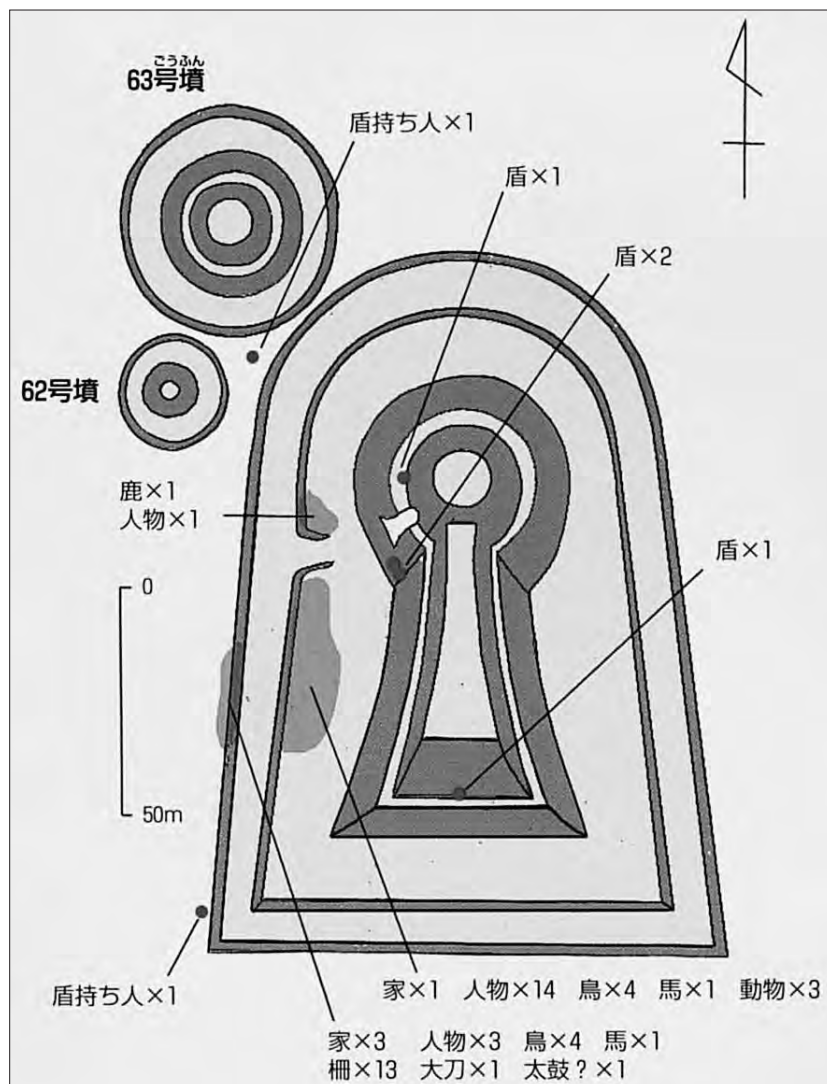


図15 百足塚古墳復元模式図と形象埴輪出土位置図



図17 袈裟状の衣服を付けた女性



図18 器を捧げ持つ女性

図14～18は、新富町教育委員会 2002
『特別展示図録百足塚の埴輪』より

柵型埴輪について小林清樹氏は、近畿地方の古墳における配列の仕方から、祭場の内部と外部を区別化する「境界・結界」としての機能をもち、三角形の飾り文様が辟邪の意味を持つとしている。百足塚古墳において柵型埴輪は、古墳を二重に囲む周堤の外側周堤部分から多くの形象埴輪と共に出土している。同墳西側の土橋から周堤上は、形象埴輪の出土状況から祭祀の場として用いられていたと考えられている。その祭祀場の最も外側部分から柵型埴輪が出土したことは、同墳においても柵型埴輪が近畿地方のそれと同じ役割を果たしていたことが考えられる。

3 まとめ

文様の由来や起源を見ると、渦文は在地型の古い文様であり、鋸歯文は大陸に起源を持ち、韓半島を経由して伝わった文様と考えられる。このことから隼人の楯は頂部と底部に渡来型、中央部に在地型のデザインを施したものと言えるであろう。

一方、文様の意味を見ると、2つの文様は、共に邪を祓い、清浄と護持の媒体の役割をするという共通の意味を持っている。このことから楯に2種類の辟邪の模様を描くことで、楯の防御機能を高めようとしたことが考えられる。なお、鋸歯文を楯の上下に配置したのは、鋸歯文に「境界・結界」の意味が込められているからであろう。

4 終わりに

以上、隼人の楯の文様について、一つの考察を述べてみた。今後も南九州や南西諸島、東アジア南部や東南アジアの習俗を調査し、過去から現在にいたる日本とこれらの地域との様々なつながりを見出していきたいと思う。

5 謝辞

本稿の作成にあたり、メンドン、ボゼ、タカメン、トシドンの貴重な写真を提供して下さった出村卓三氏に心より感謝の意を表する。

【参考文献】

- ・奈良国立文化財研究所 1978 『平城宮発掘調査報告Ⅸ 宮城門・大垣の調査』 奈良国立文化財研究所学報第34冊
- ・小林青樹 2009 『弥生集落の祭祀機能と景観形成』 国立歴史民俗博物館研究報告 第149集
- ・高橋信昭「愛知県朝日遺跡出土の銅鐸片」 1982 『考古学雑誌』第68巻第1号
- ・新富町教育委員会 2000 『祇園原古墳群3』 新富町文化財調査報告書 第30集
- ・新富町教育委員会 2003 『祇園原古墳群6』 新富町文化財調査報告書 第36集
- ・新富町教育委員会 2009 『祇園原古墳群12』 新富町文化財調査報告書 第54集
- ・新富町教育委員会 2002 『特別展示図録 百足塚古墳の埴輪』
- ・辰馬考古資料館 1988 『考古資料図録』
- ・兵庫県社会文化協会 1969 『神戸市桜ヶ丘銅鐸・銅戈（図版篇）』
- ・沼津市教育委員会1977 『沼津市藤井原遺跡第3次発掘調査概報』

- ・辰巳和弘 1992 『埴輪と絵画の考古学』 白水社
- ・中村明蔵 1978 『隼人の楯』 学生社
- ・中村明蔵 1993 『隼人の研究』 丸山学芸図書
- ・中村明蔵 2000 『神になった隼人 日向神話の誕生と再生』 南日本新聞社
- ・杉岡幸徳 2007 『奇妙な祭り 日本全国〈奇祭・珍祭〉四四選』 角川書店
- ・田中聡 2007 「隼人・熊襲と古代国家」『日向・薩摩・大隅の原像 南九州の弥生文化』大阪府立弥生文化博物館

体験「カラムシから布をつくろう」

島 木 良 浩

1 はじめに

「昔の人はどんなものを着ていたのですか。」という博物館を見学に来た小学生の素朴な質問がこの講座のきっかけとなった。3年前の春のことである。

「縄文時代の人には、貫頭衣という頭からかぶる服を着ていました。」と私が答える。「何でできていたのですか。」という質問がくる。「カラムシという植物の茎から繊維を取って作っていました。」と答えて終わる。しかし、実際はどうやって作ったのだろう。今でもできるのだろうか。そもそもカラムシで服が作れるのだろうか。等々様々な思いや疑問がわいてきて、インターネットや書物で調べはじめ、実験を始めたのが3年前の夏であった。1年間、試行錯誤を重ねながら、2年前に体験講座「カラムシから布をつくろう」を開講した。

また、今回、カラムシの里で知られる福島県昭和村からカラムシやコースターを購入した。福島のカラムシと宮崎のカラムシを使った繊維分析を保存処理の専門員である、当館の嶋田史子が行ったのでその結果も併せて報告する。

2 カラムシの歴史

カラムシとは、イラクサ目イラクサ科の多年草植物。南アジアから日本を含む東アジア地域まで広く分布し、古来から植物繊維をとるために栽培されてきた。昔は茎を蒸して織物材料として利用していたためカラムシの名がついたといわれる。

今でこそしつこい雑草として嫌われる場合もあるが、茎の皮からは衣類、紙、さらには漁網にまで利用できる丈夫な靱皮繊維が取れるため、6000年前（縄文時代前期～中期）から栽培されてきたといわれる。このため日本に自生するカラムシは、繊維用に有史以前から栽培されてきたものが野生化した、史前帰化植物で中国から来た可能性が指摘されている。

『日本書紀』持統天皇7年（693年）条によれば、天皇が詔を発して役人が民に栽培を奨励すべき草木の一つとして「紵（カラムシ）」が挙げられている。

中世の越後国は日本一のカラムシの産地だったため、戦国大名として有名な上杉謙信は衣類の原料として青苧（あおそ）座を通じて京都などに積極的に売り出し、莫大な利益を上げた。

新潟県の魚沼地方で江戸時代から織られていた伝統的な織物、越後縮はこれで織られていた。また上杉氏の転封先であった出羽国米沢藩では藩の収入源のひとつであった。このため、カラムシの専売化をめぐり、宝暦10年（1760年）の『青苧騒動』や文化4年（1807年）の『青苧一件』が起こる。



【博物館入り口に自生するカラムシ】

新聞に次のような投稿記事があった。『戦時中は、同じイラクサの仲間のアカソ（赤麻）やヤブマオ（藪苧麻）などと共に、繊維をとるために利用された。当時、小学生だった私は、登校する際にカラムシをたくさん抱えて登校しなければならなかった。』軍服を作るためカラムシの繊維を集めていたそうである。このように、カラムシは生活に欠かせない植物であったことがわかる。

現在では、福島県昭和村の「からむし織の里」が有名である。昭和村は福島県の西部に位置し、周囲を山に囲まれた美しい山村で、伝統織物の上布の原料となる 苧麻（からむし）を栽培生産している。

3 体験講座「カラムシから布をつくろう」

(1) 講座の実際 一日目「カラムシをひもにする」

①カラムシを刈り取る。

※1本1本刈り取っていく。根元に近いところに変色していたり黴が生えていたりしているようなところは除いて、地上約20cmのところを、切り口が斜めになるように鎌で切り取る。

②刈り取ったカラムシの葉を取り除く。

※刈ったカラムシの葉は梢の方から元に向かって手を滑らせて取る。

③葉を取り除いた茎を水に約2～3時間つける。

※水は、冷たいほうが皮が剥ぎやすく、井戸水等を使っているところもあるが、ここでは水道水を使用している。講座では2～3時間水につけた。長時間つけると皮が剥ぎにくかった。



【カラムシを刈り取り、葉を落とす】



【水につける】

④茎から皮を剥ぎ取る。

※半分よりもやや根元に近い方を折り、ちょっと捻ると皮と芯の間に隙間ができる。できた隙間に親指を入れ、指を滑らせながら皮を剥ぐ。こうすると途中で裂けることなく太い皮をとることができる。1本の茎の皮が2枚になるように剥ぐのが理想である。茎の根元側から皮をつまんで剥ぐと、途中で細かく裂けてしまうという失敗を1年目は繰り返していた。



【皮を剥ぎ取る】

⑤剥いだ皮は小さく括って、再び水に約2時間つけておく。

※1年目は、どのくらいの時間水につければよいかわからず、半日つけたことがあったが、このときもつけすぎると逆に芋引きの時に表皮を削るのが難しい。



【皮を水につける】

⑥剥いだ皮を金具で引き、肉質部（緑色の表皮）をそぎ落とし繊維質を残す。

※これを「芋引き（おひき）」という。コンテナの中に水を入れ、長さ約50cm、幅約10cmの板をコンテナの中におき、芋引き具（今回はパンを切るときに使う道具「スケッパー」や体験講座で作った石包丁）で肉質部をそぎ落とすように金具を滑らせる。肉質部だけでなく繊維質ごと削ったり、逆に肉質部が残ったりするので細心の注意と力の入れ具合を念頭に置いていく作業になる。最初は、肉質部が多く残ったが、徐々に繊維質の部分が多くなってきた。参加者も黙々と作業を進め、皮を削る「シュッシュッ」という音だけが部屋の中に聞こえていた。



【芋引き】



【芋引きをする参加者】

⑦乾燥させる。

※残った繊維質のものを乾燥させる。日光が当たると茶色になってしまうので陰干しにする。しかし、数日たつと茶色く固くなったものもあった。完全な繊維質だけを残すのは、熟練の技が必要なのだと痛感した。



【乾燥させる】

⑧細かく裂いてひもにする

※乾燥したものを細かく裂いて撚りをかけながら糸にする。講座では、手で撚っていくので、細い糸にするのは難しく糸というよりもひもに近いものが完成した。



【撚りながらひもにする】



【完成したひも】

(2) 二日目「カラムシのひもを使ってコースターをつくろう」

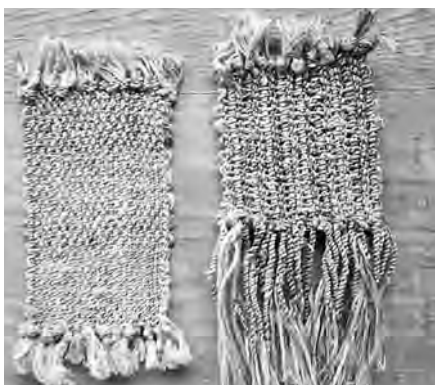
①アングインを使ってコースターをつくる

「アングイン」とは、縄文時代に使われた布のことで、縦糸は今回撚ったひも、横糸は撚っていないカラムシをそのまま使った。参加者は、専用の道具を使い、横糸に縦糸を巻き付ける独特方法（ハの字織り）でコースター作りを行った。



【コースターを作る参加者】

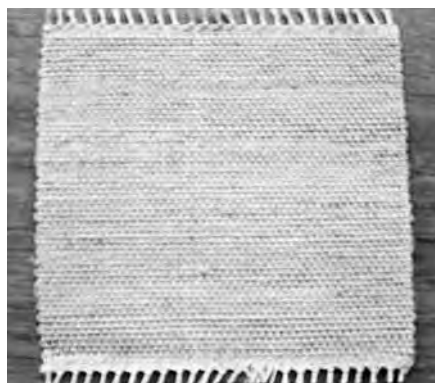
②完成したコースター



昨年のコースター



今年のコースター



昭和村のコースター

4 カラムシの繊維断面調査



西都原カラムシ



東北カラムシ

＜調査方法＞

西都原古墳群のカラムシ（以後、西都原カラムシ）と、東北地方のカラムシ（以後、東北カラムシ）を5mm程採取し、エキシボ樹脂に包埋して、繊維断面の薄片プレパラートを作成した。これを、生物顕微鏡（NikonECLIPSE55 i）の透過光下で検鏡した。写真の上段が包埋した試料で、下段が薄片プレパラートの検鏡写真つまり、繊維の断面写真である。

西都原カラムシは今年度、当館で開催された実験・体験講座「カラムシから布をつくろう」の際に古墳群に自生していたものを採取、東北カラムシは福島県昭和村で栽培され、販売しているものを使用している。いずれも苧引き後のものではあるが、乾燥度合い、お引きの熟練度合いに差異が見られる。

薄片プレパラートの写真からは、細胞の形・大きさを観察することができる。細胞の形は、楕円～扁平なもので、内腔の形は線状に細長いものが大半を占めている。また細胞同士が密着した状態にある。これらは両カラムシに共通する特徴である。一方で細胞の大きさは、西都原カラムシが約0.01mm～0.02mm程の細胞が多くを占めるのに対し、東北カラムシは約0.02mm～0.04mm程の細胞が多く見られ、特に東北カラムシではより扁平な細胞が多い。細胞の大きさは、品種や生育環境、苧引きの度合い等により異なる^{註1)}と考えられる。



苧麻（からむし）の細胞模式図
(布目1988より転載)

近年、遺跡から出土する繊維、金属製品等に錆化した状態で残る繊維について、その材質を解明すべく、薄片プレパラートや電子顕微鏡による細胞断面観察や、理化学的な分析が行われている注2)。

注1) 西都原カラムシの採取時期は6月。東北カラムシは7月～8月に採取しているということである。

注2) 奈良文化財研究所や橿原考古学研究所では細胞断面観察と赤外分光分析の両方の側面から繊維の材質調査を行っている。
(文責 嶋田 史子)

4 まとめ

今年度が、2回目の講座である。皮の剥ぎ方、苧引きの仕方、紐のより方等どれも1回目よりは上達しているが、まだまだ難しく、奥深さを感じる。特に苧引きに関しては、福島県昭和村で購入したカラムシをみても比べものにならない。繊維分析でも明らかに輝きが違う。今後も続けていき、子供が着られる程度の貫頭衣は制作したいと考えているが、カラムシの取れる時期にどれだけ苧引きまで終わらせておくかがカギになる。今年は糸つくりを糸車または紡錘車を使って作り、アングイン織り以外の織り方にも挑戦したいと考えている。

今回、カラムシの繊維分析も行った。その結果、繊維の形や大きさに違いがあることがわかった。本文にもあるように、刈り取った時期や苧引きの熟練の違い等もあるので比較自体が難しいかもしれないが、繊維の段階まで細かく分析することで、土器や鉄器に付着している繊維痕などの繊維の材質解明への何らかの手がかりとなることが期待される。

(※本体験は、古代生活体験館体験学習指導員 児玉幸子の協力を得た。)

【参考文献】

布目順郎1988『絹と布の考古学』雄山閣出版

吉松茂信2008『赤尾熊ヶ谷古墳群－鳥見山麓における古墳群の調査』桜井市文化財協会

佐藤昌憲、奥山誠義2008『下池山古墳の研究』奈良県立橿原考古学研究所

尾関清子1998『縄文の衣』学生社

竹内淳子 2000『草木布 I』法政大学出版局

宮崎県立西都原考古博物館研究紀要 第8号執筆者紹介

陳 有貝 (CHEN Yu-pei) 国立台湾大学人類学系 副教授

犬木 努 (INUKI Tsutomu) 大阪大谷大学 教授

近藤 麻美 (KONDO Asami) 大阪大谷大学 大学院文学研究科研修生

(以下五十音順)

安藤 正純 (ANDO Masazumi) 宮崎県立西都原考古博物館 学芸普及担当 主査

甲斐 貴充 (KAI Takamitsu) 宮崎県立西都原考古博物館 学芸普及担当 主査

崎田 一郎 (SAKITA Ichiro) 宮崎県立西都原考古博物館 学芸普及担当 主査

嶋田 史子 (SHIMADA Fumiko) 宮崎県立西都原考古博物館 整理専門員

島木 良浩 (SHIMAKI Yoshihiro) 宮崎県立西都原考古博物館 学芸普及担当 主査

福田 泰典 (FUKUDA Yasunori) 宮崎県立西都原考古博物館 学芸普及担当 副主幹

藤木 聡 (FUJIKI Satoshi) 宮崎県立西都原考古博物館 学芸普及担当 主査

宮崎県立西都原考古博物館研究紀要 執筆要項（投稿規定）

1. 執筆者

宮崎県立西都原考古博物館職員及び共同研究者とする。当館からの依頼原稿についてはこの限りではない。

2. 執筆内容

- (1) 研究論文・資料紹介 (2) 調査報告 (3) 研究ノート
- (4) 体験講座成果報告 (5) その他、編集担当者が適当と認めたもの

3. 原稿

- (1) 締切り 1 月末日
- (2) 提 出 原則、データ入稿とし、プリントアウト原稿を添付する。なお、画像はjpeg形式かpsd形式とする。

4. 執筆要項

- (1) 体 裁
 - ・ A 4 版、横組み、45文字×36行、MS明朝体基本
 - ・ 版面（図・表・写真）はキャプション含め、縦24.5cm、横16.5cm
- (2) 表 記
 - ・ 文字は、資料的なもの以外は、原則として現代仮名遣いで新字体とする。
 - ・ 度量衡単位は、cm、kg、mのように記号を、数量は算用数字（半角）を使用する。
 - ・ 年号は原則として西暦で表記し、和年号が必要な場合は()で併記する。
例：2011（平成23）年
- (3) 註、引用、参考文献
 - ・ 本文末尾に一括記載する。
 - ・ 註は、本文中の引用箇所には、文章の右肩に小括弧を付した番号を記入し、文章末尾にまとめて説明文を記載する。
 - ・ 引用、参考文献は、著者名、発行年、「論文名」、『書名』、巻号数、発行所、（できれば）頁数を明記する。
- (4) その他
 - ・ 本紀要のpdfファイルを作成する。（抜き刷りは原則、作成しない。）

宮崎県立西都原考古博物館研究紀要 第8号

Research Bulletin Saitobaru Archaeological Museum of Miyazaki Prefecture
Vol. 8

2012年3月30日

編集・発行：宮崎県立西都原考古博物館

〒881-0005 宮崎県西都市大字三宅5670番

TEL：0983-41-0041 FAX：0983-41-0051

印 刷：株式会社 印刷センタークロダ

〒880-0022 宮崎市大橋2丁目175

TEL：0985-24-4531 FAX：0985-27-9337



Saitobaru Archaeological Museum of Miyazaki Prefecture

